
テイルズオブジアビス 【ミュウの異世界冒険記】

にい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス 【ミュウの異世界冒険記】

【Nコード】

N3028Z

【作者名】

にい

【あらすじ】

エルドラントの最終決戦から幾分か時間が経過したある日。

ミュウはチーグルの森にて未だルークの帰りを待ち続けていた。

悲しみに耽るミュウ、そんな彼に突然運命の光が瞬く。

絶体絶命のピンチにミュウを救った光とは――

そんな有りがち設定ではありますが、ミュウの成長物語を最後まで見届けてくれると光栄です。

ちなみにこの小説も以前別のサイトにて投稿していたものです。
完結もしていますし、バックアップもそのまま残っているもので、加
筆修正しながら投稿するだけの簡単な作業です。

第1話 いきなりピンチ!? VS 骨(前書き)

初めましての人は初めまして！

TOSからの人はこんにちは！

今回投稿させて頂くのは、今からするとちょっと古い(?) だけど名作中の名作、ジァビスの長編です。

歩いて喋るソーサリーリングことミュウが主役の成長物語、最後まで見届けてもらえると光栄です。

第1話 いきなりピンチ!? VS 骨

——よしっ！ お前は今日からブタザルだ！

大好きなご主人様が付けてくれた名前。

——なんだとっ！ ブタザルのクセに生意気なっ！

尻尾を振りまわしたり、頬を引っ張ったり、時々意地悪だったけど……

——俺、変わるよ……変りたい……

『変わる』と誓ったあの日から、前以上に優しくなったご主人様。

——よしっ、ミュウ！ 俺が合図したら火を吹くんだぞ！

一緒に戦った日々、モンスターの威嚇や、障害を駆除するのが自分の役目だった。

そして……

——ミュウ、お前は仲間たちの元へ帰れ。

それがエルドラントで訊いた最後の言葉……

それ以来、ご主人様は僕の前から姿を消した。

緑浴に満ちた幻想的な森林。

チーグルの森と呼ばれるその森林は、地名通り聖獣チーグル達が群れを成して暮らしている。

その最深部には堂々と聳え立つ巨木が存在する。

チーグル達はその巨木の中を住処に生活を送っていた。

チーグルは仲間意識の高い種族である。今までも協力し合って生活を送っていた。彼らに抗争と言う言葉は似合わない。

だが、そんな彼らの輪から外れ、ずっと悲壮な表情を浮かべながら黄昏れている一匹のチーグルがいた。

お腹に『ソーサリーリング』という貴重品を身につけ、青い毛をした子供チーグル——

「あの子……森へ返ってきてからずっと元気ないわね」

「そうだね。僕達に何か出来ることがあればいいのだけれど……」

仲間のチーグル達が元気のないその子を見て、同情の眼差しを向ける。

「ずっと慕っていた主人が死んじゃったんでしょ？ 今はそっとしてあげておいた方が——」

茶色の毛のチーグルがその言葉を発したとき、ずっと仲間の言葉に無反応だった彼の長い耳がピクツと反応を示した。

そして彼——ミュウは威嚇するように毛を逆立てながら言った。

「ご主人様は死んでないですよっ！ 必ず生きて返ってくるって約束……約束を……」

言葉を詰まらせたと思ったら、ミュウは突然大粒の涙を流した。

「（約束……したはずですよ……でも……どうして帰ってこないですの……？）」

ミュウには主人と慕う人間が居た。

主人の名はルーク・フォン・ファブレ。彼はとある技術で人工的

に生み出されたレプリカという存在だった。

オリジナルよりも力も劣る彼は、当時『自分の価値』を見失いがちであった。自分がレプリカだということを卑下し、悲観的になることもしばしばあった。

しかしミュウはそれでもルークを慕っていた。

オリジナルである男よりもレプリカであるルークだけを慕った。

その一途な思いがただけルークの救いになったことかミュウは知らないが、それだけルークのことが大好きだった。

そして数年前、ルークは栄光の大地エルドラントにて、ようやく『自分の生まれた意味』を見つけることができた。

しかしそれは自らの命に危険を侵すものでもあった。

ルークは、ミュウに、そして仲間達に必ず帰ってくることを誓い、崩れゆく都市の中で、光に包まれていった。

それ以来、ルークの姿は見えていない……

「……っ！」

ミュウは大粒の涙を浮かべたまま、ダッシュでその場を去って行った。

仲間達が静止するように声を上げていた気もするが、感情的になったミュウの耳には届いていなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

涙を風に靡かせ、地を濡らしながら、ミュウはただひたすらに走る。

仲間に涙を見られたくないわけではなかった。でもなぜかあの場には居られなかった。

ミュウはただ無心で走っていた——いや、どこでもいいから一人になれる場所を求めてひたすら走っていた。

「はあ……はあ……ふう……」

住处とはかなり離れた場所でミュウは一息吐く。走っている内に涙は乾いていた。

しかし、渴いたのは涙だけではない。

「喉が渴いたですの」

小さな身体で三十分近くも走った為、ミュウの疲れはピークに達していた。

ミュウは近くの湖に身体を乗り出し、ちゅうちゅと水を飲み始めた。

「……ぷはあ……」

たくさんの水を身体に飲み入れたミュウは、そのまま水面に浮かぶ自分の顔をじっと見つめた。

その時に思うことも、たった一人のご主人様のことだけ……

「（ご主人様……今、どこにいるのです？ 会いたいのです……今すぐにでも——）」

そんな切なる願いを込めるミュウ。

ぞっ……

その時、背後から足音に似た音が耳に入ってきた。

「（みゅみゅっ！？ この重みのある足音、冷たいようでどこか暖かさを感じるオーラ……ま、まさかっ！？）」

ミュウはこの足音に聞き覚えがある。期待に膨らみを混めてミュウは静かに振り返った。

そこに居たのは――

「ご、ごごごご、ご主人様！ 帰って……帰ってきてくれたですの
~~~~~」

ミュウはたまらず、背後に居た人影に抱き付いた。

「ご主人様、ミュウはこの日をずっと心待ちにしてたですの、またお会いできてうれしいですの、すりすり~ですの。ああ、このゴツゴツとした感触、たくましい腕、冷たい温もり、間違いなくご主人さ――」

ぎゅむっ！ びった~~~~んっ！

ミュウが軽く暴走モードに入っていた最中、人影は突然ミュウの

耳を引っつかみ、地面に思いつき叩き付けた。

「い、痛いのです。ご主人様何するです……あぁっ!？」

叩きつけられたことで少し平静を取り戻したミュウは、改めてその人影を見て驚きの表情を表した。

「お、お前は……ご主人様ではないのですのっ!」

ミュウ曰く、ゴツゴツとした感触、たくましい腕、そして冷たい温もりを持った人影は臨戦体制に入っていた。

どうやらミュウがいきなり飛び付いた行為が、この相手は敵意を持っていると勝手に勘違いしてしまったみたいである。

「お、お前は……たしか……死霊スケルトンですの!」

死霊スケルトン、一言で言えば強暴な骸骨。

物理攻撃に耐性があるとは言え、水に弱いわ、風にも弱いわで、弱点の方が多く見積もられているという、言わば雑魚モンスター。

補足しておくが、ルークの容姿はこんな骸骨ではない。

共通点ゼロのスケルトンをどうやったら自分のご主人と間違えられるのか、ミュウに問いたいくらいだ。

しかし、ミュウはそれどころではない危機に面している。

「みゅみゅっ！　ここは逃げるですの〜！」

即座に背を向け、ダッシュで逃走に移るミュウ。

相手が弱点だらけの雑魚とはいえど、子供チーグルに勝てるほど甘い相手ではない。逃走と言う判断は正しい選択だったのかも知れない。

だが、一度敵愾心を見せられたスケルトンもミュウの後を追い掛けてくる。鈍足そうな姿とは異なり、意外に足が早い。

でも、ミュウは足の早さだけは自信があつた。こんな雑魚骸骨などすぐに突き放すことはくらい軽いはずである。

しかし、スケルトンと自分との差はむしろ詰まってきた。

どうやら先ほどの全力疾走の疲れがまだ残っているようであり、足の節々に痛みが生じている。

「みゅみゅっ！　大体なんでスケルトンがチーグルの森にいるのです！？　あいつはアクゼリウス第14坑道にしか出没しないのではなかったのですの〜！？」

ちょっとしたプトリビアをぼやきながら必死に逃げるミュウ。

一見、余裕があるようにも見えるが、実際はかなり切羽詰っていた。

「（このままでは確実に追い付かれるですの……仕方ないですの……ここは覚悟を決めて、ミュウは戦うですの！）」

決意の炎を胸に抱き、覚悟を決めたミュウはクルリと振り向いてスケルトンの正面に対峙した。

「ふぁいあ〜っ！」

偶然にもミュウの突然の攻撃は不意打ちの効果を放った。  
スケルトンは回避する間もなく、腹部にミュウファイアが炸裂する。

「グガうつ！」

スケルトンは奇声を上げるが、ミュウファイアが命中した腹部には特に損傷は見当たらなかった。

ほとんどダメージを受けていない様子である。

スケルトンは右手に構えた棍棒を振りかざし、一気に振り下ろす。  
ミュウはギリギリの所で攻撃を交わすと、再び背を向け全速力で走り出した。

「や、やっぱりダメですの〜〜〜〜っ！ 勝てっこないですの〜〜〜〜っ！」

半べそを描きながら、走るミュウ。

逃げ切れない、戦えない、怖い、の三拍子が揃った今、ミュウは絶体絶命だった。

そんな絶体絶命のミュウの脳裏に浮かんだのは、かつての仲間達の姿だった。

「（ティアさん、ガイさん、ジェイドさん、アニスさん、ナタリアさん！ 助けてですの……っ）」

ミュウは必死に心中で助けを乞う。何も出来ない自分の無力さを

悔やみながら……

そして、ミュウの脳裏に自分にとって一番大きな存在が浮かび上がる。

「（ご主人様……っ！ 助けて……ですのっ！）」

スケルトンはついに自分の間合いの中にミュウを捕えた。  
今度こそ攻撃が当たると核心したスケルトンは棍を大きく振り翳す。

——だがその時、ミュウの身体に異変が発せられていることに気付いた。

ミュウのお腹に眩い光が発せられていた。  
いや、正確に言うと、ミュウのお腹に着けている装飾品が光を放っている。

「（こ、これはどういうことですかっ!? ソーサリーリングが光っているのですの!）」

光は更に眩しく、そして強く、光を放ち続けている。  
目を開けられないほどの光が辺りを包む。

その中心に居たミュウはどうすればいいのかわからずオロオロするばかりであった。

そして爆発的な光がソーサリーリングを中心に放たれた。

「みゅっ!? みゅみゅみゅ~~~~~っ!」

ミュウの叫び声だけが、辺りに轟く。その叫び声は徐々に遠ざか

って行くように聞こえた。

そして、瞬時に光は収まった。

そこにはミュウの姿が完全に消え失せていた。

——ちい、座標がずれたか……

声がする。どこからするのかは分からない。

——まあいい、この世界に転送は完了した。

だけど、その声は異様な威圧感を放っている。絶対的な力を持つ者が放つ恐ろしいオーラ。

——後は部下に回収を急がせるとするか……

それっきり声は聞こえなくなる。ほっと胸を撫で下ろし、安堵する。

そしてミュウの意識はゆっくりと回復していくのであった。

## 第1話 いきなりピンチ！？ VS 骨（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それにしても40000文字制限はすごい！

これなら思ったよりも早く完結できるかもです。

第2話は明日投稿予定。1日1本上げることが目標に頑張っていきます。

第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ（前書き）

ソーサリーリングアクションはアビスが一番好きでした。

最近のテイルズはソーサリーリングすら無くなっちゃって少し寂しいです。

## 第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ

「……みゆ？」

目を覚ました時、まず眼前に広がっていたのは雲で覆われた真っ白な空だった。

ゆっくりと上体を起こし、辺りを見渡す。

「みゆっ！？ こ、ここはどこですのー！？」

周りに見えるのはゴツゴツとした岩石のみ、緑も水もないただ岩だけが存在する山脈だった。

デオ峠と似ているが地形が全く違う。少なくともさっきまで自分の居たチーグルの森ではないことだけは確かだった。

「ミュウはなぜこんな場所に居るのです？ たしかスケルトンに襲われて、必死に逃げて、それからソーサリーリングが光って……つて、そうだ！ ソーサリーリングですのー！」

たぶん、事の発端は突然光ったソーサリーリング。

ミュウはソーサリーリングに異常が発生したと考え、リングをまじまじと見つめる。

リングの異常はすぐに発見することができた。

「みゆっ！？ な、なんですかこれはっ！？ リングに付いている穴が増えているのですのっ！」

ソーサリーリング——元々は三つの穴にそれぞれ音素の譜を刻むことにより、様々な能力を発する便利アイテム。

今までもその力で難解なダンジョンを攻略してきた。

ミュウファイアを出すことができる——第5音素の譜。  
ミュウアタックを使うことができる——第2音素の譜。  
ミュウウイングを広げることができる——第3音素の譜。

そして、更に空洞の三つの穴が追加されていた。装備者のミュウ自身も見覚えがない穴。

よく見ると、リングの形自体も大きく変わっていた。

「まあ、それはそれとして……」

何の問題解決も至ってないが、ミュウは『それはそれ』の一言で片付けた。

ぐう

「お腹が空いたですの……」

全力疾走二回の後に充分なお昼寝（気絶とも言つ）、ここまで事件が揃ったら当然次に来るのは空腹である。

だが、周りに人も居なければ、食料になりそうなものも見当たらない。あるのは岩石の山のみ……

——なんて思っていると、後方から誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。

「みゅうううっ！ 人ですよ！ 人がいるですの……！」

足音の正体を人影だと察したミュウは、大喜びで人影の元へと駆

け寄った。

「すゝみゝまゝせ——」

その人影の姿を見て、ミュウは思わず凍り付いた。

先ほどのチーグルの森でもそうだが、ミュウは考え無しに行動を起こす悪い癖がある。

ミュウは声を掛けたことをすぐに後悔した。

「みゅみゅみゅゝっ！　なんでレプリカナイトがこんな所にいるですのゝ！？」

近づいてきた人影の正体は、かつてルーク達を大いに苦しめたレプリカナイトの大群であつた。

レプリカナイト——HPが高い上、攻撃力、防御力も共にバカにならない強さを誇り、弱点も特にない上級部類の魔物。

ルーク達もかつてエルドラントやフェレス島廃墟群にて、こいつにはかなり苦しめられていた。

例えば、先ほどミュウが苦しめられたスケルトンが10匹居たとしても、このレプリカナイト一匹にすら遠く及ばないだろう。

そのレプリカナイトが大群でいるのだ。絶体絶命とはこの状況にこそ相応しい言葉である。

「え……えっと……ですの」

見ている。大勢のレプリカナイト達はミュウの顔をじっと見ている。

背中に冷や汗がダラダラと流れる。その勢いは徐々に増してゆく。

「……りんぐ……はっけん……ほそく……する……」

レプリカナイト達のリーダー(?)らしき者が不意に口を開く。  
単純な単語の羅列だが、さすがのミュウにもその言葉の意味していることは分かった。

レプリカナイト達は一斉に剣を構え、剣先をミュウの方へ向ける。

「みゅっ!? みゅみゅみゅっ!?」

明らかに相手は敵意を示している。敵意を持っていなければ剣を向けるはずがない。

「と、とりあえず……逃げるですの……っ!」

本日3回目の全力疾走。

だが、当然レプリカナイト達も追ってくる。

ナイト達はスケルトンよりも、そしてミュウよりも速かった。

「なんで最近の魔物達はこんなに足が速いのですの……!」

今度は大ベソを描きながら一生懸命に逃げるミュウ。  
チーグルは魔物ではないのか？ という素朴な疑問も浮かぶが、  
あえて今はそこに触れないことにしよう。

逃げる最中、ふと前方に今にも崩れそうな大きな岩脈が目についた。

ミュウはそれを見てある打開策を閃いた。

「（そ、そうですねっ！ あの岩脈の根元をミュウアタックで崩すのです。そうしたら崩れた岩石で追跡の足を止められるかもしれないですのっ！）」

ミュウの見解は正しかった。

岩脈は根元を崩すと、いとも簡単に崖崩れが起こる。そうすれば確実にナイト達の足を止めることはできるだろう。しかしそれはミュウ自身にも危険が及ぶことでもあった。

「（危険かもしれないけど、今はそんなこと言っていられないですの！ 覚悟を決めて……せうのっ！）」

ソーサリーリングの第二音素の譜が光る。

するとリング全体が土色に変色した。

「あたたか〜くつ!」

ミュウアタックを岩脈の根元に向けて放とうとした瞬間、今度はリングに連動してミュウ自身の身体も土色に変色する。

こんなの初めてなことであるが、ミュウはそれ以外の所で驚愕することになる。

ドガッシャアアアアアア~~~~~  
ンッー！

「「「……っ！？」「」」

異常な炸裂音が辺りに木霊する。その音に驚き、レプリカナイト達は思わず足を止めた。

ミュウアタックが炸裂した岩脈には、洞穴並の大きな空洞が出来ていた。

今のアタックの威力は明らかに異常だった。  
いつもなら小さな岩を砕くことくらいしか出来ないくらいの威力しかないはずなのに……

みし……みしみし……ピキキ……

ミュウが衝撃を与えた箇所を基点に、岩脈は少しずつヒビ割れが発生している。

そして――

ガラガラガラガラガラガラガラガラッ！！

大きくヒビ割れた岩脈は一気に崩れ始めた。

「みゅっ！？ みゅううううっ！」

ミュウの断末魔が響く中、レプリカナイト達は雪崩のように崩れてきた岩石の下敷きとなっていたのだった。

「あ、危なかったですの……」

レプリカナイト達が生き埋めになった現場より遙か上空。

いち早く危険を察したミュウは、咄嗟の判断でミュウウイングを広げ、上空へと避難していた。

「（それにしても、今のアタックの威力は何事ですか？ あんな凄まじい威力、今まで見たことがないですの……）」

ミュウはそんな考え事をしながら、羽（耳？）を羽ばたかせ、適当に思うが俚の方向へ進んだ。

「（やっぱり、ソーサリーリングに何か異変が起きているのですの……そうとしか考えられな——）」

考え事の途中で、ふとミュウはある事実気付いた。

「みゅうッ！？ 何でミュウは空を自由に飛んでいるのですの!？」

ミュウの驚愕は当然である。ミュウウイングは本来、『飛ぶ』というよりは、『浮く』だけの力だったのだから……

つまり、上下に移動出来ても左右にはできないという、何とも中途半端な力だったのだ。

しかしミュウは今、自分の思うが侘に空中移動を出来ている。決してただ風に流されているだけとか情けない理由などではない。

「????」

頭にクエスションマークをいくつも浮かべて悩むミュウ。

しかし、いくら悩んだところでプチトマトサイズの脳ミソでは、この難しい見解を導き出すことなどできっこなかった。

だが、ミュウにも一つだけ理解できたことがある。それは自分が一番肌を感じたこと……

「ミュウの——いや、ソーサリーリングの力がパワーアップしているのです……」

パワーアップしたミュウウイングの力によって、ミュウは楽々と山岳地帯を抜けた。

そして、お腹を空かせながら飛ぶこと数十分、ようやく街らしき景色が見えてきた。

「や、やっと食べ物に在り付けるのです。長かったですの。」

街を発見すると、ミュウは大喜びで急降下し、街の入り口の前で綺麗に着地した。

エンゲーブを彷彿させるような美しい農園が広がり、街の中央には噴水広場があるという豊かな街だ。

噴水広場の中央には、なぜか怖い顔をしたおっさんの石造がドーンと聳え立っている。

これさえなければとても好感の持てそうな街である。

早速街へ入ると、住人達による手荒い出迎えが待っていた。

「おい、なんだアレ？ 変な動物がいるぞ」

街の子供の一人がミュウを指差しながら言った。

「本当だ。モンスターには見えないな。サルか？」

「いや、あの顔はブタだろ？」

「サルブタっ！ あいつの名前はサルブタで決定」

ミュウは何もしていないのに、続々と野次馬達が沸いてきた。

「違うですよ！ ミュウの名前はブタザルですよ！」

野次馬が勝手に付けた名前に文句を述べるミュウ。

『ブタザル』というのは主人であるルークがつけてくれた名前。

名前の由来はルーク曰く『ブタとサルを足して2で割ったような顔をしているから』らしい。

そんな真意を知っているのかどうかは知らないが、ミュウはなぜかこの名前に執着している。

「おい、サルブタ……」

「だから違うですよ！ ミュウの名前は――」

「これ食うか？」

そう言っただけで差し出してきたのは、レーズン入りのクッキー。

「食べるですよ」

音符マークを付けてまで差し出されたクッキーに飛び付くミュウ。

「サルブタ、これも食べ！」

「喉が渴いたでしょ？ サルブタちゃん、これをお飲み」

何もしていないのに、あちこちから押し寄せる食べ物のプレゼント攻撃。ミュウは頬を緩ませながらそれらを一つ一つ嬉しそうに受け取った。

「サルブタ、何か芸をやったらこっちのお菓子もあげるぞ」

そう言っただけで男の子が差し出したのは、見るからに美味しそうなチョコレート。

「（あ、あれは、チーグルの森で流行っているボール型チョコレート（いちご味）ですよ！ あ、あれは何としてもゲットしたいですよ）」

流行りの品を見るや、ミュウの瞳に小さく炎が上がる。

決意に満ちた今なら、何でも出来そうな気がしてきた。

「一番、ミュウことサルブタっ！ 口から火を吹くですよ」

『おおーっ！』と野次馬から歓声が上がる。ミュウはこの瞬間、自分の名前に誇りを捨てた。

ミュウは大きく息を吸い込み、力をためる。

ソーサリーリングの第5音素の譜が光り、ミュウの身体全体がリングに連鎖して赤く変色した。

ミュウは上空を見上げ、力を解き放つ。

「ふあいあ~~~~~  
っ！~」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオツ！！！！！

ミュウの口を基点に上空へ放たれた炎は、直径数十メートルの熱波を作り、物凄い勢いとスピードを保ったまま、雲の上へと消えて行った。

「~~~~~」

野次馬達は、その炎の威力と規模に圧倒されたまま、硬直した。

「（し、しまったですの……ソーサリーリングのパワーアップのこ  
とすっかり忘れてたですの〜！）」

後悔しても時すでに遅し。硬直状態である野次馬達の目は、脅威

のモノを見ているかのように引きつつていた。

「い、以上、ミュウの火吹きでしたの〜」

苦笑いを浮かべながら一礼をするミュウ。

そして、それが起爆となって、野次馬達の停止していた脳が再起動した。

「ば、化け物だあああああああつ！」

「やつぱりモンスターだったんだ！ おい、保健所……じゃない、警備兵を呼べ！」

「この姿は我々を油断させるまやかしに違いない！ きつと正体は火吹き竜か何かだ！」

武器を用意してくる者、兵を呼びに行く者、石を投げってくる者、街人達は一丸となり一匹の共通の敵を前に行動を起こした。

どうやら仲間意識の高い街みtaiである。

本来ならば美しい人間愛に満ちている街と言つべきだが、ミュウにしてみればただの早とちり集団でしかない。

まあ、こうなった根源はミュウにあるわけだが……

「みゅうううううううつ！ ち、違うですの！ 誤解ですの！

皆さんに危害を与えるつもりは……ふがつ！」

必死に弁解も虚しく、一人の子供が投げてきたボール型チョコレート（いちご味）がミュウの鼻の中に見事命中した。

それに続き、街人達の怒涛の投擲攻撃が押し寄せてくる。

耐久力の低いミュウにとっては、石をぶつけられるだけでも大怪我を負いかねない。

さすがにもうこの場に留まることは不可能と察したミュウは、慌

ててミュウウイングを広げた。

「みゅみゅううっ！ ご、ごめんなさいです〜の〜！」

悲鳴に近い謝罪の言葉を残し、ミュウは慌てて飛び立ち、街を後にしたのだった。

第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今更ですけど文章見づらいのかもって思いました。

行間を挟んだ方がいいのかなあ……

その意見も含めて感想も待っています。

### 第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人（前書き）

全く関係ないですけど、TOXの長編はまだ執筆に入れていません；

というかようやくプロットの作成に入った段階です。

ミユウの異世界冒険記が終わることに少しは執筆進んでいればいいのですが（汗

### 第3話 やっぱりピンチ!? VS 黒い人

「まったく、ヴァーゲスト様も適当だよな。この世界のどこかにあるソーサリーリングって物を持って来いだなんて……」

怪鳥フレスベルグにまたがり、大空を飛んでいる黒い鎧の男は面倒そうにぼやきながらため息をついた。

黒い鎧、黒い髪、黒いフェイスマスク、黒い槍……黒以外の色が見つからないくらい、全身真っ黒な装備で覆われたデーモン族の男、名はアザゼルといった。

「大体、先に探しに出向いたはずのレプリカナイト達はどこで何してんだよ……あゝあ、面倒くせえ」

男はダルそうに欠伸をすると、ついにはフレスベルグの上で寝転がってしまった。

「『この世界のどこか』ってどれだけ範囲が広いんだっつーの！ 全く……見つかるわけが——」

「こんにちは〜ですよ」

不意に背後から飛んできた妙な生き物に話し掛けられ、挨拶を交わされた。

「あつ、ども。こんにちは」

アザゼルも寝転がったまま、適当に挨拶を返す。するとその生き物は嬉しそうな笑顔を浮かべ、自分を追い越して空の彼方へと消えて行った。

アザゼルはその方向をボーッと眺めながら、感心したようにこう言葉を漏らした。

「最近のサルは空も飛ぶんだな……」

……

……

……

「……って、サルが空を飛ぶか……っ！」

ガバツと身を起こし、自分のボケに自分でツッコんだアザゼル。

「大体、あのサル。なんで言葉を発することが出来やがるんだ！？俺の知らないうちに最近のサルは喋ることが出来るようになっていたってのか！？」

レッサー。ンダが立つくらいで騒がれるくらいである。

どこかの調教師が話題を集める為にサルに言葉を教えたという可能性も――

……

……

……

「……って、んなわけねーだろ！　しっかりしろ、俺！-」

周りにツツコンでくれる者がいないことが、こんなにも寂しいことなのだと認識した瞬間だった。

「そういえば、あのサル……腹に珍しい装飾品を付けていたなあ……まるでリングみたいな……」

……

……

……

「……って、アレがソーサリーリングだあああああああああ  
あつー！-」

アザゼルは慌ててフレスベルグに命令を与え、妙な生き物——ミ  
ユウの去って行った方へ向けて、全速力で追い掛けていったのだっ  
た。

「みゅううう、いつまで経ってもどこまで飛んでも、知っている場所が見えないですの……」

空を飛んでいる時のミュウは、リングの第三音素の譜の輝きと連鎖して身体全体が緑色に変色している。

パワーアップしたミュウウイングの扱いにもようやく慣れてきた様子のミュウ。上空移動はそんなに疲れないのでかなりお気に召したようである。

「……………——てええええええつ！」

「みゅ？」

背後に声がした気がした。

今までの教訓から、背後からやってくる人影は自分にろくな結果をもたらしていない。

ミュウは思わず警戒体制に入った。

「まてええええええええええいいつ！　そこのサルううううううつ……」

「みゅ？　さっきの黒い人ですの」

正確に言つと、人ではなくデーモンだったりするが、ミュウはそのことに気付いていない。

男の表情からは、何か尋常ではない様子が伺えた。

「ど……う……し……た……です……の……？」

まだ距離があつた為、大声を上げて訪ねるミュウ。すると男は――



立ち上がったアザゼルは両手を前に突き出し、目を閉じながら譜術の詠唱に入った。

「喰らいやがれっ！  
……フレイムバーストっ！」

アザゼルの両手から炎の譜が浮かび上がる。

やがて譜の中心から強大な炎が浮かび上がり、瞬時に形を作った。そして大きな渦と化した炎が、ミュウの後部を目標に猛りを上げる。

「みゆっ！？ みゆうううううううっ！！」

物凄い勢いを保った炎は、ミュウの飛んでいった方角を目指し、風を切って迫ってくる。

慌ててウイングの軌道をずらして回避を試みるが、攻撃に気付くのが遅すぎた。

そして――

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンっ！

「みゅううううううううううううううううう……」

ミュウのウイングの片翼に炎の渦が命中した。

『熱い』というより『痛い』と言った方が感覚的に正解だった。

そして片翼を動かせなくなったミュウは一気に浮力を失い、そのまま森の中へと墜落していったのだった。

「ちっ、直撃は間逃れやがったか……まあいいか、サルは落としたし」

アザゼルはフレスベルグの動きを止めると、ミュウが落ちて行った森をじーっと見つめながらこう呟いた。

「しっかし……落としたのはいいが、この森——いや、樹海だな、これは。これから落ちたサルを探し出すのもまた一苦労だな。面倒くせえ」

どうやらアザゼルの『面倒くせえ』は彼の口癖のようである。

彼の無頓着な性格が口癖になってよく表れている。

しかし、彼は面倒くさがっている割には、結局のところ責務はちゃんと果たすのである。

アザゼルは物凄く嫌そうな顔をしながらも、しぶしぶミュウが落ちて行った付近の樹海へと飛び込んで行った。

「むっ……あれは……」

アザゼルが森へ飛び込んで行く様子を偶然遠目で見ていた女性がいた。

「確か、ヴァーゲストの側近の男……なぜ、このような樹海に……？」

金髪の女性はアザゼルことを知っているような口振りだった。獲物を威嚇するかのような鋭い眼光から、どうも彼のことを好意的には見ていないようだ。

「行ってみるか……」

決意を固めた女性は腰から二丁の譜業銃を取りだし、辺りを警戒しながら深い樹海の中へと足を踏み入れていったのだった。

### 第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今回は短いかもしれませんがこれで終わりです。

明日もたぶんこのくらいの時間に更新します。

#### 第4話 早すぎる再会（前書き）

こんな駄文の小説をお気に入り登録してくれた方がいるようでつ！  
とてもとても嬉しいです。本当にありがとうございます！！  
素直に励みになりました。これからも更新がんばっていきます！

#### 第4話 早すぎる再会

「みゅうううううううううううううううううう……」

アザゼルに討たれたミュウ。悲鳴がエコーとなって響いたが、やがてそれも止んだ。

ドバツシャ~~~~~ンっ!!

「……（ぶくぶくぶく）」

豪快な水音が響く。

不幸中の幸いと言うべきか、落ちた場所は大きな湖の中心部だった。よって、落下によるダメージは小さくて済んだ。

本来ならば大事に至らなかったことを喜ぶべきだが、今のミュウには素直に喜べない理由があった。

「（ぶくぶく）……泳げな……（ぶくぶく）……誰か助け……（ぶくぶく）……ですの……」

必死に足をばたかせ水面に顔を出そうと一生懸命のミュウ。まだ子供チーグルであるミュウは泳ぎ方を知らなかった。

「（ぶくぶく）……こ、根性……（ぶくぶく）……ですの……（ぶくぶく）……何とか岸まで……（ぶくぶくぶく）……」

助けを乞うても誰も来るはずが無いことを悟ったミュウは、何と

か自力で岸まで泳ぐことを試み始めたのであった。  
岸までほんの三十メートル程であったが、ミュウには数百メートルの距離に見えたに違いない。

「はあ……はあ……はあ……はあ……、や、やっと岸に辿り付いた……ですの〜」

ようやく地に足を着くことができるようになると、ミュウは水に濡れた犬みたいに身体をプルプル振って水気を飛ばした。

泳げないミュウを救ったのは、例の形が少しおかしくなったソーサリーリングである。

別にまた不思議な力を発したとかそういうわけではなく、ただ単に浮力の働いたリングが偶然浮き輪変わりになり、泳げないミュウでもバタ足のみで岸に辿り付くことができたのだ。

「そ……それにしても今日は厄日ですの〜。怖いモノに追われてばかりですの〜」

スケルトン、レプリカナイト、そしてアザゼル。

今日一日だけでミュウは三度も絶体絶命の淵に立たされたのだ。しかも襲われる度に相手は強い者へと変わってきている。

この後、また何かに襲われたらと思うと背筋がぞくつとする。

「みゅうううう……耳が痛いですの〜……」

先ほどアザゼルの譜術がまともにウイングへ命中していた為、左耳にうつすら黒い傷跡が残っていた。

大事には至らなかったが、その傷口は結構深い。とても再びウイングを広げられそうにはなかった。

当然ながら、ミュウには回復譜術は使えない。それどころか回復アイテムすら携帯していなかった。

「仕方ないですの。歩いて森を抜けるしかないですの」

この場に居ても、またあの黒い男に襲われ兼ねないと思ったミュウは、ケガをした左耳を引きずりながら、よろよろと湖を後にしたのだった。

ミュウの予想通り、その場を離れていった自分と入れ違いに、フレスベルグに跨がったアザゼルが空から降下してきた。

「ちっ、水しぶきの音がしたからここだと思ったんだが……いねえか」

ミュウの運が良かったのか、アザゼルのタイミングが悪かったのか、湖に降り立ったアザゼルの視界にミュウの姿はなかった。

「この樹海じゃ空から探すのは無理だな。しかたねえ、面倒くせえが歩いて探すしかねえか」

そう呟くとアザゼルはフレスベルグから降り、地に足を着いた。相当ダルいのか、肩をコキコキ鳴らし、欠伸を交え、ついには尻を掻きながら、ゆっくりとした足つきで樹海の中へと姿を消した。

ちなみに命令を受けていないフレスベルグは、主人の命が下るまで、いつまでもその場で待機し続けるのであった。

夕日が傾き始める。

この時間になると、この森の植物達はオレンジ色の光を浴びて、黄金色の草花へと変容する。

それは強暴なモンスターですら魅了されるほど、幻想的で、そして美しい光景だった。

その光景を見た者達は必ず何らかの情緒を感じるという。素直に感動する者も居れば、寂しさを感じる者も居る。今のミュウはその後者だった。

この光景はチーグルの森でも毎日のように見れた。いや、チーグルの森でなくてもこの夕日が作る幻想世界は好きだった。森の仲間達が……共に旅をした仲間達がいつも近くに居てくれたから……

共に感動できる者が常に隣に居てくれたから……寂しさを感じないで済んだから……夕日の景色が大好きだった。

だけど、今のミュウはたった一人。この黄金色の世界にたった一

人でいることを強く実感した。

それと同時に仲間達の存在が、如何に大きいものであつたかを改めて認識した瞬間でもあつた。

「「はあゝ……」」

場の雰囲気にとぐわない『二つ』の深いため息が綺麗に同調した。そしてそれぞれのため息の主達は、肩を並べて交互に愚痴を語り始めた。

「全く、あの黒い人までもリングを狙っていたなんて聞いてなかったですの……」

「全く、ソーサリーリングが動いているなんて聞いてなかったぜ……」

「早い内に安全な場所に避難しないと、また別の誰かに襲われるかもしれないですの……」

「早い内にあのサルを見つけねえと、他の奴に先を越されちまうじやねえか……」

「大体なんでリングが狙われるのですの？」

「ああ、それはリングを見付けたものだけに特別に装置を使わせてくれるというヴァーゲスト様の粋な計らいが——」

「「——ん？（みゆ？）」「」

………

………

………



オーラを放つ。

六神将やヴァン総長がそうだったように……

しかし、そのオーラを感じていたのはミュウだけではなかった。

「（なんだ？ こいつの奥底に感じる強大な力は？ リングの力がサルの身体に同調してやがるのか？）」

相手は自分を見てこんなに怯えているのに……相手はただの小動物のはずなのに……アザゼルの槍を握る手に汗がにじみ出していた。

「（ちつ、何だかしらねえが、戦うと面倒なことになりそうな気がするぜ……仕方ねえ、こういうのはあまり好みはしねえんだが……）」

何を思ったのか、アザゼルは構えていた槍を背中にしまい、臨戦体制を解いた。

「おい、サルっ！」

「みゅううっ！ ミュウの名前はブタザルですよ！」

「同じようなもんじゃねえか！ キレル意味がわかんねえし！ ……まあいい。おい、サル！ 俺と戦いたくねえか？」

一見挑発しているようにも取れる言葉、アザゼルはまずミュウに戦意の有無を確かめる質問を投げた。

「戦いたくないですよ」

「即答かよ……まあいい。戦いたくねえんだな」

「戦いたくないですよ」

「（二回言ったっ！？）……そ、そうか……じゃあ、その腹に着け

ているリングを俺によこせ。そうすれば俺もすぐにこの場から消えてやる。お前の命も見逃してやる」

「それは困るですの〜」

ミュウはお腹のリングを『渡してたまるか』と言わんばかりに、小さな手で押さえつけ、大事そうに抱え込んだ。

ソーサリーリングは単に火やアタックを出せるだけのアイテムではない。人と話すための翻訳機変わりにもなっているのだ。

つまりソーサリーリングを失うことは人との意志の疎通が取れなくなるということ……主人やその仲間達とも話が出来なくなるということも意味していた。

「よし、じゃあこうしようじゃねえか」

アザゼルはにやりと口元で笑みを浮かべると、ミュウにある打開策を持ち掛けてきた。

#### 第4話 早すぎる再会（後書き）

見てくれてありがとうございます！

言われるまでもないと思いますが、アザゼルはオリジナルのキャラです。

今、『アザゼル』ってきくと、『〇んですよ、アザゼルさん』の方を思い浮かべてしまう…w  
アニメ、よかったなあ。

## 第5話 魔弾襲来（前書き）

たぶん、僕はこのサイトの仕様を半分も使いこなせていない気がします。

イラストを挿絵みたいに使っているアレはどうやるんだろう……

## 第5話 魔弾襲来

「サル……お前、俺と一緒にこないか？」

その打開策はミュウにも想定外だった一言。

ミュウが目を見開いて驚くほど意外な一言だった。

「リングを渡したくねえなら、お前も一緒に来ればいい。俺の目的が果たされるまでお前の身柄は保証する。どんな敵からも守ってやるさ」

「みゅみゅうつ！？」

さらに意外なことに、それはなかなか魅力的な提案だった。

今日だけで三回近くも敵に襲われているミュウにとっては非常にありがたいものであり、心強い。

ミュウの心境は今大きく揺らぎ始めた。

この男に完全に気を許したわけではない。

しかし、これ以上この見知らぬ土地で一人でいることは嫌だった。

そして、ミュウの決断は下った。

「分かりま——」

「……ホーリーランスー！」

「「……っ！？」」

ミュウがまさにアザゼルに気を許そうとした瞬間、近くの叢から

光の矢を降らす譜術が放たれてきた。

光の矢はアザゼルの右肩に深く突き刺さった。  
あまりにも突然な奇襲だったので、さすがの彼も避ける間もなかったのだ。

「くっ！ 何者だ！？」

肩に手を沿え、痛がりながらも、叢にいる奇襲者に呼びかけるアザゼル。

しかし、すでにそこには誰も居なかった。

「みゅみゅうっ！？」

後方でミュウの悲鳴が上がる。

アザゼルは慌てて振り向くと、そこには金髪の女性がミュウを抱え、尋常ではないスピードで連れ去ろうとしていた。

「ちいっ！ させるかよ！ …… 光龍槍っ！！」

アザゼルの黒槍が無光属性の光線を放つ。

突き出された黒い光線は、奇襲者の後部目掛けて真っ直ぐ発射されていた。

しかし、奇襲者の次なる譜術詠唱はすでに唱え終えられていた。

「レイジレーザーっ！」

奇襲者の右手から、前方に貫通する眩い光線が発射された。

無光属性と光属性の光線同士がぶつかり、共に威力を中和し合う。  
そして、ほんの一瞬だが爆発的な光が辺りを照らし散らした。

バンッ！ バンッ！

光に目を取られていた隙に、二つの銃声が鳴り響いた。アザゼルは自分が撃たれたと思い、即座に身構えるが、自分の身体には特に『撃たれた』という反動はこなかった。

変わりに――

ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ッ！

自分の左右に聳えていた二本の木が自分を挟むように倒れてきた。絶大な威力を誇る二丁の譜業銃から放たれた弾は、腐りかけていた木の根元を燃やし、アザゼルの頭頂へと倒れこむように仕向けたのだ。

まさに計り知れない銃の腕と、物理法則を瞬時に計算できる頭脳を掛け合わせた見事な攻撃だった。

ズガ――ンっ！！

豪快な音を立て、根元を焼かれた二本の木は、アザゼルを下敷きにして彼を挟むように倒れたのであった。

「みゅ~~~~~~~~うっ！ みゅっみゅっ！ みゅみゅ~~~~~~~~  
~~~~~~~~ううっ！」

いきなり連れ去られたミュウは、金髪の女性の信じられないほどスピードを保った激走に、目を回しながらひたすら悲鳴を上げまくった。

「静かにしろ！ さっきの奴にこの場所が気付かれるだろうがっ！」

金髪の女性に叱咤を受け、少し静かになるミュウ。

それでもジェットコースターみたいな激走には悲鳴を上げそうになる。

女性は先ほどの攻撃でアザゼルを仕留めきれていないことを前提みたいな表現をする。

彼女は彼の実力をかなり高い評価で見ているらしい。

ようやくジェットコースター感覚に慣れてきたミュウは、ここで初めて女性の顔をちらっと見た。

「……っ!？」

そこにはとても意外な、そして懐かしい人物の顔が在った。

「あゝ、いてえ。思いつきり頭打ったじゃねえか」

二本の木に下敷きになったはずのアザゼルは、まるで何事もなか

ったかのように木を払い除け、脱出に成功していた。

しかし、その表情には危機迫る雰囲気を漂わせており、明らかに怒りを奮闘させていた。

「あの女、絶対許さねえ。おい！ フレスベルグ！ 空から追跡するぞ！」

……………しゅん。

「おい、フレスベルグ！？ てめえ、聞いているのか！？」

……………

……………

……………

「……………って、あゝっ！ フレスベルグを湖に置いてきちまったああああああっ！！」

今の今までフレスベルグが傍にいなかったことに気付かなかったアザゼル。

フレスベルグは今も湖で彼の帰りをいつまでもいつまでも待っていることだろう。

「よしつ、ここまでくればさすがの奴も私達を見つけられまい」

女性はあるから約1時間弱、休憩無しに樹海の出口付近まで走り続けた。

女性とは——いや、人間とは思えない程の体力の持ち主である。しかも本人は終止涼しげな表情を崩さず、疲れた様子を一切見せていなかった。

女性とミュウは出口近くの洞窟に身を潜めている。

仮にアザゼルが空から追跡したとしてもこの場所なら見つかることもないだろう。

「なんで……なんであなたがこんな所にいるのですの？」

ミュウにしては珍しく真剣な表情で、女性に質問を掛ける。

「そんなことよりもお前、そのリング——」

「今はこっちが質問をしているのですのっ！——」

更に珍しいことに今度は叱咤するミュウ。

ここまでシリアスなミュウは果たして年に何回見られるだろうか？

「分かった、先に質問に答えよう。あの黒装の男は、私が今調べている重要参考人の一人なのだ。そして、先ほどあの男が森に入って行く姿を見たもので……気配を消して後を——」

「そうじゃないのですのっ！」

バチンバチンと、小さな手で地面を叩いて苛つくミュウ。
どうやら彼の聞きたいことは別にあるらしい。

「どうして死んだはずのあなたが、こんなにピンピンして生きているかを聞いているのですの〜!」

.....

.....

.....

「……お前っ、ティア達と一緒にいたチーグルではないか!」
「今更気付いたのですの!?!」

女性はようやくその事実気付くと、初めて表情を崩し、驚きを見せた。

「なぜ、お前がこんな所に?」

「だ〜か〜ら、今はミュウが質問しているで〜す〜の〜っ!」

お互いに聞きたいことが多すぎて混乱を招いている。
そして、ついにミュウが叫んだ。

「だから、何で死んだはずのリグレットさんが生きているのですの〜っ!?!」

第5話 魔弾襲来（後書き）

見てくれてありがとうございます！

次回から後書きでちよこちよこつとスキット（TOAではフェイス
チャットだっけ？）を入れていきます。
ちよつとしたお遊びみたいなものです。

第6話 グラン・ソウル（前書き）

世界観の説明とリグレットのツンデレ回です。

世界観の方は5秒程度で思いついた有りがちすぎる設定です。

なんかのアニメでこんな設定の世界があったなあ……題名忘れたけどw

第6話 グラン・ソウル

ローレライ教団兵『神託の盾騎士団^{オラクル}』の幹部『六神将』。

並外れた実力を持つ六人で構成され、その個々の力は圧倒的であった。

皆、それぞれに思念を抱き、過去にルーク達と何度もぶつかり――そして破れた。

そして、この『魔弾のリグレット』と称された女性も、栄光の大地エルドラントにて、過去の教え子であるティアと価値観を噛み合わせぬまま敗北し、命を落とした――はずである。

「お前、この世界のこと何もしらないのか？」

「みゆうっ！ ミュウだって世界のことくらい知っていますの！ この世界はオールドドラントと言って、キムラスカ国とマルクト国を中心に平和を守っているのですの！」

かつては平和条約で結ばれていた二国は、表面的だが友好を保っていた。

しかし、ある事件をキツカケにその平和条約は解消され、対立国として永きに渡ってきた。

だが、ルークを筆頭にその仲間達の提案で、再び同盟は結ばれた。今度は表面だけの友好ではなく、互いに手を取り合い、永久に協力し合う誓いが交わされ、オールドドラントに更なる平和が訪れた。

ミュウの説明はものすごく手抜きではあるが、言っていることは間違っていない。むしろミュウにしては博学な言葉を口にした方だろう。

だが、リグレットはミュウの解答を聞いて、なぜか深くため息を

吐いた。

「なるほど、何も分かっていないみたいね」

「みゅみゅっ!？」

いともあつさり自分の意見が覆され、驚き半分、へこみ半分のリアクションを返すミュウ。

そしてリグレットは更に驚きの事実を述べ始めた。

「この世界はオールドドラントではない」

「チーグル、お前は人が死した後、どこへ行きつくと思う？」

不意に放たれた質問、それは哲学の域を越した高度な質問——そして、誰もが知りたいことでもあった。

ミュウは眉を寄せ、『むむむ』と唸りながら、じつくりと自分なりに考えをまとめ……答えた。

「火葬場ですの〜」

なぜか嬉しそうに答えるミュウ。

その解答を聞いてリグレットは一瞬コケそうになる。

「そうじゃなくて……いや、その通りなのだが………し、質問を変えよう」

リグレットはゴホンッと咳払いを入れ、間を作ると、改めてこう質問をした。

「人が死に、肉体を離れた魂の行き付く場所、それはどこだと思う？」

博識なリグレットとしては非常に分かりやすく質問したつもりだが、ミュウにはそれでも質問の主旨が理解できていなかった。

「墓地ですの〜」

二度目のミュウのボケ解答に、リグレットは鎮痛の表情を浮かべる。

結局彼女はミュウの言葉はスルーして、話を先へ進めることにした。

「……つまり、この世界は生前に思念を果たせなかった魂が行き着き、生前の肉体へと再構築される場所、それがこの死霊世界『グラ・ソウル』よ」

「……………みゆ？」

長い間の後、ミュウは思考の末、結局首を傾げた。

まだよく分かっていないみたいである。

その反応に、非常に疲れた表情でため息を漏らすリグレット。

「もういい。つまり、この世界は異世界なの。今はそれだけ覚えてもらえばいいわ」

結局の所、ミュウにも分かるように簡単な説明で済ますリグレッ

ト。

その口調にはいつもの堅苦しい軍人らしさは見えず、素のリグレットを映し出していた。

「みゅううつ。よく分からないけど、わかりましたですの〜」

「（こ、ここまで簡単に言っても分からないとは……）」

どうやら博識なリグレットにとって、ミュウという存在は苦手意識を持たせる相手らしい。

久方ぶりにどつと疲れたリグレットは、岩の壁に背をあずけ、しばらく火の番に集中することにした。

日は完全に沈み、夜の深い闇の中、静寂と獣の咆哮が交互に樹海の音帯を支配していた。

ミュウ一人だったら怯えて震えていたかも知れない。

しかし、今のミュウにはその恐怖感に襲われることはなかった。

「チーグルよ。勝手に連れさらってきてしまった手前悪いのだが、お前を『モーヴ』という都市に連れて行きたいと思う。こっちの勝手な都合だが——」

「分かったですの〜」 リグレットさんに着いて行くですの〜」

リグレットが話を言い終える前に、ミュウは即了承を下した。

この反応にはさすがに意外だったのか、リグレットは目を見開いて、驚きを表情に出していた。

そしてリグレットはずっと気になっていたことを聞いてみることにした。

「お前、なぜ、かつて敵だった私を見ても警戒しない？ アレだけお前達の行く手を阻んできたというのに」

そう——かつてルーク達と六神将は互いに剣を交えた宿敵同士、つまりミュウとも敵対関係であったはず。

なのにミュウは警戒する所か、完全に心を開いていた。

ミュウはリグレットと真っ直ぐ向き合うつと、笑顔を向け、心意を述べ始めた。

「ティアさんが言っていたですの。リグレットさん本当はとても強く優しい人で、最も自分が尊敬している人だって」

「ティアが……？」

「ミュウもそう思うですの。リグレットさん、とってもとっても優しいですの。」

屈折の無い笑顔で本心を述べるミュウ。

リグレットはその言葉を聞いて、少しだが頬を赤らめた。

「なっ……わ、私がいつお前に優しくした！？ 心にも思っていないことを言うなっ！」

「そんなことないですの。リグレットさん、ミュウに一生懸命この世界のこと教えてくれたですの。」

「その割には全然理解していなかったではないか！ も、もういい！ 寝るぞ！ 明日は早いんだ！」

なぜ明日『早い』必要があるのかは全くの謎だが、リグレットはミュウに背を向けるとそれっきり黙りこくってしまった。

ミュウはそんなリグレットの様子を見て一瞬微笑むと、その場にゴロンと転がり、すやすやと寝息を立て始めた。

久々にミュウに与えられた安らかな時間。

背中に感じられた安らかな温もりは、決して気のせいなんかではないだろう。

朝日が登り、森に咲く草花に太陽の光が降り注がれる。

朝の森は自然の賛歌のように澄みきった水のせせらぎの音がよく聞こえて来る。

リグレットはその音が目覚ましとなって、ゆっくりと眠りから覚めた。

彼女は髪を束ねながら、ちらつと横目で隣で寝ているミュウの姿を見た。

「（ヴァーゲストの側近の男は明らかにソーサリーリングを狙っていた……なぜだ？　なぜアレほどの男がこんなリングなんかを欲しがるとだ？）」

しばらくじーっと見つめていると、ミュウは一つ寝返りを打つ。すると、ミュウの左耳に黒いアザがあるを見付けた。

「（なんだ？　ケガをしているではないか……あの男にやられたのか？）」

目に飛び込んできたのは、空中でアザゼルからフレイムバーストを受けた時にできた傷跡だった。

一日で痛みは引いてきていたが、火傷の跡はこうしてくっきりと残されていた。

髪を束ね終えたリグレットは自分のカバンの中をこそこそ漁り始めた。

その時、ミュウも静かに目を覚ました。

「みゅううゝ、おはようですのゝ」

「目が覚めたか。おい、ちょっとじっとしている」

「みゅ？」

リグレットの促された通りにミュウはその場でじっと固まってみた。

カバンから包帯と薬を取り出したリグレットは無言でミュウの左耳の傷に手当てを始める。

「みゅみゅっ？ 手当てしてくれるのですの？」

「じっとしてると言っただけ、口も動かすな」

リグレットの手当ては動きに無駄がなく、尚且つ丁寧な治療だった。

こう言った治療は慣れているのか、わずか数秒で完璧な包帯の形が出来上がった。

「みゅみゅうゝ、ありがとうございますのゝ。やっぱりリグレットさんは優しいですのゝ」

「ち、違う！ その汚らしい傷跡を自分の視界から消したかっただけだ！」

明らかに照れ隠しが混じった言い訳を述べるリグレット。頬もほんのり赤い。

ミュウが改めてリグレットの優しさを感じた朝の一時だった。

「モーヴはこの森を出て真っ直ぐ西に行った所にある……が、ここは南の平野を迂回して遠回りしながら向かう」

身支度を済ますと、リグレットがこれからの予定は簡単に話した。

「みゅ？ 真っ直ぐ向かわないのですの？」

「ああ、ちょっと調べたいことがあるものでな。なるべくたくさんの町へ寄って情報を集めたい」

「わかりましたですのゝ、さっそく出発ですのゝ」

話がまとまった所でミュウが先導して歩き始める……が、リグレットが冷静に待ったを掛けた。

「チーグル、森を抜ける道知っているのか？」

リグレットのその質問に、ミュウは極めて明るくこう答えた。

「知っているわけではないですのゝ」

「笑顔で言っな！ 森は、ここから西に進めば抜けることが出来る」

「みゅみゅゝうっ！ 西！ 分かったですのゝ」

と、言いながら方向を変え、再び歩み出すミュウ。

……が、リグレットが再び待ったを掛ける。

「そっちは北だ！ 言ってる傍から間違えるな！」

「みゅみゅうっ！ てことは西はこっちですよっ」

「そっちは南っ！」

「みゅっ、驚事実ですよ。北の反対は西ではなかったですよ」

驚愕を示しながらもミュウは再び別の方向へと歩み始める。

当然リグレットは待ったを掛ける。

「だからそっちは北だと言っているだろうが！ お前わざと間違えてないか！？」

「みゅううう……この世に西が見当たらないですよ」

「お前が異常に方向音痴なだけだ！ もういい、お前は私が担いで行く、もう勝手に歩くな」

リグレットは一人オロオロしているミュウをひょいと拾い上げると、そのまま頭に乗せ、真っ直ぐ西へ向かって歩み始めた。

するとミュウは泣きそうな顔をしながら申し訳なさそうにこう言った。

「リグレットさん……」

「もういい、別にさっきのことは怒っていたわけでは——」

「……後ろ髪がチクチク刺さって痛いですよ」

「そのくらい我慢しろっ！」

「みゅううっ」

リグレットに叱咤を受け、ミュウは彼女の後ろ髪の子クチク攻撃

に耐えながら大人しく悶えるのであった。

「ところでリグレットさん、そのムーヴって所にあるのですの？」

ようやくチクチク感覚に慣れてきたミュウは、今更ながらその質問を繰り返した。

「ああ、そこに我らが拠点にしている神殿がある。そして何か分かったらそこでラルゴと合流することになっている」

「誰ですの？ その人」

あまりにも酷いミュウのボケに、リグレットは思いっきり足を捻りコケそうになった。

ミュウが彼女の頭から落下しそうになるが、リグレットが慌てて空中キャッチをする。

「私と同じ幹部六神将だった黒獅子ラルゴだ。巨漢で大鎌を持っていた……」

鎮痛な表情のリグレットの説明に、ミュウは手をポンツと叩いた。ようやく思い出したみたいである。

「思い出したのですの？」 あの大きくて地味な人ですの？」
「（どういう覚え方を……）」

どうやらミュウに取って黒獅子のラルゴの存在は、ただの『大きくて地味な人』としてしか認識されていなかったようだ。

「みゅみゅっ！ 森の出口が見えてきたですよっ」

ミュウの言う通り、前方には生茂る草木の終点となる地平線が見え始めた。

しかし、リグレットの瞳には、その異常な視力の良さから、地平線の先にあるものまで映し出されていた。

「ちっ、敵はあくまでも私達をこの森から出したくないらしい……」

リグレットが見たその先には、数十匹のレプリカナイト達が森を囲むように周りを徘徊する姿が在った。

第6話 グラン・ソウル（後書き）

「スキット」 【お前の名前は？】

リグレット「そういえばチーグル。お前の名は何というのだ？」

ミュウ「ミュウですの〜」

リグレット「……そのまんまね」

ミュウ「みゅっ！？」 でもでもご主人様が着けてくれた名前もちやんとあるですの〜！」

リグレット「いや、別に聞きたくもない。これからは『ミュウ』と呼ばせてもらうことにする」

ミュウ「みゅうっ！ ひどいですの〜。もう一つの名前はとってもとっても格好良いですの〜」

リグレット「（はあ〜……）分かった、念の為に聞いておこう。あのレプリカが着けた名前は何か？」

ミュウ「『ブタザル』ですの〜」

リグレット「……………やっぱりミュウと呼ばれてもらうことにするわ」

第7話 魔弾炸裂（前書き）

今回は初の戦闘回です。

第1話でミユウとスケルトンが戦っていたけど、あれはまるで戦闘になっていなかったのw

第7話 魔弾炸裂

アザゼルは笑っていた。

不敵に……鋭く――

勝ち誇ったように……黒く――

「くつくつくつ。あのサルと女、このままこの俺がたやすく逃がす
とでも思っなよ」

一人、アザゼルは樹海の深部で大岩に腰を掛けて笑う。

「今頃は出口付近で予め呼び寄せていたレプリカナイトの大群を見
て動揺しているだろうな……くつくつくつ……」

周りに誰も居ない森の深部で、男は不敵に独り言を漏らしながら
笑っていた。

その光景は余りにも不気味な為、周りにいた獣達も引いてしまっ
ている。

「そして奴らの姿を見つけ次第、ナイト達の報告を受け、俺がフレ
スベルグに乗り、その場に直行する……くつくつくつ……抜かりの
ない完璧な作戦だな」

………

………

………

「俺がフレスベルグと無事合流できていたら……の話だな」

アザゼルの顔には満遍なく疲労の色で塗りつぶされていた。リグレットの奇襲を受けた後、彼は自分の足跡を頼りに湖を目指したのだが、なぜか湖には辿り付けず、そしてどんどん樹海の迷宮へとハマって行った。

アザゼルの方向音痴ぶりは、まさにミュウと負けず劣らずといった感じだった。

「俺……これからどうしよう……」

誰も居ない樹海の深部……そこには一人で途方にくれる馬鹿な男の姿が悲しく映し出されていた。

そして、フレスベルグは今日も湖で主人の帰りを待つ。

「みゅううう。リグレットさん、どうするのですの〜？」

ミュウ達はナイトに見つからないように近くの叢に身を隠しながら静かに様子を伺っていた。

徘徊しているナイトの数は半端ではない。この様子だと隙を見て脱出を図ることも不可能だろう。

「恐らく、奴らが私達を足止めしている間に、あの黒い装備の男が空からこの場へ直行してくる……たぶんそという戦法ね」

さすがに鋭いリグレット。完全にアザゼルの仕組んだ戦法を読みきっていた。

しかし、さすがの彼女もアザゼルがフレスベルグと合流出来ていないことまでは想定していなかったみたいである。

そこまで想定できたらエスパーだが……

「レプリカナイト達に加えて、あの黒い装備の男まで合流されたらもうこちらに打開策はない」

「みゆみゆうっ！？　じゃあどうしようもないですよ！？」

「いや、『合流されたら』の話よ。レプリカナイト達だけなら……むしろは黒い装備の男一人だけならまだ対処できる見込みはある」
「みゆ？　どういうことですか？」

リグレットの言葉の真意が理解できないミュウ。

いや、そもそも考えることは全てリグレットに任せていた為、自分で考えようとすらしていなかった。

「つまり、ここは正面突破で切りぬけ、出来るだけ遠くへ逃げる。空からの追跡には追い付かれるだろうが、ナイト達さえ撒ければ最悪でも奴との一対一の状況くらいは作れるだろう」

かなりの大胆な策にミュウは呆気に取られる。

しかしあの博識なリグレットが考えたことであるのだから、もう他に良策はないのだろう。

「この場合はスピードの勝負よ。如何に早くここを切りぬけられるか……ぐずぐずしていると遠くへ逃げる前に奴と合流されてしまうからな」

リグレットはミュウを再び頭へ乗せ、スチャッと音を立てながら両手に譜業銃を構えた。

「ミュウ！　しっかり掴まっているのよっ！　お前が振り落とされたら元も子もないのだからなっ！」

「みゅみゅぅっ！　了解ですのっ！　絶対に振り落とされないですのっ」

ギュッとリグレットの頭にしがみ付くミュウ。

リグレットの気迫につられるように、彼の目も真剣そのものだった。

「よしっ！　いくぞっ！！」

その声を合図に、リグレットは叢から飛び出し、森の出口へ向けて一目散に走り出した。

「クラスターレイドっ！」

広範囲の地属性譜術が突然レプリカナイトの群がっている地点の足元に炸裂した。

「「「……っ！？」「」」

慌ててナイト達はその譜術が放たれた根先の方へと振り返る。

そこには物凄いスピードでナイト達の包囲網へと突っ込んでくるリグレットとミュウの姿があった。

ナイト達は標的を発見すると、即座に続々とその場に集結してくる。

その数はざつと五十は超えていた。

しかし、リグレットはそんなことお構いなしに突っ込んだ。

バンバンバンバンバンっ！

目にも止まらぬ早撃ちで正確にナイト達の急所を打ち貫く。

銃の威力が凄いのか、彼女の腕が凄いのか……攻撃を受けたナイトは一撃で地に伏せてゆく。

そして彼女の次なる譜術が唱えられた。

「エクレールラルムっ！」

ナイト達が集結してきた所を見計らって、十字の金光から光属性の光熱を放つ譜術を炸裂させた。

範囲もそこそこ広く、威力もあるので非常に使いやすい譜術。

これにはさすがに敏速のナイト達でも避け切れず、次々に光熱に溶かされていった。

威力があり正確に狙いを定めて敵を打ち貫く射撃と、隙の無く状況に適した判断で放たれる譜術、この二つをかね揃えたリグレットに、ナイト達は彼女に攻撃を与えるどころか、触れることすら出来ずにいた。

「みゅみゅっ！ さすがリグレットさんですのっ、爽快ですのっ」

そしてミュウは、パワーアップしたリングの力を借りて一緒に戦う……と思いきや、ただリグレットの頭の上で何とも言えない爽快感を味わうのに夢中になっているだけだった。

リグレットはそのまま森の出口を掛け抜けた。ナイト達は彼女のスピードに着いて来れていない。

近接攻撃しか出来ないナイト達にとって、相手にスピードで負けてしまうと何もやりようがないのだ。

このままなら無傷で森を脱出できる！ そう思った矢先――

「……っ!？」

前方にはすでに譜術を唱え終えたレプリカルーンの大群が待ち構えていた。

レプリカルーン――レプリカナイトよりも体力、耐久力では劣るが、譜術攻撃力は半端なく強い。

まさに超一流譜術者と変わりない戦闘力を持つといっても過言ではなく、ある意味ナイトよりも厄介な相手。

ただし、その譜術詠唱中には大きく隙が生じるため、譜術が放たれる前に倒せばそんなに苦戦しない相手でもある。

……だが、目の前のルーン達はすでに詠唱が唱え終えられていた。

「『イラプションっ！』」

レプリカルーン達の言葉が重なり、そして一斉に放たれる炎の譜術。

「くっ……」

渦状の火炎譜術が真っ直ぐリグレットを目掛けて飛んでくる。

バンバンバンバンっ！

リグレットはその火の渦に向けてひたすら早撃ちを繰り返す。すると放たれた弾とぶつかった火の渦は、互いの威力に相殺され、次々に効力を失う。

相殺しきれなかった火の渦は何とか眼前で交わり、丸焼けにならずに済んだ。

想定外の相手を前にしても冷静な判断を失わず、リグレットはその攻撃全てを華麗に対処する。

後ろからはナイト達が追ってきている為、立ち止まることは出来ない。

リグレットはそのままレプリカルーンが群がっている前方だけを向いて、スピードを落とすことなく突っ込んだ。

ルーン達は譜術の再詠唱に入るが、それが唱え終わられる前にリグレット譜術が先に完成した。

「クラスターレイドっ！」

最初に放った譜術と同じものをルーン達の足元に炸裂させる。先ほどは奇襲用に放ったのだが、今度は攻撃用に討つ。

耐久力の低いルーンには威力の弱いこの術でも効果は抜群だった。

地属性譜術の激流に、ある者は詠唱を止められ、ある者はそのまま地に伏せてしまう。

耐久力がないにも程が感じられる体たらくだった。

しかし、如何にこの術が範囲広しと言えど、すべてのルーン達を撒き込めたわけではない。

攻撃に撒き込まれなかったルーン達は、そのまま詠唱を唱え続けていた。

リグレットは再び銃を構え、また譜術を相殺する姿勢を見せたまま走る。

ぐいっ！

「……っ!？」

しかし、地に伏せていたレプリカルーンの一匹が不意にリグレットの足を掴み、彼女の体制を崩させた。

「『イラプションっ!』」

その瞬間、ルーン達の譜術攻撃の第二派が一斉に放たれた。

第7話 魔弾炸裂（後書き）

「スキット」 【応援？】

リグレット「はあっ！ エクレールラルムっ！」

ミュウ「（もぐもぐ）……みゅみゅぅ！ リグレットさん、さすがですの〜」

リグレット「食らえ！ ホーリーランスっ！」

ミュウ「（もぐもぐもぐ）……強いですの〜、リグレットさんは最強ですの〜」

リグレット「そこだ！ クラスターレイドっ！」

ミュウ「（もぐもぐもぐもぐ）……でもティアさんと技が被りすぎているのが……（もぐもぐ）……少し残念ですの〜……」

リグレット「……………ミュウ」

ミュウ「みゅ？ 何ですの？」

リグレット「何を……しているんだ？」

ミュウ「何って……（もぐもぐ）……応援ですの〜」

リグレット「菓子を口に含んだままか？」

第8話 たった一発の攻撃で（前書き）

土日は日中更新ができます。平日は夕方・夜限定ですけれど。

った。

森を脱出してから数十分、リグレットはようやく走りを止め、一息吐いた。

それでも疲れた様子は見せていない。相変わらずとんでもない体力の持ち主だ。

「ここまでくればナイト達の追跡の心配もないだろう」

「みゅー！ さすがリグレットさんですの、レプリカナイト達の姿がもう全然見えなですの」

「（……すごいのは私ではなく、お前だ）」

ミュウは気付いていなかったが、彼の放った炎が威嚇効果を放っていた。

たった一発の攻撃で完全にナイト達の追跡意欲を失せさせていたのだ。

よって今回の立役者はリグレットではなくミュウであった。

「（ヴァーゲストがリングを欲しがる理由が少し分かった気がする……）」

あの炎の威力は六神将のリグレットですら驚愕するものだった。それほどリングに絶大なパワーが秘めていることがはっきりした。

「みゅー、それにしても黒い人はどうしたですの？ 追っかけ

てこないですの」

ミユウは澄み渡った青い空をキョロキョロと見渡しながら言う。

「ああ。だが奴がこのまま我らを易々と逃がしてくれるとは思えない。いつでも万全の体力で戦えるようここからは警戒しながら歩いて行こう」

リグレットならもう一時間くらい走ったところで万全な体力をキープ出来そうな気もするが、念には念を込めて……と言うことだろう。

ミユウ達はそれからずっと周りを警戒しつつ、南に位置する街を目指すのだった。

一方、その話題になっている人物はと言うと……

「そういえば、どうやってナイト達から報告を受けるつもりだったんだ？ 俺」

樹海の更に深部へと歩み続けているアザゼルは、ふとそんな疑問を口に出していた。

アザゼルからナイト達へは念話で通ずることは可能だが、ナイト達からアザゼルへは……

「ダメダメだな……俺」

一人、卑下し落ち込むアザゼル。
彼がダメダメだってことくらい、今更言われなくても皆分かっていることだった。

ぐうゝ

フレスベルグは今も湖にてお腹を空かせながら主人の帰りを待ち続けている。

リグレットとミュウは澄み切った満天の青い空をじーっと見つめ、
呆然としながらそれぞれ呟いた。

「……追いかけてこなかったな」
「……追いかけてこなかったですの」

ずっと警戒しながら歩くこと小一時間、特に異変が起こらぬまま
街の見える景色の場所にまでやってきた二人。
拍子抜けとはまさにこのことである。

「必ず追いかけてくると踏んでいたのだが、何を考えているのだから……
あの男の真意が読めないわ」

アザゼルのポケ行動がリグレットの心中に大きな混乱を招いていた。

真意が読めないのも当然である。
彼自身予測できなかった事態が、進行形で本人を襲っているのだから……

「首が痛いのですの」

ミュウが首をコキコキ鳴らし辛そうな顔を見ると、そのままリグレットの頭の上で倒れ伏せた。

小一時間ずっと空ばかりを見上げていたので首筋に痛みが生じるのも無理はない。

肩が凝ったのはリグレットもまた同じだった。

「とりあえず街へ入って先に宿を取ろう」

リグレットの提案にミュウも無言で頷くと、二人はゆっくりとした赴きで街の門の方へと向かった。

第8話 たった一発の攻撃で（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それとお気に入り登録、評価を付けてくれた人ありがとうございます！

こんなにもPVが増えるとは思わなかったので、とても感動しております。

これからモチベーションを保って、更新頑張れそうです。

第9話 おっかないおっさんの像（前書き）

お昼に更新する予定でしたが、少し用ができてしまい、いつもの時間の更新になってしまいました。

そしてサブタイトルがだんだん適当になってきた気が……（汗

第9話 おつかないおっさんの像

自由の街『リーム』。

この街の特徴は表と裏がハッキリと分かれている所だろう。街門がある南側の道が表通り、その反対の路地が裏通り。

表通りは農園や雑貨店など仕事に真面目な人間が集まり治安も非常に良い。今も子供達が元気に走り回っている。

しかし、問題なのは裏通り、ぎっしりと敷き詰められたように並ぶ建物は、酒場や博打施設など事業店が大半を占めている。

店間の競争が特徴的だが、お世辞にも治安が良いとは言いがたい。治安が悪くなれば店間の嫌がらせが始まったり、柄の悪い客が店の中で暴れたりと人生に暴落した人間が群がっていることが多い。

ミュウ達は今、表通りを歩んでいる。

しかし、なぜか彼らに街の住人達の視線が集中していた。

「みゆみゆ？　なんか見られている気がするのですの〜」

視線に気づいたミュウが辺りをキョロキョロしながら不思議そうに顔をしかめた。

対するリグレットはそんな視線など気にせず、平然とした表情を崩さぬのまま真っ直ぐ前だけを見続けている。

「ああ、なぜか私が入通りの多い街を歩くといつも視線が集中するのだ。まあ軍服を着たまま街の中へ入ったりしたらこの反応も当然だろう」

「みゆみゆ〜う、なるほどですの〜」

リグレットの言葉に納得するミュウ。

では、ここで少し街の人達の心の中を覗いてみよう。

「（か、可憐だ……）」

「（あんな美人……今まで見たことがない）」

「（声かけちゃおうかなあ。ああ、でも遠くで見ているだけで幸せかも♪）」

視線の真意はそんな所だった。

妙に肌を露出している軍服に見えない軍服、長身でハイソックスにミニスカを履いた金髪美女。

こんな女性が堂々と街の中など歩いていたら視線が集まるのは当然の成り行きだった。

そんな自覚など微塵に感じていないリグレットは、これから街の中を歩く度に視線を集め続けることだろう。

宿の予約を取り、しばらく自由行動ということになったが、ミュウは別段することがあるわけでもなく、そのままリグレットの頭の上に居続けた。

チクチク感覚にも完全に慣れたミュウは、ここがお気に入りの場所になった様子である。

しばらくリグレットの頭の上でゴロゴロしていたミュウは、ふと前方にみたことのある造物を発見した。

「みゆみゆ？ あの怖い顔の石造、見たことあるですよ」

目の前に飛び込んできた光景は、ミュウが前に立ち寄った街と同じように噴水の中央に堂々と聳え立つ怖い顔のおっさんの石造だった。

威厳のある容姿に二メートルを越す巨体、良い言い方をすると赴きのある風体とも思えるが、ミュウにしてみたら、やっぱりただの怖い顔のおっさんだった。

するとリグレットは石造を威嚇するように睨むと、この石造の人物の正体について語り始めた。

「……この男はヴァーゲストという名の男だ」

「みゆ？ ヴァーツラ——」

「違う！ その間違い方だけはするな！」

すっかり別タイトルの敵キャラの名を言いそうになったミュウの口を慌てて塞ぐリグレット。

ゴホンッと咳払いを一つ入れて気を取り直すと、リグレットは再び語りを続けた。

「簡単に言つとこの世界の支配者よ。お前を襲っていた黒い装備の男も奴の仲間だ」

「みゆ？ つまり王様ってことですよ？」

「……違うな。王と支配者では全然意味合いが違う。奴はこの世界の均衡を崩そうとしている。言わば革命者だ」

リグレットの表情が更に曇って行く。どうやらリグレットはヴァーゲストという男に対して嫌悪を抱かなければならない事情があるようだ。

実は彼女、この街へ寄った目的はこの石造の人物、ヴァーゲストの動向を探る手がかりを集める為だった。

「……………みゆ？」

一方で全く理解出来ていなかったミュウ。

彼にしてみたら少しでも難しい言葉が出てきた地点で、アウトらしい。

「もういい、詳しいことは『モーヴ』に着いてから話すとしてよう。今は情報収拾が先だ。裏通りへ行くわよ」

石造であろうとヴァーゲストの顔は見たくないのか、リグレットは早足でその場を去って行く。

表通りに聳える一つの石像。

しかし、のどかな街並みの風景には余りにも場違いな雰囲気を感じていた石像だった。

表通りを抜けると、明るかった雰囲気が一転し、昼だというのに異様な暗さを放つ暗黒街が姿を現す。それがリームの裏通りだ。

道端で寝ているもの、酒を飲んでいるもの、喧嘩を始めて殴り合っているもの……世の中の墮落者が集結した光景としては当然のものかもしれないが、やはり見ていて気持ち良いものではない。

ミュウはリグレットの頭の上で丸くなって怯えているが、対する

彼女はそんな風景に気を止めようともしせず堂々と歩んでいた。

そしてここでもリグレットは大衆の注目の的となっていた。
表通りと同じように遠くて眺めている人がほとんどだが、中には
声を掛けてくるものもいた。

「よー、ネーちゃん……ヒック……ものすごい美人だなー……ヒ
ック……俺と一緒に酒場で杯をかわさねえか？」

明らかに『僕、酔っ払ってます』と言わんばかりの男が声を掛け
てくる。

しかもまだ飲み足りないのか、リグレットを酒場に誘ってきた。
ある意味強者かもしれない。

リグレットはもちろんそんな誘いなど軽くあしらう……と思いき
や、彼女から出た言葉は意外なものだった。

「酒場、か。いいだろう、案内しろ」

リグレットは意外にも肯定を示した。
これにはミュウも声を掛けてきた男ですらも驚愕していた。

「ふっ。女はそうこなくつちな。ネーちゃん、こつちだ」

男は嫌らしく笑みを浮かべると、手を招いて彼女を誘導しながら
先導した。

ミュウはリグレットの肩にピョンと飛び移ると、そのまま彼女に
耳打ちをした。

「（リグレットさん、いいのです？ ああいう男の人が好みですの

「？」

「（そんなわけないだろう！……酒場は情報の溜まり場でもあるからな。それに何故かこういう輩は重要な情報を隠し持っていることが多い）」

「（みゅう。でもなんだか危なそうな雰囲気ですの〜）」

「（まあ、これほど下落した暗黒街だ。少しくらい発砲騒ぎになった所で特に問題はないだろう）」

「（みゅうみゅう！？）」

さすがに発砲騒ぎは不味い気がするのだが、リグレットの目は本気だ。

つまりそういう事態も有り得ると言うことだろう。

「ネーちゃん……ヒック……ついたぞ。ここが酒場だ」

「そうか、ご苦労だった」

ガンッ！

「はう……っ！」

酒場に着いた途端、この男にはもう用済みと言わんばかりに、彼の後頭部を譜業銃の柄でぶん殴るリグレット。

当たり所が悪かったのか、それとも彼女が狙ってやったことなのか、男はその一撃で気絶し目を回しながら地に伏せた。

「よし、行くぞ」

「（……着いてくるんじゃないかったですの〜！）」

リグレットの大胆行動を目の当たりにしたミュウは、早くも後悔の念に浸るのであった。

第9話 おっかないおっさんの像（後書き）

見てくれてありがとうございます！

そろそろ9話分全部見直してみて、誤字脱字を修正していこうかと思えます。

サブタイ横に（改）がたくさんついていても内容は変わっていませんのでご安心を

第10話 桃色の髪と黒い導師服（前書き）

実はというと僕、TOAのサブクエを結構見逃しながら一回クリアしただけなんですよね。

なので物語に変な矛盾が出てきてしまうかもしれませんがご了承ください。まあ、異世界を出している時点で矛盾もなにもないんですけどねw

第10話 桃色の髪と黒い導師服

店内はある意味予想通りの墮落っぷりだった。

酔った男が酒瓶を片手に暴れていたり、周りの客に絡んで喧嘩になつていたりとまさに酒乱の地獄絵図。

現在もゴロツキ達によるパイ生地を用いたドッジボールが開催されている。

ミュウ達はそんな最中に酒場のドアを潜った。

リグレットはドアを潜ると、何の前ぶれもなくいきなり譜業銃を構えた。

「おい、ゴロツキ共。ケガをしたくなかったらヴァーゲストの動向について知っていることを全て話せ」

「（いきなり脅しですのっ!?!）」

彼女が先ほど言った通り、いきなり発砲騒ぎの前兆を……しかも自分から見せるリグレット。

ある意味ゴロツキよりも性質が悪いかも知れない。

しかし、大半のゴロツキは彼女の脅しに全く動じていない様子だった。

「はっ！ そんな風に銃を向けられることなど、こっちは日常茶飯事でな。そんなんじゃ全くビビんねんだ……よっ！」

セリフを終えるのと同時に、リグレットに向けてパイ生地を投げ付けるゴロツキ。

それが基点となって、周りにいたゴロツキ達も次々に生地を投げてきた。

リグレットは余裕でその全ての投擲を交わす。軽やかなステップで、右へ、左へ、下へ……

「おぶっ！」

だが、リグレットが下へ避けた瞬間、彼女の頭の上に居たミュウの顔面に見事パイ生地が命中した。

「すまない。お前が居たの忘れていたわ」

「忘れてた……じゃないですよ〜！ リグレットさん酷いですよ〜」

顔を生地塗れにしながら涙目で訴えるミュウ。

「分かった分かった。とりあえずこれで顔をふけ」

そう言い、どこから取り出したハンカチを手渡し、ミュウを氣遣うリグレット。

「みゅう。ありがとうございます〜」

リグレットの厚意を素直に受けとるミュウ。

やはり彼女、ミュウの前ではたまに優しい一面を見せる。

「それと、顔を拭くときは頭から降りてくれ。私の髪にパイくずが付く」

「みゅみゅっ！？」

そう言つと、ミュウが自ら降りる前にリグレットは彼の耳を引っつかみ、少々乱暴に地面へ投げ捨てた。

優しいリグレットはほんの一瞬にして、閃光のように消え失せて

いたのだった。

ミュウが床に降りて顔を拭いている最中にも、ゴロツキ達の怒涛のパイ投げ攻撃は続いていた。

当然、一発も当たる気配はないのだが、いつまでも鳴り止まないその攻撃にリグレットは痺れを切らし始める。

「仕方ない。脅しではなく、本気だということを少し示してやろう」

そう言い放つと、リグレットは宙に飛び回るパイを一眼し、両手に構えた銃の引き金に指を掛けた。

バンバンバンバンバンっ！！

相変わらず見事な早撃ちが店内に炸裂する。

そして、弾道は全て空中に投げ放たれていたパイに命中し、生地は粉と化して床に散らばった。

「「「……………」」」

信じられない神業を目の当たりにしたゴロツキ達は、口を開けたまま目を見開いて固まった。

室内に充満する沈黙、その均衡を解いたのはミュウだった。

「おぶひゅあっ！」

黙する室内の中、ミュウの悲鳴に近い声が響いた。

見ると、リグレットが粉にしたパイ生地を今度は頭から被っている彼の姿があった。

頭上に飛び交うパイが粉になれば、当然床に座っていたミュウはその粉くずを頭から被ることになる。

ミュウにしてみれば突然大量の粉が頭から振ってきたようなものだ。

「……リグレットさん」

今度は粉まみれになりながら、再び哀みの目でリグレットを見つめるミュウ。

その表情からは少々怒気も放たれていた。

「さあ、この床に散らばるパイみたいになりたくなかったら、知っている情報を全て話すのだな」

「（無視ですよ！？）」

極自然にミュウの存在をスルーして、話を先へ進めるリグレット。よく見ると、彼女の頬に一筋の汗が流れていた。

彼女なりに『やってしまった』と思う所はあるらしい。

しかし、チーグル相手に頭を下げるのはプライドが許さないのか、リグレットはなるべくミュウの姿を視界にいれないようにしている。俗に言う『気付かないフリ』である。

「か、格好良い……」

突然、ゴロツキの一人がポツリと言葉を漏らした。

それに連なって、他のゴロツキ達も次々に心中を言葉に漏らし始

めた。

「美しい……」

「（ぼーっ……）」

リグレットの銃技とその美しい容姿に見惚れ、次々と頬を朱に染めてゆく男共。

そして、ここから怒濤の自己アピールタイムが始まる。

「姐さん！ 俺の持っている情報、全て教えます！」

「いやいや、姐さん！ 俺の方が良い情報を持ってまっせ！」

「バカ言え！ 姐さんに情報を与えるのは俺に決まっているだろ！」

リグレットのことを『姐さん』と称して、彼女に詰寄ってくる男共。

このコントみたいな状況に当のリグレットはただ困惑とするしかなかった。

「なるほど。街の中にまでヴァーゲストの手駒が徘徊しているのか」

リグレットの睨んだ通り、ゴロツキ達はたくさんの貴重情報を隠し持っていた。

彼女は奥にあるテーブルに腰を掛け、一人一人ゴロツキ達的情報を丁寧に聞き入っていた。今の男でもう四人目だ。

話を終えると次の男が新たな情報を語る。一人一人の話が長いの

で、彼女の席の後ろには『姐さん待ち』と称される情報屋達の列が連なっていた。

もはやリグレットの魅力に酒場中の男を虜になっている……と、思いきや、一人だけカウンターの奥でつまらなそうにしている男がいた。

「（けっ、何が姐さんだよ。俺の店は客の気性の荒さが売りだつたのに）」

そう、この酒場のマスターだ。彼はつまらなそうに舌打ちをしながらいグレットを睨み続けている。

「（オマケに俺の店をメチャクチャにしやがって……あゝ。くそ！ムシヤクシヤする！）」

店がメチャクチャだったのは彼女が店に入る前からだったはずだが、マスターは何か彼女に因縁を付けないと気が済まなくなっていた。

そんなマスターの視界にふとある珍物の姿が目に入った。

「（ふっ、こいつは使えるかもしれねえなあ）」

マスターが嫌らしく浮かべる笑みの先には、勝手に店の料理を食べ始めているミユウの姿があった。

一方リグレットの方はようやく一段落つけそうなくらい情報屋の人数を消化していた。

数十人から得た情報を彼女は一言一句逃さず記憶していた。これにはさすがのリグレットにも疲労の色が見え始めている。

そしてついに『姐さん待ち』の列は無くなり、最後の情報屋が彼女と対向して席についた。

「俺の情報なんですが……いや、情報とはいいがたいかも知れませんが、昨日、妙な女が俺の店に訪ねてきたんすよ」

どうやらこの男は情報屋ではなく、どこかの店主らしい。

「どんな女だ？」

リグレットが聞き返すと、彼はゆっくりと真実の回想を語り始めた。

「女……というより、子供だな。年は十そこそこくらいの……そのガキが俺にこう訪ねてきたんすよ。『ソーサリーリングという響律付を見たことはないか？』ってね」

「（やはり、ヴァーゲストは部下を総導出させてリングを探しているのか）」

ある意味リグレットの予想通りの情報。

しかしこの後、男は思いも寄らぬ情報を語り始めた。

「相手はガキだから適当にあしらおうと思ったんすけど……そのガキ、後ろにライガとフレスベルグなんて連れてやがった。もう俺は腰が引けちゃったよ」

その言葉を聞いた瞬間、リグレットは思いつきり表情を強張らせた。

そして迫るように男に詰寄ると、緊迫した表情のままこう聞き返す。

「……っ！？ おい！ その女の特徴は！？ 外見はっ！？」

「と、特徴っすか？ 長い桃色の髪に……黒い導師服を着ていたな。妙に根暗なガキでヘンテコなヌイグルミみたいなものを抱いていた」

「……っ！！」

微妙に曖昧な特徴表現だが、リグレットに取っては確信的な言葉だった。

「（まさか……まさか……でもなぜだ？ なぜアイツがリングを探る必要があるのだ？ ……ま、まさか……）」

リグレットの表情は動揺からか曇っていた。確証があるわけではない、だが男が言った特徴の全てに彼女の知り合いの姿が当てはまっていた。

「（詳しく調べる必要があるな）。情報提供感謝する！ ……ミュウ、行くわよ！」

ガタンと音を立て、席を立つと、リグレットは他のテーブルの上で料理を食べていたミュウに声を掛けた。

「みゅみゅーう、分かりま——」

「そうは行かねえなあっ！」

ミュウがリグレットの傍へ駆け寄ろうとしたその時、店のマスターがミュウの身体を引っ掴み、そして彼の頭に包丁を突きつけてきた。

第10話 桃色の髪と黒い導師服（後書き）

見てくれてありがとうございます！

実は投稿するうえで一番悩ましいのはサブタイトルなんですよね。

今回みたいに本文ネタバレを含んだタイトルは自重した方がいいのかなあ？ ふゝむ……

第11話 アツはナツいのです(前書き)

試しに書き方を少し変えてみました。

行間を開けた今回の書き方と前回までの書き方、どちらが良かったか、感想で送ってもらえると幸いです。

第11話 アツはナツいのです

「みゅっ！？ みゅみゅみゅっ！？」

突然の出来事にミュウの気は完全に動転していた。無意味に足をジタバタさせるが無駄な抵抗だった。

そんなミュウとは対称的にリグレットは冷静に言葉を連ねる。

「ソイツは私の連れだ。離してやってくれないか？」

軽く相手を睨み、威嚇するように怒気を放ちながら言葉をぶつけるリグレット。

しかし、店主は鼻で笑い、小馬鹿にしたような態度で反抗してきた。

「はっ！ そんな簡単に離すつもりがあつたら最初から捕まえちゃいねえよ」

もつともな意見で反論する店主。

話し合いは無駄だと悟つたリグレットは腰から譜業銃を取り出そうとする。

「おっとっ！ 銃を構えた瞬間、こいつの頭は血祭りになるぜ。まあ、どっちにしろそうするつもりだがな」

店主の包丁を持つ手に力が入る。恐らく彼の決意は本物だろう。

「……………」

リグレットは考え込むように表情を固める。ミュウのピンチだといふのに全く動揺を見せていない様子だった。

するとリグレットは突然ミュウ達に背を向け、酒場の入り口前まで歩き出した。

「おいっ！ こいつがどうなってもいいってーのか!？」

この反応には、逆に店主の方が動揺を示していた。彼にしてみればリグレットの動揺する姿を見たいが為に取った行動だけに、いつまでも冷静で居られると虚しさだけが胸に募る。

「ミュウ、そのまま上を向け」

「みゅ？」

突然のリグレットが出した命令に、素直に従い、上を向くミュウ。

「そのまま火を拭け」

「みゅみゅーう、わかりましたですのー」

ミュウは笑顔で了承をすると、瞬時にソーサリーリングの第五音素の譜が全体を赤く変色させた。

だが、店主はそんなリングの変化になど気付かず、余裕に笑いこらげていた。

「はっはっはっ！　こんな小動物が吐く炎なんて怖くも――」

「ふぁいあ~~
っ！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオっ！！

ミユウの口から放たれた圧倒的な規模の炎が、店主の顔をかすめ、店の屋根全てを燃やし尽くした。

そしてこの圧倒的な炎を見た者は共通した反応を示すことをリグレットは知っていた。

「「「「.....」」」」

啞然とする一同達。

店主の手元から、ポロっと包丁が.....そしてミユウが床に転げ落ちた。

「みゆううう。死ぬかと思ったですの〜」

酒場での一軒の後、表通りに帰ってきた二人は宿の一室で一息ついていた。

ミュウは酒場での出来事を回想しながら愚痴るように言葉を漏らしていた。

しかし、リグレットは別のことを考えていた為、ミュウの愚痴など耳に入ってきていなかった。

「（リングを探していると言うことは、アイツもヴァーゲスト側に着いているということか？　しかし、なぜ……？）」

「みゆ？　リグレットさん、何を怖い顔しているのです？」

リグレットの様子がおかしいことに気付いたミュウは、心配そうに彼女の顔を覗き見る。

だが、考え事に没頭しているリグレットには目の前の迫るミュウの顔にも気付いていなかった。

「（アイツがこの街に居たのは昨日と聞いた。つまりもうこの街に滞在している可能性は低い）」

「みゆ……？　リグレットさん？」

ミュウはリグレットの肩に乗り移り、小さな手で彼女の頬をペシペシと叩く。その光景は、ペットが主人にかまって欲しい時に見せる仕種によく似ていた。

しかしリグレットはそれでも気付かない。

「（このような平野に隔離された街だと、次にアイツがどこに行ったのかは推測しがたいな）」

「みゅみゅ。リグレットさんが突っ込まないなんて明らかにオカシイですの」

ミュウは彼女の額に手を当てる。熱を測っているつもりなのだろう。

しかし、体温に異常は感じられない。

リグレットが終止無言なので、なぜかミュウにどうしても彼女にツッコんでもらいたいという衝動が押し寄せた。

「え……ごほん……いや、リグレットさん、アツはナツいのですの」

「……………」

ミュウの決死の覚悟で繰り出した定番ボケにも反応を示さないリグレット。

それでもミュウはめげなかった。

「（みゅう……無反応は辛いのですが……でも負けないのですの）。いや、リグレットさん！ サムはフユいのですの」

今度はあまり聞かないボケを繰り出すミュウ。定番ボケの冬バー

ジョンだが、説明がないとたぶんわからない。

「……………」

「みゅうううう……………」

ミュウが生まれて初めてツツコミ無しの寂しさを実感した瞬間だった。

リグレットはこれから取るべき最良の行動を思考していた。

そして長考の末、導き出した答えは――

「ミュウ、予定を変え、これからモーヴへ直行することに――」

リグレットはなぜか言葉を途中で止めた……………というより止まった。妙な珍物が視界に入ってきたからである。

「ミュウ……………何をやっているのだ？」

見ると、鼻に割り箸を突き刺し、お腹にマジックで腹顔が描かれており、どこからか仕入れてきた大きなボールの上で、器用に皿回しをしているミュウの姿が在った。

「ふが！？ ふがががふががふが……………」

鼻に割り箸を突き刺している為、ミュウが何を言っているのかわからない。

リグレットは無言でミュウの鼻に刺さっている割り箸を抜いた。

「やっと、リグレットさんがツッコんでくれたですの〜」

定番ボケでツッコんでももらえなかったミュウは、一発芸で攻めることにしていた。

腹芸に始まり、皿回し、球乗り、とエスカレートして行き、最終的に現在に至った。

「……………」

ズボッ！

「ふがつ！」

無言のまま、再びミュウの鼻に割り箸突っ込むリグレット。

「予定を変更し、今からモーヴへ向かうことにする。お前も準備だけは済ませておけ」

そう言つと、彼女は部屋を出て行った。道具屋に常備品でも買いに行くのだろう。

「……………」

一人部屋に残されたミュウは、ゆっくりと玉を降り、静かに鼻から割り箸を抜いた。

天然以外のボケは、どうもイマイチなミュウだった。

第11話 アツはナツいですの（後書き）

「スキット」 【姐さんよ、永遠に】

店主「店が……俺の店が……丸焦げに……」

ゴロツキ達『……………』

店主「くそっ！ このままじゃ済まさねえぞ！ ……そうだ、あることないこと噂を広めてこの街から出入り禁止令を食らわしてやる！」

ゴロツキ達『……っ！？』

店主「よし、さっそく……って、アレ？ どうしたんだ？ お前ら……俺の周りに集まってきて……あれ？ なんか殺気を放ってないか！？」

ゴロツキA「俺達の姐さんに……」

ゴロツキB「出入り禁止令など……」

ゴロツキC「ふざけたこと抜かすんじゃない！ クソオヤジが……！」

店主「うぎゃあああああああああああああつ！」

……………

.....

.....

ゴロツキD「……姐さん、悪は絶ちました……」

ゴロツキE「俺達はいつでも姐さんの帰りを待っています……」

ゴロツキF「姐さんとの再会を信じて……一同、敬礼!!」

ゴロツキ一同『(ビシッ!)』

店主「……な、なんなんだ……こいつら……」

第12話 湖の戦い（前書き）

「スキット」 【旅準備】

リグレット「医療関係に……ボトル関係……」

ミュウ「お菓子関係に……木の実関係……」

リグレット「あと食材と……日用品も……」

ミュウ「あとお菓子関係と……お菓子関係も……」

リグレット「よし、準備するものはこんな所か……」

ミュウ「こつちも準備完了ですの〜」

リグレット「……………エクレールラルム！」

ミュウ「みゅうううっ！？ ミュウの荷物が！ 必需品が墨につ
！？」

リグレット「よし、準備も整った所でさっさと街を出るわよ」

ミュウ「……………（シクシク）」

第12話 湖の戦い

「はぁ……はぁ……はぁ……や、やっと……森から出られた……」
「っ！！」

未だに樹海をさまよい続けていたアザゼルに、ようやく祝福のゴールが訪れる。

疲労が汗となり、頭天边から足の根元まで汗球が浸っている。黒いフェイスマスクも汗で満遍なく濡れていた。

「ちっ、結局フレスベルグと合流できなかったじゃねえか。ったく、あの鳥め……（ぶつぶつ）」

まるで合流出来なかったのは自分のせいではなく、フレスベルグの方に非があるみたいない方をするアザゼル。

「まあ、あんな鳥頭なんぞ放っておくとして……これからどうするか……」

森から脱出できたとはいえ、その先に待つのは何も無い平野のみ……フレスベルグ不在で上空移動ができない今、状況は森の中にいるときと何ら変わりなかった。

「しゃーねえ……歩くしか方法は——」

「——アザゼル……」

愚痴りながら歩みを進めたその時、不意に背後から何者かに声を

掛けられた。

「うおおおうっ！」

こんな辺境に人がいるとは思わなかったアザゼルは、思いっきり身体を仰け反らせながら驚いた。

振り返ったその先には、長いピンク髪の導師服を着た、まだ幼さが残る少女がそこに立っていた。

その背後にはライガとフレスベルグが待機している。ちなみにアザゼルが連れていたフレスベルグとは別種である。

「……何だ、新入りのガキか。何でこんな所にいるんだ？」

「リングを探していたら……アザゼルの姿が……見えたから……」

なぜか躊躇いがちに言葉を連ねる少女。

別に緊張しているわけではなく、単にこっという性格なのだろう。

「そうか。でもリングはもうこの森にはねえぞ。たぶんとっくに脱出済みだろうしな」

つまらなそうに顔を顰め、舌打ちを入れるアザゼル。

自分の間抜けが原因とはいえ、ミュウとリグレットに逃げられたことで彼の機嫌はよろしくなかった。

「……なんだ。じゃここにはもう用は……ないから」

そういつと、背後に控えていたフレスベルグに再び跨る少女。

だが、ここでアザゼルがストップを掛けた。

「待て、お前もフレスベルグを連れていたのか。じゃ俺も乗せて行け」

「やだ。じゃあね」

アザゼルの誠意の感じられない頼み方に即答で断る少女。そしてすぐに空の彼方へと飛び去って行った。

一人残った彼に残るのは、新入りにすら見捨てられたという事実の虚しさ。

「……さて、本当にこれからどうしよう」

新入りの少女にあっさり振られたアザゼルは、虚しさのあまりしばし空を見上げながらしばらく呆然と立ち尽くすのだった。

バザバサバサバサバサ……

空を見上げていると、湖に待機していたはずのフレスベルグが大空を駆け巡っていた。

何時間も放置されていたフレスベルグは、主人の顔など真っ白に忘れ、彼は完全に野生へと戻っていたのであった。

永遠と広がる緑と土色の平野。そんな道無き道をひたすら歩み続けた先に見えた蒼の水流。

その場所は旅人からは『平野のオアシス』と呼ばれ、今も多くの旅人が水流の音に耳を傾けながら旅の疲れを癒している。

ミュウとリグレットもその一角で休憩を取っていた。

「綺麗な湖ですの〜」

目の前に広がる絶景に、目を輝かせながら感動するミュウ。

つい最近別の湖で溺れかけたことなど、彼の脳裏にはすでにデリート済みのことらしい。

「このオアシスは音素の気象密度が薄いのだ。だからこの場所に魔物が侵入することはほぼ皆無であり、湖が汚されないためこの透明度を保てている……というわけよ」

湖の諸事情を丁寧に語るリグレット。

「……………」

リグレットの丁寧な質問に、永きに渡る沈黙で返すミュウ。

「……すまない」

相手がミュウだったことを悟った瞬間、自分の誤りを認め素直に謝るリグレット。

しかし、謝られると逆に虚しさが募るだけであった。

「みゅうううう……」

落ち込みっぷりを全面に醸し出し、無口になるミュウ。

そんな彼の心情を察してか、リグレットが別の話題を振り、場の空気を取り払う。

「そつえばミュウ。お前、火を噴くこと以外にどんな能力があるのだ？ リングには三つの譜が刻まれているようだが……」

彼女はミュウと出会ってからミュウファイア以外のアクションを見たことがない。

この質問は疑問というより興味に近かった。

「みゅみゅう」 後の二つはミュウアタックと――」

気落ちを瞬時に取り払い、ミュウが満面の笑みで説明を始めようとした矢先、リグレットは周囲のある異変に気付いた。

「――ちょっと待て……湖の様子がおかしい」

普段は穏やかな水流の湖が、今は何故か大きく波打っていた。

水源は海や川に繋がっていないので魚など海洋生物はいないはず……いや、居たとしてもこの波打ちの大きさは異常だった。

リグレットは湖の底を凝視する。

透明な湖の底を満遍なく、異常な視力を誇るブルーの瞳が異変を限なく探す。

そして——見つけた。湖の中に徘徊する小さな影……

影は徐々に近づきながら浮上してくる。そして——

湖からザバアっ大きな水しぶきが立ち、その音源の中心から大鱗に覆われたアイスリザードが水面に姿を現した。

『魔物が出るはずのない』と説明された矢先に出没したこのトカゲみたいな外見の魔物、アイスリザードだ。

アイスリザード——オールドラントでは主に北方に生息する獣型の魔物であり、パワー、防御、回避、全てに至って普通。プレスも使ってくるが、それも注意さえしていればさほど怖くはない。特に突起して優れている能力があるわけでもない。

つまり、酷い言い方をすれば――

「……雑魚ね」

リグレットが本人（？）を目の前にしながら思わず本音を漏らす。アイスリザードより何倍も戦闘能力に優れたレプリカナイトの大部隊を退けたミュウ達に取って、今更こんな普通の魔物……それもたった一匹に遅れをとるはずがない。

その証拠に戦闘慣れしていないミュウですら平然としていた。

「グルルッ!？」

リグレットの『雑魚』発言に怒ったのか、アイスリザードの威嚇を含んだ視線が彼女達に注がれた。

どうやら人間の言葉を理解出来る利口なトカゲ――じゃなくて魔物らしい。

「確かアイツは炎が弱点のはずよ、ミュウ、やっちゃいなさい」

雑魚相手に自分が動くのは気が進まないのか、リグレットはミュウに命令を下した。気分は正にポ。モントレーナー!。

「了解ですの〜」

リグレットとは対象的にノリノリなテンションのミュウ。

リグレットに頼りにされたこと、自分が戦闘の足手まといになっ

ていないこと、それらがミューに取ってとても新鮮で、非常に嬉しいことでもあった。

ミュウは一步前に出ると、リングの力を引き出すため黙想しながら集中する。

すると、徐々にリングの全体が、そしてミュウの身体が真っ赤に変色した。

「ふあいあ~~~~~つ！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

力強い言葉と共に、リングに溜め込んだ力を一気に解放する。

「（相変わらずとんでもない威力だな）」

炎が放たれた瞬間、リグレットは改めてミュウファイアの迫力に感嘆した。

これはミュウ自身も気付いていないことだが、彼がリングの力を使う度にその威力は増している。これはミュウがリングの扱いに慣れてきたことを意味しているのだ。

そんなとんでもない威力の炎が真っ直ぐアイスリザードの方へ走っていた。

レプリカルーンですら瞬時に炭と化した必殺ファイア、炎が弱点なアイスリザードなら当然同じような結末を辿る……二人がそう確信し、気を緩めたその時――

ピカッ!!

アイスリザードの眼前で『何か』が光を放った。

そして……

「なっ!？」

「みゅみゅっ!？」

炎がアイスリザードの眼前で突然方向を変えた。

そして向きを変えた強大な炎は再び真っ直ぐ走り始める。

ミュウファイアはアイスリザードの眼前で『何か』に反射され、方向を変えたのだ。

向きを変えた炎が走るその先には、予想外の事態に驚愕し、硬直したままのミュウとリグレットの姿がそこにあった。

第12話 湖の戦い（後書き）

見てくれてありがとうございます！

書き方は前回と同じ行間を開ける方式でした。

ただ設定で行間を自由に弄れるみたいなんですよね。やり方わからないですがw

第13話 魔弾無効（前書き）

今回はちょっと短い……かな？

キリを良くするために本文2000文字程度です。

第13話 魔弾無効

「くっ！ あ、危なかった……」

跳ね返ってきた大火炎を前に呆気に取られていたリグレットだったが、自我を取り戻した刹那、瞬時に身体が回避行動を起こしていた為、ギリギリの所で火炎の範囲外へ脱出することに成功していた。

「はっ！ そうだ……ミユウ！ どこだ！？」

自分の他に、もう一匹あの大火炎に巻き込まれた者がいることを思い出したリグレットは、顔面蒼白になりながら必死にその姿を探した。

しかし、その姿はそこにはなかった。

最悪の展開が彼女の脳裏に過ぎろうとしていた。

しかし――

「みゅうう……こゝこゝでゝすゝのゝ」

姿が見えないのに声だけはした。

声の発端となる場所を探してみると、その声は空からしていることに気が付いた。

そして、空を見上げたりグレットは一瞬の自分の眼を疑った。

「お前……空を飛べたのか!？」

彼女の視線の先、そこには大きな耳を翼代わりにして大空に羽ばたいているミュウの姿が在った。

「みゅみゅーう♪ ミュウアクションの一つ、『ミュウウイング』ですのー♪」

大火炎が反射されて自らが巻き込まれそうになった時、彼は何時かと同じように慌ててミュウウイングを広げ、大空へ脱出していた。

「（なるほど、ソーサリーリングの力の一つか。それにしてもあの状況で瞬時にあそこまで移動するとは……常人では考えられない回避スピードだな）」

ミュウの判断スピードと回避能力に素直に感心するリグレット。

ちなみに常人では考えられない回避スピードなのはあなたも一緒ですよ、リグレットさん。

「リグレットさん！ 危ないですよっ!」

上空浮遊していたミュウが、突如大声でリグレットに注意を促した。

見ると、アイスリザードが吐いた氷のプレスが、リグレット目掛けて真っ直ぐ飛び放たれていた。

だが、彼女はそちらに目もくれないまま、サイドステップで軽く回避する。

そして振り向き様に、彼女は次の行動を起こしていた。

バンバンっ！

リグレットは敵の対面に視線を移すと、瞬時に二丁の譜業銃を取り出し銃弾を放った。

跳ね返されることを警戒してか、アイスリザード正面から少し角度を付けた位置から銃を放つ。

パリンパリンっ

「……っ！？」

跳ね返されられると思われていた銃弾は、アイスリザードの眼前でガラス版が割れたような音を立て、そのまま失速して湖の水面にプカクと浮かんでいた。

「「……？？」」

完全に攻撃を無力化されるというこの訳の分からない状況に、ミユウとリグレットはただ困惑するのであった。

バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン
っ！

リグレットの早撃ちで、数十発の弾道がアイスリザード目掛けて
飛び放たれる。

これだけ撃つても球切れしないのが不思議で仕方がない。

パリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパ
んっ！

彼女が放った弾数だけ、ガラスの割れるような音が鳴り響き、結
果として湖に弾丸が浮かび上がる。

しばらくそのやり取りが続けていたリグレットは一区切り付ける
と、大きいため息を吐き、両手に構えた譜業銃を腰にしまった。

そして上空浮遊していたミュウに呼びかけた。

「……ミュウ、降りて来い」

「みゅ？ わかりましたですの」

突然指名が掛かり、急ピッチで彼女の元へ降り立つミュウ。

そしてちゃっかりリグレットの頭の上へと綺麗に着地した。

「とりあえず、奴への攻撃無効化と火炎反射について少し分かったことがある」

「みゅっ！？　すごいのです、さすがリグレットさんです」

——などと言葉を交し合っている間にも、アイスリザードは湖の水面から氷ブレスを吐き続けている。

リグレットは余裕でサイドステップやバックステップなどを多用し、ひたすら避け続けながら話を先に進める。

「水面に弾丸と共に浮かんでいるガラスの破片……恐らくアレが火炎を跳ね返し、銃弾の威力を相殺したタネだろう」

湖に視線を移すと、確かに水面には銃弾の他にキラキラ光る破片のようなモノが浮かんでいる。

おかげで透明感漂う綺麗な湖に、大量の不純物が浮かび上がるという結果を招いていたりするが、今更そんな細かいことを気にするような二人ではなかった。

「譜術を用いた攻撃では反射されるのがオチだが、銃撃のような物理攻撃であれば、あのガラスのような盾を壊すことが出来るらしい……だが壊しても壊しても奴は無限にガラスの盾を量産する」

リグレットの早撃ちにも遅れを取らない量産スピード。

これではいくら発砲してもただの弾の無駄遣いで終わってしまう。

リグレットが譜業銃を納めた理由もその辺にあった。

「オマケに奴は湖から出てこない。近づくことが出来なければ奴を倒すことは不可能だろう」

「みゅみゅっ！？　じゃあ、どうするのです！？」

珍しく神妙な表情で聞き返すミュウに、リグレットは予想をもしていなかった答えを返してきた。

「逃げる」

「……………ハイ？」

あまりにも予想外の答えに、ミュウは声を裏返ししながら素っ頓狂な声を出すのであった。

第13話 魔弾無効（後書き）

見てくれてありがとうございます！

どうも切り処がわからずに本文が長い時もあれば短い時もあります。
次回もちよつと短い……かな？

第14話 蒼い結晶体（前書き）

またTOAやりたくなってきたなあ。3DSのアビスもやってみた
いす。

ハード持っていないけどww

第14話 蒼い結晶体

「そもそも私達には奴と戦う理由はない。戦っても無駄に体力を消耗するだけだ」

言われてみればその通りだったりする。

襲われたから対処した……だが対処しきれなかったから放置する……無責任な感じもするがそれは普通の反応だ。無理して倒す理由も彼女達にはない。

なぜ音素気象密度が低いこの場所に魔物が出現したのか、そしてあのガラスのような盾はなんだったのか、気になる所は盛りだくさんだが、今はそんなことを調べることも優先すべきことはある。

「奴が湖から出てこないということは、戦闘では向こうが有利であるが、逆に言えば100%逃走に成功するということだ……いい加減、奴のプレスを避け続けるのも疲れてきたからな」

ため息を吐きながらも、進行形でアイスリザードのプレス乱れ撃ちを避け続けているリグレット。

奴が凄いのには防御能力だけなので、唯一の遠距離攻撃方法であるプレス攻撃などリグレットの運動神経ならば目をつぶっても避け続けられるだろう。

「みゆうう。でも魔物をあんな所に放置して大丈夫ですか？ もしミユウ達が逃げた後に暴れ出したりなんかしたら……」

「そんなこと我々には関係ない。それにここに居る者達は皆冒険者だ。今更魔物に絡まれたくらいで慌てる者もいまい。というわけで行くぞ！」

「みゆうう……」

ミュウは多少納得のいつていない表情を浮かべているが、今回はリグレットの方が正論であるため何も言い返せなかった。

リグレットはサイドステップでブレスを避けながら、ゆっくりと奴との距離を取って行く。

焦らなくても逃走は成功すると確信しているため、リグレットは回避に集中しながら離れてゆくのが得策と考えたのだろう。

「ガルツ！？ ガルルルルツ！？」

ついにブレスの届かない所まで遠ざかると、アイスリザードはここで初めて2人が徐々に自分から距離を置いていることに気付き、咆哮を上げた。

「ミュウ、奴は何て言っているのだ？」

もうブレスが飛んでくる心配がないと悟ると、リグレットは湖に背を向け、頭に居座っていたミュウに質問を掛ける。

「がるるるゝ、って言っているのですのゝ」

「……………そうか」

あえてツツコミは居れず、リグレットはそれっきり無言のまま歩み続けた。

そして二人はそのゆっくりと湖を後に――

ザツバ~~~~~ンツ!!

「……?」

ふと背後から大きな水しぶきの大音が轟いた。

大音に促され振り返る二人……そして――

「ガルルルルルル~~~~っ!!」

その視線の先には、咆哮を上げながら、駆け足でこちらに突進してくるアイスリザードの姿があった。

その腹部には、青く光る球体が淡い輝きを放ちながら、奴の身体に吸い付くように垂れ下っているのが見えた。

「ちっ、追いかけてきたのか。てっきり湖から出られない性質でもあると思ったのだが……」

音素気象密度の低いこの場所に出現したのも頷ける。あの鏡の盾もその力を借りて生み出したと考えれば納得のいかないこともない」

リグレットは球体を一目見ただけで、それが音素結晶体であること、音素の種類、そして濃度まで見抜いていた。

しかし、そんな目視鑑定をゆっくり行っている間にも、自分達とアイスリザードの距離はグングン縮まってきている。あまり悠長にしている時間もなかった。

「タネが分かった所でやはり私達に戦う理由などない。ミュウ、このまま逃走するぞ！」

「ちょっと待つですの〜！ 理由ならあるですの！ 戦うですの〜！」

リグレットが走り去ろうとした時、彼女の意見に反する主張で彼女の足を止めさせるミュウ。

彼がここまで主張を強いることはかなり珍しい。

「なんだ？ その理由とは？」

納得のいかない様子のリグレット。彼女にしてみたらミュウがここまで主張する理由が分からない。

「あの青くて丸いのはリングに新しい力をくれるですの〜。今まで何度も丸いのを発見したんですけど、その度にリングに新たな力をくれたですの〜」

そう——今までの冒険の中で何度も見かけた結晶体、その度にリングに新たな譜を刻み、能力を与えてきていた。それがソーサリーリングの特徴であり、美点である。

ミュウファイアを生み出した第五音素の結晶体。

ミュウアタックを生み出した第二音素の結晶体。

ミュウウイングを生み出した第三音素の結晶体。

そして目の前に見える第四音素の結晶体も必ずやリングに新たな能力を与えてくれることだろう。

幸いにもこの世界に来た時、リングのパワーアップ化と共に、新たに三つの譜を刻める空洞が出来ていた。

つまり、あと三つほど結晶体を追加することができるという可能性が高い。

「……分かった」

リグレットがため息と共に肯定の言葉を漏らす。その言葉にミュウの表情にも笑顔が浮かんだ。

しかし、彼女の次の言葉がミュウの表情を一気凍らせることになる。

「だが、私は戦わない。新たな力を手にしたいのであれば、お前一人で戦い勝ち取ることだな」

第14話 蒼い結晶体（後書き）

見てくれてありがとうございます！

偉く中途半端な時間に更新してしまいましたが、年末年始はそんな日が増えそうです。

休みになっても特にやることないしw

第15話 弱点発覚（前書き）

アイスリザード戦で全体の約1/5が終了です。
このペースなら70話ちよつとで終われるかな？
あくまでも目安ですが……

第15話 弱点発覚

「みゅうっ!? ミュウ一人で戦えていうのです!? 酷いですの、いじめですの、動物保護法違反ですの!」

思いもよらぬリグレットの言葉に、ぶうぶうと不平を申したてるミュウ。

「私は元々戦う気はないと言っただろう。無駄な戦いは好まない。待っていてやるから自分で何とかしてきなさい」

「みゅうっっ」

不平を申した所でリグレットから返ってくる言葉は変わらない。

今ミュウに与えられた選択肢は二つ――

新しい力を求めて戦うか……

新しい力を諦めて逃げるか……

「ちなみに、私は戦う気はないと言ったが、逃げる気も失せた……というわけでさっさと逝ってこい」

「みゅみゅみゅっ!?!」

――訂正。もはやミュウに与えられた選択肢は一つしかなかった。

「(みゅうっ)。やるしかないですの」

自分が言い出したこととはいえ、早くも後悔気味な感慨に浸るミュウであつた。

ミュウ達がそんなやり取りを交わしている間に、自分とアイスリザードとの距離はぐんぐん縮まってきている。

毛を逆立てながら迫ってくる奴の背景には、鬼気迫るオーラが滲み浮かんでいる。

よほどリグレットの『雑魚』発言に怒つたのだろう。

そして、そのとばっちりを受けるのはミュウであり、事の根源であるはずのリグレットは隅の方で壁に背を預けて傍観するのみであったりする。

アイスリザードは速度を落とさぬまま猛突進し、距離がゼロになると同時にミュウに鋭い爪を差し向けた。

ミュウとアイスリザードのスピードはほぼ互角、しかし回避能力になるとミュウに分がある。

なぜなら――

「うい~~~~~んぐ！」

高らかな叫びと共に、ミュウは大きくウイングを広げ、瞬時に遙か上空へと飛び移る。

そう——ウイングを広げたミュウのスピードはあの怪鳥プレスベ
ルグよりも上、そして空を飛べないアイスリザードは接近戦に持ち
込むことができなくなるのだ。

しかし、それで戦闘を有利に運べるわけではなかった。

「カアアアッ！」

アイスリザードの氷のプレスが、ミュウのいる上空を目掛けて真
っ直ぐに放たれる。

先程リグレットは余裕で避けていたが、ミュウには羽を大きく動
かして、自らが軌道外へ逃げるのが精一杯だった。

炎を吐けば相手のプレスを相殺できる——そんな考えが一瞬ミュ
ウの頭に過ぎったが……彼はそれをしない。

あの圧倒的な威力の炎である、プレスを相殺どころか押し勝って
しまう。そうなたらあの鏡の盾で跳ね返るのがオチだ。

それに——ミュウはそれが出来ない理由がもう一つある。

それこそがミュウにとって意外な……そして決定的な弱点でもあ
った。

「（逃げ回ってばかりでは勝てないですの。何とか攻撃を……でも——）」

——でも譜術系の攻撃は奴の眼前で跳ね返されてしまう。よってファイアは使えない。

つまり、ミュウの持っている能力で奴に有効そうな攻撃手段は一つしかない。

ミュウは攻撃を繰り出す為にウイングを納め、いったん地面に足を着ける。

同時にリングを土色に変色させ——

「カアアアアアッ!!」

しかしリングに力を注いでいる最中に僅かながら隙が生じた。

それを好機に見たアイスリザードは氷ブレスを発射させる。

「みゅみゅっ!?!」

対応に遅れたミュウは、奴のプレス攻撃に避けきれないと判断し、慌ててリングの色を土色から赤色へと変えた。

「ふ、ふあ
いあ〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
つ！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ミュウの口から大火炎の赤光が放たれる。

慌てて繰り出した炎であったが、その威力はいつも通りズバ抜けていた。

圧倒的なミュウファイアの赤光と、普通の氷ブレスの青光が正面からぶつかる。

結果は、溶鉱炉に力キ氷を放り込むようなものだった。

ピカッ！！

「……っ！
ういゝゝんぐ！！」

氷ブレスの飲み込んだミュウファイアが、奴の眼前に生み出された鏡の盾に当たった瞬間、ミュウは反射的にウイングを広げ大空へ退避した。

そしてミュウの予想通り、赤光は方向を変え、綺麗に反射される。

早急な判断で大空へ退避していなければ、今ごろミュウの身体は墨になっていたことだろう。

ミュウは空を大きく徘徊すると、再び地面に足を着き、今度は突進しながらソーサリーリングの色を土色に変色させる。

だが――

「カアアアアアアアアアツ!!」

アイスリザードの咆哮と共に再び迫る氷プレス攻撃。

「みゅみゅっ!?!」

ミュウは仰け反りながら急ブレーキを施し、再びウイングを広げ大空へ逃げる。

「(……なるほどな)」

その戦いを傍観していたリグレットはここまでの戦闘経過を見て、彼女なりにミュウの弱点を見出していた。

第15話 弱点発覚（後書き）

見てくれてありがとうございます！

前書きで70話ちよっとで終わるかもって言いましたが、100話
超えもあり得る気がしてきました（汗

どっちにしろ長くなることは決定ですので、どうか離れずに着いて
きてくれるとうれしいです。

第16話 逃げない勇気 VS アイスリザード（前書き）

今回はちょっと長めかな。

区切り方が下手で長くなったり短くなったりして申し訳ないです。

第16話 逃げない勇氣 VS アイスリザード

「（ソーサリーリングは一度に二つの能力を同時に発動させることは出来ないみたいだな。それにあの臆病な性格が災いして戦いの視野を狭めてしまっている）」

前者は仕方ないこととはいえ、後者の弱点は深刻だった。

戦いの視野を狭めるということは、無限に在るはずの戦術を有数に限らせてしまうことを意味していた。

ミュウファイアは単なる遠距離攻撃として……

ミュウアタックは単なる近距離攻撃として……

そしてミュウウイングに関しては単なる攻撃回避だけにしか用いていない。

相手が低能魔物ならともかく、ある程度知能を持った敵が相手となるとワンパターンの戦法は命取りになる。

まあ、それでも超一流以上の力を持っていないと今のミュウの相手は勤まらないだろうが……。

それに増してあの臆病な性格もいけなかった。

敵のプレスなど大した威力もスピードも無いのだから、先ほどのリグレットみたいに左右前後のステップを用いて交わせれば良いものの、ミュウは敵の攻撃に過敏に反応してしまい、つい安全圏の上空

へと逃げてしまう。

このままでは永遠に勝負が付かないと感じたリグレットは、ここで一つ上空に居るミュウにアドバイスを送る。

「ミュウ！ ウィングを逃げにばかり使うな！ リングの力を信じ、そしてもっと頭を使ってみろ」

「みゅっ！？ 頭を使う………ですか？ ……むむう）………」

「（しまった。言葉を間違えたか……？）」

『頭を使い』——それはミュウには一番求めては行けないこと。

後悔するリグレットを余所に、すでに投げられた言葉はしっかりとミュウの脳に届いてしまっていた。

「ウィング……逃げない………リングを信じる………頭を使う………みゅみゅっ……！」

ミュウなりに必死に思考を重ねた結果、一応彼なりな答えを導き出せたみたいである。

そしてその答えを元に、彼は一つの策を練り上げる。

ミュウが考え出した作戦——それを実行しようと目を輝かせている彼を見て、不安になるのはどうということだろうか？

そんなリグレットの不安と心配を余所に、上空に居るミュウは作戦を実行する為、アイスリザードの真上の位置へと移動するのであ

った。

上空で目標を定めたミュウは、意志を固めるため黙想をする。

「（逃げない……逃げない……逃げない……）」

リグレットの助言その一、『ウイングを逃げに使わない』。

今までに逃げにしか使っていなかったミュウウイング――

――そう、『逃げ』に関しては使いこなせたのだ。

つまりそれは能力を使いこなせるという裏付けとも取れる。

むしろ余計な杞憂を取り除き、自信に繋がっていてもおかしくない。

「カアアアアアアアツ！！」

だが黙想中あまりにも隙だらけだった。それを好機と言わんばかりにアイスリザードが氷ブレスを発射させる。

目標に向かって真っ直ぐ進む氷ブレス、威力はないが命中に関しては正確だった。

だが、ここで黙想を終えたミュウの目が——開いた。

その眼光は鋭く——以前の臆病さが感じられない、『戦う者』の眼をしていた。

「みゅううううううううううううつ！……！」

気合一閃、ミュウの咆哮が大空に木霊する。

そして、ミュウは目標——アイスリザードだけを見据えて真っ直ぐ急降下した。

しかし、前方には先程放たれた氷ブレスがミュウの眼前に立ちはだかる。

「（リングの力を信じる……リングの力を信じる……リングの力を信じる）」

リグレットの助言その二、『リングの力を信じる』。

リングの力を疑っていたわけではなかった。ただミュウには実感がなかったただけなのだ。

圧倒的な力を手に入れたという実感が……

だからミュウは信じてみることにした——いや、信じて大丈夫だと確信していた。

——なぜなら、自分はソーサラーリングの主なのだから……

「みゅうううううううううううう！！」

氷ブレスを目前としたミュウは、眼前に迫りつつあるブレスをな

このミュウの自殺行為を見て、アイスリザードは勝利を確信したかもしれない。

「...っ!？」

だが次の瞬間にアイスリザードが目にしたのは、鬼気迫る表情をしたまま平然と突っ込んでくるミュウの姿だった。

ミュウイングは本来第三音素——つまり『風』の力を借りて發揮される能力である。

つまり、フルスピードで飛んでいるミュウの正面には大気の風が膜を作られていた。それはまるで風の渦巻が変異して、ミュウ庇う『盾』を作っているようにも見えた。

そしてこの風の盾は雑魚魔物の氷ブレスなどでは敗れはしない。

以前アザゼルのフレイムバーストを受けても、耳を多少焦がす程度に済んだ理由もその辺にあったのだ。

敵の攻撃を退けたミュウの眼には、もはや自分の倒すべき相手の姿しか見えていなかった。

「（頭を使う……頭を使う……頭を使う……）」

リグレットの助言その三、『頭を使え』。

これは言わずともなく、『もっと考えて戦いに臨め』という意味だが、プチトマト脳のミュウ（酷）はとんでもない思い違いをしてしまう。

「みゅううううっ！！」

氷ブレスを跳ね除けたミュウは決意の咆哮を上げながら、フルスピードで真っ直ぐ目標に向かって突進する。

ミュウはスピードを緩めるつもりなかった。このまま突進する決意を秘めているのは彼の鋭い目を見れば一目瞭然だ。

アイスリザードもそれを察してか、鏡の盾を生み出し重ねる。それも何重に……短い時間の中で量産できるだけの数を……

そして――

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンっ！！

ミュウとアイスリザードの位置がゼロになると、耳鳴りがするく

らの轟音が辺りに鳴り響いた。

スピードを味方につけ、凄まじい威力を生み出した風の盾。物理攻撃に対しても素晴らしい強度を持つ鏡の盾。

この二つの盾同士が衝突し、二匹の姿を隠すほどの砂煙が昇る。

だが立ち上る砂煙の先には、無常にも無傷のままで地の上に立つアイスリザードの姿があった。

たった一枚でも、リグレットの銃弾一発の威力を相殺するくらいの強度を誇る鏡の盾、それを何重に重ねられたのだ。いくら渾身の突撃と言えど、それをやぶることなど不可能――

――そう思われていた矢先だった……

ピシっ……ピシピシ……ピシピシピシピシっ……

「……っ！――」

鏡の盾の外郭から徐々にヒビが内側の鏡へと侵食してゆく。

そして――

ガシャ~~~~~~~~ン！！

完全傷物と貸したガラスの盾は、ただのガラス片となって地に散らばった。

アイスリザードは地に散らばるガラスの破片を見て、驚愕と恐怖で身体を硬直させる。

しかし、その瞬間にもミュウは次の行動を起こしていた。

「アタ~~~~~クっ!!」

「…っ！？」

アイスリザードが慌てて振り返ると、そこにはリングを同色に身体全体を土色に染めているミュウの姿が在った。

慌てて鏡の盾を再度量産しようとするが――遅かった。

ドガッシャ~~~~~ンっ

先程よりも大音量の轟音が辺りに響いた。

見事にクレーターと化した地面、立ち上る砂煙、そしてその奥に立っているのは——ミユウ。

ミュウはリグレットの助言通り、『頭を使った』突進で敵の盾を打ち砕き、『頭を使った』アタックで見事アイスリザードの息の根を止めた。

そう——ミュウに取って『頭を使う』⇨『頭突き』と方程式が組み上がってしまったみたいなのだ。

「（意味が違うのだが……）」

戦いを終止見届けていたリグレットは苦笑を漏らしながらも、ミュウの戦いっぷりに感嘆していた。

ミュウに取って初めての戦いは、ハイレベルの名勝負を経て、まさに意味のある勝利で締めくくることが出来たのだった。

「や、やったです……の……」

ミュウは勝利を確認すると、そのまま目を回しながらフラフラと背中から倒れる。

存分に『頭を使って』しまった為、脳が振動されてしまい、視界がグルグルして定まらないのだ。

だが地面に倒れこむ前に、いつの間にか傍へと歩み寄っていたリグレットがミュウの身体を支えた。

「荒業ばかり使うからこうなるんだ。もっと頭を使えと言ったのに……」

「……みゆうう？ もっとミュウアタックを多用すれば良かったですの〜？」

「……いや、そういうことではなく……まあ、いいわ……」

深いため息と共に、彼女はアイスリザードの残骸の方へと視線を移す。

そこにはペチャンコになった奴の側に、アレだけの衝撃を受けても無傷のままの第四音素結晶体があった。

青々と輝きを放つ音素結晶体、リグレットはそれを素手で拾い上げると、ミュウの両手にそれを持たせてあげた。

「勝利の結晶だ。今のお前ならこれを受け取る資格がある」

「……みゆう……ありがとう……ですの……リグレットさん……」

力のない返事、だがミュウの表情には満面の笑みが浮かんでいた。今、彼の胸の中は達成感でいっぱいになっていることだろう。

ミュウが青色の第四音素結晶体を受け取ると、ソーサリーリングが新たな力を求めるかのように結晶体はミュウの手から離れ、静かにリングの中へと吸引されて行った。

そして、ソーサリーリングに新たな譜が刻まれる。

ミュウは自身の力で、新たな能力を勝ち取ったのだ。

「……みゆうう、やった……ですの……さっそくどんな能力か……」

新能力がどんなものなのか、さっそく使って試そうとするミュウだったが、やはり視界が定まらず、まともに地面に立つことすら出来なかった。

「軽い脳震盪だ、少し休めば治るわ。それまでリングの力は使わない方がいい」

「みゆうう……」

心から残念そうな表情を浮かべるミュウ。

しかしリグレットの言うとおり、軽い脳震盪を起こしているミュウには安静が必要だった。

「今は身体を治すことだけを考えろ。モーヴまでは私が運んでやるから、お前はグミでも噛みながら寝てなさい」

そう言いながらミュウを抱っこし、楽な体制を作ってくれるリグレット。いわゆる『お姫様抱っこ』に近い体制だ。傍から見るとかなり妙な光景である。

「みゆうう……ありがとうございますの……やっぱりリグレットさんは優しいですの」

「そ……そのネタはもういい！ ほらっ、いくぞ！」

顔を真っ赤に染めながら歩み始めるリグレット。

ミュウは勝利の余韻に浸りながら、リグレットの腕の中に、安らかな表情を浮かべながら眠りについたのであった。

第16話 逃げない勇氣 VS アイスリザード（後書き）

「スキット」 【どっちが本音？】

ミュウ「そういえば、リグレットさん……」

リグレット「起きたのか……なんだ？」

ミュウ「リグレットさんって、回復譜術を使ったような気がするですの〜」

リグレット「ああ、戦闘ランクをハード以上で私に挑むと、レイズデッドを使える」

ミュウ「（ハード以上！？）……じゃあ、何でミュウに使ってくれないですの〜？」

リグレット「お前は別に命に関わる怪我をしたわけではないだろう。あの程度ならグミと睡眠で十分だ……それにあの術は疲れるし……」

ミュウ「みゅみゅっ！？ 何だか後半の方に感情が入っている感じがしたですの〜……」

リグレット「……………無駄話はその辺にして、さっさとモーヴへ向かうわよ」

ミュウ「（話が流されたですの…………）」

第17話 モーヴでの再会（前書き）

ここからが第二章といったところです。

サイトの機能を使えば章分けできるみたいですが、またしてもやり方がよくわからないため普通に投稿しました。

第17話 モーヴでの再会

グラン・ソウル最西端に立国された、反立憲立志建国本部『モーヴ』。

オールドラントの神殿都市ダートを彷彿させるようなドーム型の建物が特徴的で、何よりもこの国独自の特徴的な点が二つある。

一つは、ヴァーゲストの石造が立っていないこと。それはこの世界では違法行為であることを示している。

しかし、この国はあえてその違法行為の措置を施していた。だからこの国は『反』立憲国なのだ。

そしてもう一つ、この国に——いや、ここが本当に国であるのかすら疑わしい特徴があった。

それは——

「り、リグレットさん……あれは……な、なんですの？」

『それ』を目にした時、あのミュウですら額に薄ら汗を浮かべるほど強烈なインパクトを受けた。

リグレットは鎮痛の表情を浮かべ、あえて『それ』を視界に入れないようにしながら言葉を返した。

「この国の最高権力者——つまり女王の趣味だ。詳しくは私も知らない……知りたくもない」

ミュウが呆気を取られている視線の先、そこには全体がピンク色に配色された巨塔が聳え立っていた。

それだけでも異様な雰囲気がぶんぶん漂うのだが、極め付けに巨大なハート型のオブジェに『よ・う・こ・そ』とメルヘンチックに象られた文字のネオンが光っており、その下には恐らくこの国の女王であろう人物の等身大オブジェボードがウイנקをしながら、『女王シルヴィアちゃんがキミを待っている』とこれまたネオンの噴出しを使った訳のわからない広告塔が立っていた。

この少女趣味全開の雰囲気にはさすがにミュウも引き気味である。

初めて来た人は絶対にここを国とは思わないだろう。カジノが怪しい店のどちらかと勘違いする人はきっと少なくない。

「さあ、入るぞ」

「ここに入るのです!？」

身体全体に拒否反応が迸るようなピンクの城。そこに入るということはかなりの度胸と勇気が必要だ。

「大丈夫、中は外見に比べるとまともなものだ。外見に比べると……だが……」

激しく不安を与えるようなリグレットの言葉。その言葉の真意は、恐らくミュウの思っていることと一致するだろう。

「目がチカチカしそうですの」

愚痴をこぼしながらもミュウはしぶしぶと城の中へと歩みを進めた。

そして二人が城の中へ第一歩を踏み入れた、その時――

「おおつ、リグレットか！ 随分と遅かったではないか」

「あれ？ 後ろにいるのは……ミュウではありませんか！？」

突然、正面から掛けられた二つの声。

しかもその内の一つは、リグレットも想定外な人物のものだった。

「ラルゴか。いろいろあつて遅くなった。それより、そのそちらのお方は――」

「みゅみゅう！？ もしかして……イオンさんですよ！？」

二人を出迎えてくれた声の正体は、リグレットと同じ六神将の一人だった黒獅子ラルゴと、かつてミュウ達と旅業を共にしていた導師イオンの姿がそこに在った。

ローレライ教団の教団兵『オラクル神託の盾騎士団』の幹部『六神将』の一人。通称『黒獅子ラルゴ』。

ニメートルを越す巨漢で大型の鎌を振るい、六神将の中でも屈指のパワーの持ち主。

昔は傭兵業を営んでいた彼、本名をバダックと言うのだが、とある理由を元に傭兵を脱退。その後黒獅子ラルゴと名を変え、ローレイ教団兵へ入隊した。

……決してキャラが薄いとか、人氣が微小だとか、技が少なすぎだとか、物語の後半は使者や立会人といったパシリみたいなことばかりしていたとか、バダックと言う名のままだったら絶対一般兵で一生を終えそうな貧相な名前だとか、思っけていても言っけてはいけない。

モーヴでラルゴと合流することはリグレットから訊いていた。

しかし、もう一人の人物の登場は想定外であった。

「なんでミュウがこの世界に居るのですか？ ……ハッ、まさかルクに散々いじめられたのが原因で、ついに自害を！」

心中の仰天人物は、その発言も仰天的だった。

「（ついに……って、いつかは自害すると思っていたのか？ この人は……）」

イオンの天然ボケに心中でツツコミが調和するリグレットとラルゴ。

かつて共に旅をした仲間の中に、ローレイ教団の『導師』――

つまり最高指揮者であり、教団の最高重要人とも言える人物が居た。

それがこの大ボケをかました少年——名をイオンと言う。

布石から未来を読み取る——『預言』を読むことが出来ることで、オールドラントでは世界の象徴的に奉られていた。

だが、彼もミュウの主人ルークと同じくレプリカと呼ばれる存在であった。

イオンレプリカは数人存在していたと言われるが、彼はイオンレプリカの中でも『必要とされるレプリカ』として重宝されていた存在なのだ。

普段は大人しくまったりとした性格の持ち主だが、不意にこちらが予想もしていなかった大ボケをかますことがある。今みたいに……

童顔で可愛い顔立ちから、彼を女性と勘違いする人も少なくないだろう。少なくとも作者はそうだった。

「みゅううっ！ ご主人様はミュウをいじめたりしないですよ！ せいぜいミュウの耳を掴んで振り回したり、寝ている間に口いっぱい砂利を詰め込まれたりされる程度で、いじめられたことは一度もないですよー！」

「（それはいじめられていると言わないのか！？）」

元祖ボケ奇才のミュウ。さすが元祖だけあってイオンのボケに自らもボケで返すという高等技術を使ってきた。

リグレットとラルゴは、二人のボケっぷりには終止心中でツッコまずにはいらなかった。

なぜイオンがここにいるのか、そもそもミウをモーヴに連れてきてどうするつもりだったのか、ラルゴの人気の無さはどうにかならないのか……気になることはたくさんあるのだが、とりあえず女王へ報告するのが先だということで四人は謁見の間へ通された。

広々とした空間、日当たり位置を計算された四角い窓、高級感溢れる王座――

――まともな所を上げると、そんな所しか思い浮かばないような謁見の会場だった。

部屋全体を埋めるカラフルなオブジェの数々――ピンクの絨毯、金のカーテン、七色に光る電灯……

これだけで常識極まりない目触りな部屋模様だが、それ以上に常識が欠落していると思える箇所はごまんとある。

なぜか王座の隣に山積みされてある女性雑誌の山……

なぜか謁室の隅に置いてある、プリ。ト倶楽部と同等な物と思われる音機関の存在……

なぜか謁室の壁に貼られているイケメンポスターの数々……

一言で言つと、完全私物化されていた謁見の間がミュウ達の前に広がっていた。

リグレットは先ほど、城の中は外見と比べると派手さは薄れていると言った。だがこの有り様は……

「みゅううつ、リグレットさん、うそつきですよ。絶対に外見より中の方が凄いですの」

この場にいるだけで眩暈を起こしかねないカラフルな物々、はつきり言つて目障りなことこの上無い惨状だった。ミュウなんか本気で目を回し始めている。

「……いや、私が前に訪ねた時はまだまともなはずだったのだが……おいっ！ シルヴィア！ なんだ、この有り様は！？ というか、謁見の間で寝転がりながら雑誌を読むな！」

「あれ？ リグレット？ 帰つてたんだ。おかえりなさい」

謁見の間の隅に寝転んでいた女性がゆっくりと立ち上がり、リグレット達に笑みを向ける。

清楚な顔立ちの青い長髪の美人——いや、『可愛い』と言つたほうが適切かもしれない。

女王というわりには容姿が若い。幼さすらも少し漂う。もしかしたらリグレットよりも年下なのかもしれない。

髪の色と同色のドレスが良く似合っている。城の外郭に建っていたピンクのオブジェに描かれていたのと同じ人だ。

「おかえりなさい……ではないだろう！ また謁見の間を私物化して……使用人達もなぜアイツの暴走を止めない!?」

「「無理です。私達が何を言ったところで女王様の暴走は止まりません」」

見事に口を揃えて言葉を連ねる使用人の方々。

諦めに満ちた表情までシンクロしている辺りが虚しさを大いに募らせている。

「みゆううつ？ ……この人が女王さ——」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！

シルヴィアと呼ばれた女性がミュウの姿を視界に入れると、なぜか目を輝かせながら猛突進で迫ってきた。

「きいいやああああああああああつ！ か、きやわゆ〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜いっ！〜！」

シルヴィアは妙な奇声を上げながら、ヘッドスライディングでミュウの身体をガッチリキャッチする。

そして、ぎゅううつと締め付けるようにその身体を抱きしめた。

「みゆううつ!? ……むぐっ！」

ミュウにしてみれば、もう何が何だかわからない状態。

女王が急に突進してきたと思うと、次の瞬間には彼女の胸の中埋もれているのだ。

驚くよりも先に、戸惑いが先行している現状だ。

咄然とする三人を余所に、女王シルヴィアは所構わず本能のままに自分の頬をミュウの頬に摺り寄せる。

「可愛い可愛いかゝゝわゝゝいゝゝいゝゝっ！　ねねねっ、この子どうしたの？　お土産？　あたしへのお土産だよね？　お土産だったらありがたく受け取るよ♪」

「……はぁ」「」

リグレット、ラルゴ、イオンの三人は、実に予想通りだったシルヴィアの暴走っぷりに、ただ頭を抑えながら、ため息を吐いて呆れ果てるのであった。

第17話 モーヴでの再会（後書き）

見てくれてありがとうございます！

『シルヴィア』もこの小説のみのオリジナルキャラクターでございます。

しかし、この名前を見て、「んん？」と思った方はかなりの玄人TOAプレイヤー！。

第18話 導師守護役（前書き）

そろそろ前書き、後書きで書くことが無くなってきたかも（汗
小説本文だけを投稿する回もあるかもしれません。

第18話 導師守護役

「まず……そうだな……私が樹海の中でミュウと出会った時のことから報告するわ」

とりあえず謁見らしさを齎すため、シルヴィアは王座に、リグレット達三人はその対極に立つことにより落ち着くことができた。

シルヴィアが『王座は材質が固いから嫌』という理由で散々駄々をこねたが、彼女に『ある物』を渡したら、一転して素直に聞き入れてくれた。

「うんうん」

「……みゆううううう」

『ある物』——いや『ある者』。ミュウがシルヴィアの膝元でいじり倒されているが、リグレットは気にせず報告を続けた。

「ヴァーゲストの側近と見受けられた、黒い装備のデーモン族の男を見掛けたので、私は奴の後を追い、動向を探ろうとした」

「うんうんうん」

「みゆう。シルヴィアさん、そろそろ離して欲しいですよ」

「だゝめ」 まだまだ離さないんだからあ……あつ、リグレット続けて続けて」

明らかに続けにくい雰囲気である。

……というよりシルヴィアは本当にリグレットの報告に耳を傾けているのかすら不安を憶える。

「ごほんっ！ ……すると奴はミュウの腹に付いているリングを狙っていたようなので、私は奴にリングが渡るのを拒める為、ミュウごと連れ去って逃走したのだ」

「な～るほどお～」

「シ、シルヴィアさん……あんまり首筋は障らないでほしいですの」

「あははっ、ミュウちゃんってば首弱いんだあ、うりうり……あっ、気にせず続けて続けて～」

……どう対応すれば気にせずに居られるのか、ぜひとも彼女に問いたいところである。

しかし、終止いじり倒されているミュウの待遇に比べると、そんな疑問などとても些細な事だと思えてしまった。

「ミュウと共に樹海を抜け出した後、我々はフリーダムという都市に立ち寄り、酒場に居た情報屋からヴァーゲストの動向について探った。そこで一つ気になる情報が手に入った」

「気になる……といえば、ミュウちゃん。首輪とかしてないよね、もしかして野良かな？」

「みゅうっ！ ミュウをペット扱いしないでくださいですの～！

それにミュウにはちゃんとご主人様が居るですの〜！」

「なあ〜んだ、ざんね〜ん。ご主人様が居るんじゃ仕方ないけど…
…もし気が変わったらあたしが飼って上げるからね。……あつ、
気にしないで続けて続けて〜」

「「これが気にせずに居られるかああああああああああつ！
！」」

シルヴィアの煮えくり返る態度に、リグレットとラルゴは今まで溜め込んでいた分も一緒に発散するかのように、魂のこもったツツコミが謁見の室間に大きく響いたのだった。

「ま、まあまあ……二人とも落ち着いて……シルヴィアも真面目に聞いてあげてください」

結局イオンが抑制の言葉を掛けて、やや興奮気味だったリグレットとラルゴを落ち着かせた。

一時騒然としていた室内も再び静寂が取り戻す。

「むう、イオン君、まるであたしが話を聞いていなかったかのよう
な言い方をするんだね」

軽くイオンを睨みながら大きく頬を膨らますシルヴィア。

この反応にイオンは焦りの表情を浮かべながら、両手を前に突き出し、首を左右に振りながら否定の意を促す。

「えっ！？ い、いえ、僕はそんな……」

「（実際聞いていたかどうか怪しいものだがな）」

さすが六神将の中でツツコミを担当していた二人（作者の勝手な偏見が入っています）。心中のツツコミも見事に同調している。

「つまり、リグレットは樹海でリングを狙われていたミュウちゃんを助けて、そのまま森を脱出した。そしてフリーダム酒場で気になる情報を手に入れた……ほら、ちゃんと聞いていたでしょ？」

「（……って、本当に聞いていたのか！）」

聞いていたらいたで今度は妙な腹立たしさが混み上げてくる。

しかし、相手に非が無いとなると何の反論も出来ずにいたツツコミ担当の二人だった。

「そ、それでリグレット？ 気になる情報というのは？」

場を静めるのはイオンの役目なのか、再び騒然としそんな雰囲気だったのを、話を戻すことによって事前に抑えることができた。

どこか釈然としないところがあったが、リグレットは再び冷静さを取り戻し、報告を再開した。

「あ、ああ。昨日のことらしいが、私達の知人がルームにて、リングについて探っていたらしいことが分かった」

「知人……だと？ 俺も知っている者か？」

今までツツコミにしか言葉を使っていなかったラルゴが、ここで初めて険しい顔を施しリグレットに質問を掛けた。

リグレットはちらりとラルゴに視線を預けると、小さく頷いて答えた。

「その者は、ヌイグルミを抱いた十歳くらいの子供で、ライガとフレスベルグを引き連れ、桃色の長髪に黒い導師服を着ていたそうだ」

「……っ！？」

その言葉を受け、イオン、ラルゴ、そしてミュウまでもが驚愕で顔を引きつらせた。

「なになに？ どうしたの？ みんな」

『彼女』のことを知らないシルヴィアは皆の反応を見て、一人だけ頭にクエションマークを浮かべていた。

シルヴィアの疑問を代弁するかのように、リグレットはここまでの経緯から考え、ほぼ確実と取れる推測を皆の前で言い放った。

「つまり——現在アリエッタがヴァーゲスト側に協力している可能性が高い」

ローレライ教団兵『オラクル神託の盾騎士団』の幹部『六神将』の一人、
通称『妖獣のアリエッタ』。

凶暴な魔物を使役する能力があることから付けられた二つ名だが、
彼女自身も非常に優れた譜術者であり、魔物との連携にも長けてい
る。六神将の中で敵対すると最も厄介な相手に成り得るのが彼女か
もしれない。

フォンマスターガーディアン
かつて導師守護役に所属していた彼女、導師イオンに恋心を抱い
ていたアリエッタにとって、この頃はどれだけ幸せだったことだろ
うか。

しかし、そんな平穏な日々も長くは続かなかった。

これは一部の人間しか知らなかったことだが……ある日オリジナ
ルイオンが亡くなってしまったのだ。

オリジナルイオンが死去し、現在ミュウ達の前に居るレプリカイ
オンが機密ながらに導師の役職に付き、そして事情を知られるわけ
には行かないために、彼女に解雇処分を下した。

——彼女に事情を話しても良かったかもしれないが、イオンがレ
プリカだと知り、一番悲しむのは彼女だろうという考えから、何も
伝えず解雇という苦渋の決断を下したのだ。

彼女にとって納得の行かない部分は多々あったが命令には逆らえない。

アリエッタは導師守護役を解任された後、ローレライ教団兵の神託の盾に入団し、幹部六神将という立場にまで昇りつめた。

しかしアリエッタは、自分の代わりに導師イオンを世話するようになった彼女の同僚とも呼べる存在、『アニス』という少女には常に憎悪を抱いていた。

なぜ、導師は自分ではなくアニスを選んだのか……どうして自分は選ばれなかったのか……

そんなずっと懸念を抱いていたアリエッタだったが、ある日、『決定的な事件』が起きてしまう。

それがキツカケで二人は決闘に望むことになってしまう。

結果は——アニスの勝利……同時にアリエッタの人生はそこで幕を閉じることになった。

——自分が恋した導師イオンがレプリカだと事実も知らずに……

「みゆうう？ ヴァーゲストさんって、あの怖い顔の石造の人なの？」

「ああ、前にも言ったがこの世界の革命者であり支配者……そして、我々の倒すべき敵だ！」

ヴァーゲストの話題になると、なぜか途端に言葉に力が入るリグレット。

「みゆみゆっ！？ ということはアリエッタさん、敵ですよ！？」

「……そうなる可能性が高いというだけだ。確証があるわけではない……って、お前、酒場での会話を訊いていなかったのか？」

「酒場……ですよ？ ああ、とっても美味しかったですのっ」

「………よかったわね」

リグレットが情報収集をしていた間、ミュウは何をしていたのか一発で理解できる一言だった。

「「……………」」

そんなほのぼののムードを出している二人を余所に、イオンは険しい顔を崩さぬままずっと下を見つめ俯いていた。そんなイオンの様子をラルゴは無言で眺めている。

「イオン君、どうしたの？ あっ、足元のピンク色の絨毯を気に入ってくれたのかな？ えへへ、それね、あたしがデザインした絨毯なのっ えへへへへ」

一人、勘違い特急列車に乗ってしまったシルヴィアは放っておくとして、イオンのただならぬ雰囲気気付いたミュウとリグレットは心配そうに彼に視線を注いだ。

そして、イオンが静かにその重い口を開いた。

「もしかしたらアリエッタの敵対行動の原因は……僕にあるのかも
しれません」

第18話 導師守護役（後書き）

見てくれてありがとうございます！

いつもより投稿時間が遅くなってしまった（汗

たまに加筆修正に時間がかかってしまうことがあります。

第19話 【回想】イオンとアリエッタ ? (前書き)

今回は過去最高に長いかもしれませんが。

そしてここからしばらくイオンの回想話——もといラブコメが始まります。

第19話 【回想】イオンとアリエッタ？

「話すのか？ 導師よ……」

ラルゴは視線と一緒に言葉を向ける。イオンはそれに首を縦に振って答えた。

「アリエッタが敵対している以上、リグレットにはこのことを聞いてもらうべきだと思います」

そう言い放つ彼の表情は真剣そのもの、まるでこれから語られる話の重さを示しているようだった。

「みゆうう……どうせミュウは聞いてもらうべき存在ではないですの……」

「あたし……一応、この国の女王なんだけどな……」

名前が出てこなかった二人は、不満を全面に出しながらいじけ始める。

「あつ、いえ、その……もちろんミュウとシルヴィアにも聞いて――」

「この二人は無視していいから、さっさと話を始めてくれ」

「えっ！？ あつ……は、はいっ！」

ミュウとシルヴィアのポケボケ発言のせいで、せつかくのシリア

スな雰囲気を一気に崩されかけたが、リグレットとラルゴのナイスなツツコミによって早々に収拾がついた。

そしてイオンの口から、彼がこの世界に来てからの経緯が重々しく語られる。

「僕がこの世界に飛ばされてきた場所……そこは見渡す限り大草原で囲まれた、何も無い平野の真ん中でした」

『グラン・ソウル大陸部中枢平野』

——あれ？ どうして僕は意識があるんだろう……

——僕はあの時……ザレツホ火山で死んだはずなのに……

——どうして僕は……起き上がることが出来るのだろう……

「僕は……生きて——いる？ どうして……」

意識が覚醒し上体を起こすことが出来たイオンは、ここがどこなのか……なぜ自分は倒れていたのかなどを考えるよりも先に、なぜ自分が生きているのかが不思議でたまらなかった。

無意識に心音を確認したり、足はちゃんと付いているかを確認する辺りが、彼の複雑な心理を表しているようだ。

「心臓は動いている……足も付いている……僕が吸い込んだ瘴気は……感じられない……」

つまり、今ここにいる自分は異常なまでに健康体であることを示している。でも、その現状はあまりにも不自然だった。

死に方がアレだっただけに、もう健康体な自分が存在するなんてことはありえないはず。それなのに……

「考えていても仕方ないですね。それにしても不自然なくらい静かな所ですねえ」

周りに誰もいないのに、つい独り言を発してしまうのは彼の性分なのだろう。

ピカッ……!!

「えっ——？」

不意に背後で大きな光が眩い光沢を放った。

光は円柱状に形が成っており、そして徐々に光明は小さくなって行く。

同時に光の形も円柱状から楕円状へと形状を変えてゆき、光は徐々に薄くなってゆく。

光が収まってゆくと、後光の中から桃色の『何か』が見えた気がした。

「誰か……光の中にいるのですか？」

光はどんどん微薄になってゆき、後光の中には確実に『人』がいることが明確に見えてきた。

「……………」

光の中にいる人物は、まるで眠っているかのようにピクリとも動かない。

そして『人』を包んでいた光は徐々に霧散されてゆくように静かに消え、やがて完全に後光すらも消え失せた。

光の中にいた人間はうつ伏せになっているため顔は見えないが、その倒れている後ろ姿だけでイオンはその人物が誰なのか認識出来てしまった。

イオンは自分の顔が蒼白になっていることが分かった。

「……………んん……………」

光の中にいた人物が微かに呻き声を上げる。

その人物も先ほどまでのイオンと同じく、気を失っているだけらしい。

彼は何が起こったのか分からず、しばし呆然としていたが、その呻き声でハッと意識を取り戻した。

そしてイオンはその人物の名前を高らかに叫ぶ。

「アリエッタっ！　しっかりっ！　しっかりしてくださいっ！」

桃色の少女――アリエッタの名を叫びながら、イオンは優しく彼女の身体を揺らす。

「う……うん………えっ？」

アリエッタが小声を上げると、閉ざされていた目がゆっくりと開き、その顔に真紅の瞳が覗かせた。

「……な、なんで……？」

目を開けた先に不意に現れた片想いの相手、この不意打ちにはアリエッタも驚かずには居られない。

「気がついたようですね。よかった」

彼独特の優しさと安心感を与える温かな笑顔が彼女に向けられる。

「……イ……イオン……様！？」

恋焦がれているアリエッタにとって、その笑顔は余りにも眩しすぎた。

対アリエッタ時のみイオンの笑顔は悩殺スマイルと化すみたいである。

「アリエッタ、立てますか？ …… って、いきなり立ち上がるのは厳しいですよね…… さあ、僕の肩に掴まって」

「……っ！」

真っ赤になって俯くアリエッタを尻目に、イオンは構わず勝手に彼女の手を取り、肩に担ぐような姿勢を取り出した。

「とりあえず、人がいる場所を探しましょう。色々分からないことだらけの時は、人に聞くのが一番ですもんね」

「（こくこく）……」

イオンの台詞にこくこくと首を縦に振って賛同するアリエッタ。

イオンは気付いていなかったが、アリエッタはその悩殺スマイルを目と鼻の先で見ってしまった為、彼女は言葉を失うほどのダメージを受けてしまったのであった。

あれから小一時間ほど何も無い平野を歩いた二人。数分してようやく歩けるようになったアリエッタは、なぜか控えめにイオンのやや後方を歩いていた。

運良く魔物とも遭遇せず、些細な会話をしながら仲良く歩く二人……といってもほとんどイオンが一人で喋りっぱなしであつたが……

「あつ、街です！ 街ですよ、アリエッタ！」

目の前に建造物が見えただけで大ハシヤギのイオン。喜怒哀楽の激しい人である。

「は、はいっ」

笑顔を向けられるたびに顔を真っ赤に染めるアリエッタ。

紅潮しっぱなしの顔色を隠すため、顔を俯かせているが、耳まで真っ赤なためあまり意味は無い。

「あと少しですよ。アリエッタ、がんばりましょう！」

そう言うのと、イオンは悩殺スマイルを浮かべたまま、不意にアリエッタの手を握る。

突然手を握られただけでもアリエッタに取っては紅潮物なのに、それにプラスしてこの悩殺スマイルである。それはまさに超絶秘奥義と同等の威力を誇っていた。

そして、その不意打ち攻撃を真正面から受けてしまったアリエッタは――

「……っ！！（バタッ）」

——失神した。

「ええっ！？　ちょ……アリエッタ！？　どうしたのですかっ！？　しっかりしてください！」

顔が紅潮したまま気を失ったアリエッタの身体を、馬乗りになったイオンがブンブンと揺すって起こそうとする。

この体制が更に彼女の気を動転させる行為になっていることを知らずに、イオンはいつまでもいつまでも彼女の身体を揺さぶるのだった。

「……う……ん……ん……」

本日二度目の昏迷、そして二度目の意識回復。

自分が今寝ている場所は固い土の上ではなかった。

心地良いフカフカのベッドの上、軽く見渡して見るとここはどこかの民家の中だということがわかった。

「イオン様？　……イオン……様は……？」

自分の現状を確認めるよりも先に、自分が恋焦がれる相手を用意に探していた。

しかし、彼の姿は愚か、人っ子一人の気配すら感じない。

彼女の心中は、周りに誰も居ない不安よりも、イオンが側に居ない不安の方が強く押し寄せていた。

アリエッタは慌ててベッドから身を起こし、イオンの姿を探しに行こうとする。

だが、台所の方から食器を載せたお盆を手に持ちながら、彼女が探していた相手が姿を現した。

「あつ、アリエッタ。良かった、気が付いたんですね……って、ダメじゃないですかあ、まだベッドから起きちゃあ。まだ本調子ではないのですから寝ていなきゃダメですよ」

お盆をテーブルに置き、イオンはアリエッタを無理やりベッドに落ち着かせ横にさせた。

「はい、お粥ですよ。料理は成れていなかったなので美味しくないかも知れませんが、一応栄養を取らないといけませんからね。食べられるだけでいいですので頂いてください」

「えっ……あ、ありがとう……ございます……イオン様……」

ここはどこなのか、自分が倒れた後どうなったのか、彼がここまで運んでくれたのか、訊きたいことは山のようにあるが、今は

彼の厚意を素直に受けることにした。

しかし、彼の厚意はこれだけでは終わらなかった。

アリエッタの言葉にイオンは嬉しそうな表情を浮かべると、彼はお粥をレンゲに救い、彼女の口元へ差し出した。

「さっ、口を開けてください。あ〜んです」

「〜〜っ!？」

別にからかっているわけではないのだが、実はこう見えて彼には世話好きな一面があるのだ。

一度面倒を見出したら最後まで面倒を見るタイプのようである。

「あっ、このままでは熱すぎですよね……（ふ〜ふ〜）……はい、これで大丈夫ですよ」

「〜〜〜〜っ!!!」

アリエッタの顔はもはや『赤』以外の色が見当たらないくらい真っ赤だった。

しかし、大好きなイオンの厚意を無駄にするわけにはいかない。

彼女は意を決して差し出されたお粥（イオンのふ〜ふ〜付き）を口に入れた。

「どうですか？ 自分でも味見はしましたが中々なものでしょう?」

——味見した？

——このレンゲで？

——もしかしてそれって間接……

「……（バタッ）」

「ええっ！？ ど、どうしてまた倒れるのですかぁ！？ し、しっ
かりしてくださいっ！ アリエッタっ！！」

本日三回目の意識昏迷。

内二回の原因の根源である人物は、ただ訳が分からずにひたすら
慌めき騒ぐのであった。

「ううっ……ん」

ベッドの側にある小窓から、暖かな夕日の茜色な光が帯状になっ
て、アリエッタの小さな身体に注がれる。

三度目に意識が回復した頃には、完全に夕の眼が街全体を覆って

いた。

「……あたし……また……あつ——」

ふと自分の隣に何か重みを感じられた。この場合それが何なのか、鋭い読者の皆さんなら想像が付いているかもしれない。

——そう、彼女の隣には、アリエッタに寄り添うようにベッドに突っ伏せるイオンの姿が在った。

「イオン……様……」

側で寝ているイオンの頭を滑るように撫でるアリエッタ。

遠慮がちな性格の為か、触っているのかいないのか分からないくらいスレスレの箇所を器用に撫でている。

「……たくさん……迷惑掛けちゃった……」

本来なら自分が彼を守るべき立場にいるはずだったのに……これでは逆だ。

しかし、アリエッタはそれを悔やむ気持ちよりも、大好きな相手が自分の為にここまでしてくれたことが嬉しくてたまらなかった。

「……うゝ……ん……んん」

「……っ！」

イオンが唸るような寝言を漏らすと、アリエッタはビクッと身体

を震わせ、慌ててその手を引っ込めた。

そしてタイミングを図ったかのように、イオンがゆっくりと目を覚まし上体を起こした。

「あつ、すみません……看病するつもりが僕まで寝ちゃってしまいました」

ベタな展開だけに台詞までベタになるイオン。

「あの……イオン様……ごめんなさい！！……あたし……迷惑ばかり——」

「気にしないでください。僕こそすいません、アリエッタは体調が悪かったみたいなのに無理して歩かせてしまい……」

別にアリエッタは体調が悪くて倒れたわけではないのだが、この超絶天然男は思いつき勘違いしているみたいだ。

「そ……そんなこと——」

「あつ、そうそう。この民家ですけど、今は空き家みたいなので僕達が自由に使っていいみたいなんですよ。でも、無料で……というわけにはいきませんでしたので、明日からこの街で家賃代を稼がないといけません」

アリエッタが慌てて弁明を施そうとするが、イオンは勝手に別の話を始めてしまった為、完全にそのタイミングを逃してしまった。

「ごめんなさい……あたしのせいで……」

とりあえず謝るアリエツタ。その後イオンなら必ずこつ言つと知
つていながら……

「気にしないでください。それに教会や図書館でのお手伝いなので、色々情報が手に入るかもしれませんし……元々そのつもりでしたからね。一石二鳥ですよ♪」

「……イオン様……」

イオンの優しさに改めてオープンハートされるアリエッタ。

「その為にしばらくこの家に二人で住む事になりそうですね。同居人としてよろしくです、アリエッタ」

同居……？

——二人でこの家に……

— 住む？

「ふっ（バタッ）」

「ア、アリエッタ~~~~~」

本日四度目の意識昏迷。そして三連続の失神才子……

もうここまで来ると、コントをしているようにしか見えない二人

であつた。

第19話 【回想】イオンとアリエッタ？（後書き）

「スキット」 【同居一日目・夜】

イオン「さあ、眠りましょうか……っと言ってもベッドが一つしかありませんね」

アリエッタ「あっ……じゃあ、あたしがソファで……」

イオン「さっ、アリエッタ、少し詰めてください」

アリエッタ「えっ？ えっ？ イオンさま!？」

イオン「やはり思った通り大きいベッドなので二人で楽に使えますね。ではお休み、アリエッタ」

アリエッタ「（ええ……っ!？）」

イオン「……zzz」

アリエッタ「（……ね、眠れないよ……イオン様あ）」

第20話 【回想】イオンとアリエッタ ？（前書き）

「スキット」 【同居二日目・朝】

イオン「おはようございます。アリエッタ」

アリエッタ「おはよう……」

イオン「……？ どうしました？ 元気ないですね。もしかしてまだ体調がよろしくありませんか？」

アリエッタ「い、いえ！ そうじゃなくて……その……眠れなくて……」

イオン「あはは、昨日はたくさん気絶してましたもんね。眠気も無くなってしまったのでしょうか」

アリエッタ「（イオン様のせいですよっ！）」

第20話 【回想】イオンとアリエッタ ？

神殿都市『ライムス』。

信仰と栄光の都市と呼ばれているが、奉っているのは神像ではなく、ヴァーゲスト像。はつきり言って、神々しさなど欠片も感じられない。

ある意味ウケ狙いのようにも見えるが、信者達は大真面目で参拝に訪れている。

その都市の居住区の一角にイオンとアリエッタが同居している民家はあった。

「では、今日もがんばってお仕事に勤めましょう！」

「はい……っ！」

イオンの言葉に笑顔で応じるアリエッタ。

同居を始めてから、すでに数日が経っていた。

教会や図書館で仕事をしているうちに、この世界は死者が行き着く異世界であることや、ヴァーゲストという男が世界の中心人物として動いていること、そしてアリエッタを包んでいた謎の光の正体は、この世界に行き着く為に誰もが体験する移転現象であったことなど、様々なことが分かった。

慣れない同居生活に、アリエッタが失神したり、イオンが料理に

苦悩したり、アリエッタが失神したり、イオンが仕事で苦悩したり、アリエッタが失神したり、イオンが音機関係に苦悩したりと、前途多難な日々が続いたように見えた。

しかし、イオンの柔らかい雰囲気と、アリエッタの素直な性格が功を奏し、街に溶け込むのもそんなに時間が掛からなかった。

そしてアリエッタの心境にある変化が見え始めた。

それは、今彼女が見せたような『笑顔』。今までの彼女を知っている人が見たら、それこそ信じられない光景と思われることだろう。

そんな内攻的な彼女が自然と笑みを漏らすくらい、彼女にとってこの同居生活は幸せで満ち足りているのだろう。

「あ……あの……イオン様……？ その……手を……」

「……？ はい？ 何ですか？」

「い……いいいいいい……いえっ！ な、なんでも……ないです……！」

しかし、根本的な内攻的性格は治っておらず、言いたいことがあるとしても素直に伝えることが出来ない所は相変わらずだった。

「……?? そうですか？ では、神殿へ——ではなくて、今日は図書館整理のお仕事でしたね。さあ、図書館へ急ぎましょう」

「あっ……！」

イオンはそう言葉を返すと、彼女の真意を読んだのか、それともただの気まぐれなのか、不意に彼女の手を握ってきた。

「……っ！」

いつもは彼の気まぐれ行動に卒倒するアリエツタだったが、さすがに出勤前から失神するわけにはいかず、彼女は顔を紅潮させながらも必死に悶えるのであった。

居住区と神殿下層区を繋ぐ噴水広場、いつもは静けさだけが漂うような場所のはずだが、今日はなぜかいつもと様子が違っていた。

何やら街の入り口付近で人ばかりが出来ている。

不思議に思ったイオン達は近くにいた人に声をかけた。

「あのおー、何かあったのですか？ 皆さんこんなところに集まっていますか……」

イオンが声をかけると、彼のユルイ雰囲気とは対照的に、その男性は非常に慌めいた表情で口を開いた。

「あつ、イオン君にアリエツタちゃん！！ 大変なんだよ！ どうやら街に魔物が侵入してきたとかでっ！」

「「ええっ!?!」」

男性の言葉に驚きで顔を見合わせる二人。

神殿都市といっても治安を守る役人はいるだろうが、二人の性格からして素直に傍観するつもりなど毛頭なかった。

「行きましょう! アリエッタ!」

「はいっ!」

「えっ? 行くなって二人共……って、おい! そっちは危ないって!」

心配する男性の言葉を余所に、すでに走り出していった二人の耳には届いていなかった。

「ガウ~~~~っ! ガウガウガウっ!」

街の入り口に近づくに連れて、魔物の咆哮が徐々に大きく聴こえてくる。

「……あれ? この声……」

魔物の咆哮を聴いたアリエッタは、脳裏の奥に聞き覚えがあった

その声に疑問を憶える。

イオンとアリエッタは野次馬を掻き分け、少々強引に街の外門へと駆けつけた。

そして野次馬の先頭に立った二人は、襲撃者の正体に驚きの表情を浮かべた。

「ガウツ！ …… きゅーん ……」

まるで犬みたいな咆哮を上げていたのは、数人の役人達に取り押さえられているライガだった。

アリエッタの目が驚きで見開かれる。

そして次の瞬間には周囲の目も気にせず、大きく声を上げていた。

「やめてっ！！」

空気が張り裂けるようなアリエッタの叫び、それを聞いた一同は、一斉にシンッと静寂を齎した。

野次馬、そして役人達が、アリエッタの方へ一斉に視線を集める中、そんな注目などもお構いなしに、彼女は一目散に役人達に捕らわれかけていたライガの元へ走る。

そしてアリエッタは、役人達を睨みながら彼女は高らかにこう叫ぶ。

「この子はアリエッタのお友達……！ ライガママの子供でアリエ

ツタの大切なお友達なのっ！」

アリエツタはライガを優しく抱きかかえ、ライガ自身も彼女の優しさに答えるようにアリエツタに頬擦りを交わした。

「お友達って……」

役人達にはアリエツタの言葉と行動に、呆氣に取られながら動揺を示す。

そして彼女の言葉に補足するかのように、ゆっくりと近づいてきたイオンが口を開く。

「彼女の言っていることは本当ですよ。恐らくこのライガは、アリエツタの匂いを嗅ぎ付けてここにやってきただけでしょう。それとついでに断言しますが、このライガはアリエツタが命令でも下さない限り絶対に人へは危害を加えたりしません。断言します」

そう言つと、イオンもライガの元へ近づき、笑顔を向けながら頭を撫でた。

するとライガも気持ち良さそうに目を細め、イオンにも頬擦りを交わした。

「ですので、この子を捕らえるのは待つて頂けませんか？ それと出来ればこの子も街の中へ居れてあげたいのですが……」

ついで——にしては結構無茶な注文を縋るイオン。当然役人達は言葉を唸らせた。

「まあ、捕らえるのは見逃してもいいのだが……さすがに魔物を街に入れるわけには……」

当然の如く、役人の言葉から出てくるのは否定の意。というか、ここで、『オツケ』じゃあこの子も今日から街の住民だ！』なんて言われたら、それはそれで問題である。

「そうですか……仕方ありません。アリエッタ、街を出しましょう。この子をこのまま放って置くわけにもいかないでしょう？」

「イオン様……でも……いいのですか？」

アリエッタが今にも泣きそうな顔でイオンの顔を見つめる。

しかし、イオンは終止笑顔で――

「大丈夫ですよ、この世界の情報もたくさん手に入れましたし、それに借家の家賃もこの前支払いましたからね」

いつもの優しい言葉。それも偽善やたてまえではなく、本心からの言葉だ。彼の言葉にはいつも嘘偽りはなかった。

イオンはそのままクルリと半回転し、野次馬に来ていた街の住人達と向き合った。

「ということなので、僕達は街を出ることに決めました。皆さん短い間ですけど、お世話に――」

「「「いやああああっ！ 行かないでええええっ！ イオンきゅうううんん！！」」」

イオンがペコリとお辞儀をした瞬間、野次馬達の女性達から悲鳴に近い声があがった。

「……そうだ！俺達の前から居なくなってくれえええつ！アリエッタちゃんああああん！！」

続いて男達の悲鳴。

そう——今悲鳴を上げた者達の正体は、密かに街で結成されていた、イオンとアリエッタの親衛隊だった。

その名も『イオンきゅんラブリー親衛隊』と『アリエッタちゃん萌え萌え親衛隊』。実はこの二人、本人達は気付いていなかったが、知らぬうちに街のアイドル的存在に祭り上げられていたのだ。

「い、いえ……しかし、街の皆さんには迷惑は掛けられませ——」

「違う！違うわ！全然迷惑なんかじゃない！」

「そうだ！それに『ライガを街で飼つてはいけない』なんて法律はないはずだ！」

「そうよ！ちょっとそこの役人達！待遇がオカシインじゃない！？」

「そうだそうだ！それにお前（役人）も、『アリエッタちゃん萌え萌え親衛隊』のメンバーじゃないか！しかもお前、会員ナンバー001だろ！？このままアリエッタちゃんが居なくなってもいいのか！？」

役所の方向で大きな罵声上がっている。二つの親衛隊を中心に抗議デモが行われているのだろう。

こうなればアリエッタの旧友であるライガを街に入れる許可が出るのは恐らく時間の問題だ。

バサバサバサバサッ

そして、誰にも気付いて貰えなかったが、もう一匹のアリエッタの旧友とも言える魔物——フレスベルグが『自分もここに居たのです……』と言わんばかりに、大きな翼で大音を立てていたのだった。

第20話 【回想】イオンとアリエッタ ? (後書き)

「スキット」 【同居二十日目・昼】

イオン「アリエッタ、今日はお昼どうします?」

アリエッタ「あっ! そ……その……今日は……お弁当を……作ってきたんです……」

イオン「本当ですか!? うわぁ、嬉しいなあ。では今日のお昼はそれで決まりですね」

アリエッタ「は……はい……これです」

イオン「わぁっ! すごく豪華で美味しそうですね! では早速頂きましょう!」

アリエッタ「……ハイ……ど、どうぞ……」

イオン「……あ、あの……アリエッタ? 僕にも箸を……」

アリエッタ「あ……あゝん……です」

イオン「もしかして、食べさせてくれるのですか?」

アリエッタ「(くくくく)……」

イオン「それでは……あゝん……(もぐもぐ)……うん、とっても

美味しいですよ！」

アリエッタ「~~~~っっ！」

第21話 【回想】イオンとアリエッタ ? (前書き)

「スキット」 【回想中の心の声】

リグレット「(なんだ? この惚気話は……?)」

ラルゴ「(物凄く本題から遠ざかっている気が……)」

シルヴィア「(イオン君……羨ましいなあ……あの年で彼女居るんだあ……)」

ミュウ「(……zzz)」

イオン「そして同居二五日目が過ぎ、いつものように僕達は一つのベッドを共用して——」

リグレット・ラルゴ「(まだ惚気話が続くのか!?)」

第21話 【回想】イオンとアリエッタ ？

あのライガ（＋フレスベルグ）進入事件から五日……つまりイオンとアリエッタが同居生活を始めてから丁度一ヶ月が経った。

ライガとフレスベルグの件だが、二つの親衛隊のあまりにもしつこい講義デモが功を奏し、ついに役所は諦めを示し、特別に街の中への侵入を許可してくれた。

特別とはいえ、そんなことが許されてしまうところが、この街の凄惨なところというか……終わっているところというか……

しかし、イオンが断言した通り、ライガ達は決して街の住人を襲ったりはしなかった。

むしろ二匹は【ライガタクシー】と【フレスベルグ航空貨物便】として、大いに街の交通手段として貢献していたりする。

そして今日もイオンとアリエッタは教会手伝い（主に雑用）の仕事を終え、神殿から出てきた。

街を茜色に染める夕の閃光が二人を出迎えてくれた。そして夕日は二人に大きな影をプレゼントしてくれる。

その夕日は、初めてイオン達がこの街に訪れた時と同じ色、同じ美しさを放っていた。

「……………」

「……………」

二人はしばし、この夕陽の作る茜色の景色に魅了される。世界が違っても、夕日の美しさは共通しているようだ。

街の景色にすっかり魅了されてしまっているイオンの横で、アリエツタはそんな彼の横顔をちらちらと盗み見ながら、ある思考に項垂れていた。

「（……イオン様と一緒に住みだしてから一ヶ月……とつてもとても幸せだった……でも……）」

でも——それは自分の気持ちであって、隣にいるイオンも同じ気持ちだとは限らない。

それに彼女は、イオンに伝えなければならない気持ちがある。

それを言葉にして伝えなければ、自分はこのまま一生前へ進めない気がした。

「（……言おう！）」

——胸の奥で秘めた想い。別に伝えなくても、この幸せな時間は続くだろう。しかし、それではいけないのだ。

そして彼女は決意を胸に抱き、彼に向き合ってこう言った。

「イオン様……これから少し……お時間……いいですか？」

神殿都市ライムス、神殿上層区東部展望台。

展望台と言っても、周りには何もない平野が広がっているだけなので、そこから見えるのは変哲も無い、草木や山脈のみ。

しかし、そんな味気ない景色でも、この時間になれば話は別だった。

夕日が当たるだけで、普段は変哲もない草木や山脈も、まるで絵画の世界のような、幻想的で美しい自然物へと変貌する。

それだけでこの展望台のムードは一転する。

それは告白するにはうつつつけなムードでもあった。

「わあゝっ、とても素敵な場所ですね！ 僕、知りませんでしたよ。この街にこんな場所が在ったなんて！」

展望台の手すりまで身を乗り出して景色に感動をするイオン。

おそらく彼は、アリエッタが自分を連れてきた理由が、自分ここからの景色を見せたかったのだと勘違いしてしまっているだろう。

それはそれで告白を逃げる口実にはなる……なるのだが、それではいけない。

「イオン様……聞いて……ください」

おずおずといつものように言葉に間を持たせながら喋るアリエッタ。

しかし、そこにはいつものような弱弱しさは感じられなかった。

「はい？ 何でしょう？ アリエッタ」

無垢な顔で振り返るイオン。

そしてその先には真っ直ぐな真紅の瞳で、力強く自分を見つめているアリエッタの姿が在った。

この一ヶ月——いや、この数年間ずっと伝えたかったこと。

ずっと秘めていた想い……

生前はそれ伝える前に彼は逝ってしまった……

もうあんな後悔をしないうちに……

アリエッタは勇気を振り絞り、決して彼の目から視線を反らさずに……言った——

「あたし……イオン様のことが……ずっと好きでしたっ！」

茜色に染まった景色が、アリエッタの勇気の輝きを映しているみたいだった。

遠くから聞こえてくる灯台の鐘音が、イオンの内心の驚きを木霊しているみたいだった。

大きく伸びる影が、二人の硬直時間の長さを示しているみたいだった。

——突然の告白……いや、アリエッタにとっては遅すぎたくらいの気持ちの伝達。

彼女はじつと彼の目を見つめている。たった一言の言葉だったが、彼女の伝えるべき気持ちは確実に伝わったはずだ。

あとは——彼の次の言葉を待つのみ……

一時、驚きで硬直していたイオンだったが、やがて気を取り戻し、そして彼もじつとアリエッタの瞳を見つめた。

そして、彼の『答え』が言い渡される。

「知っていました……」

「……えっ!？」

それは思いもしなかった返答。今度は逆にアリエッタの方が目を見開いて驚いてしまう。

「あなたの『導師イオン』に対する気持ちは知っていました。そしてそれは『僕』に対しての気持ちではないことも……」

「……??」

イオンの発言は、アリエッタにしてみたら何を言っているのか、まるで分からないだろう。

でも次の彼の言葉が、彼女の知らなかった真実を明確に言い表す。

「あなたは確かに『導師イオン』に恋をしていた……そう、それは『僕』でなく、オリジナルのイオンに対して……です……」

「……っ!？」

声にならない悲鳴。アリエッタの表情が自然と引きつっているのが見えた。

そして、聞きたくもなかった真実が、イオンの口から静かに語り告げられる。

「今まで隠してきていましたが……僕は、導師イオンのレプリカなのです……」

とある研究社に、被験体を元に人工的に『人』を作り出す技術が在った。

作り出された『人』は被験者の形姿が等しく、その能力までも極似する。人はそれを『レプリカ』と呼ぶ。

レプリカはオリジナルの劣化品だと豪語する人も居るが、イオン——レプリカのイオンは違うように考えていた。

レプリカだって、この世に授かった【人】なのだ。何もオリジナルと比べる必要など無い、一人の人として生きられるはずだ……と。

それを証明したのは、ミュウの主人ルークと、彼のオリジナルである人物——六神将のアッシュだ。

そして、オリジナルとレプリカを別視している彼だからこそ彼女にこう言い放つ。

「ですので……レプリカの僕では……あなたの気持ちには答えられません……」

自分がレプリカであることを卑下しているわけではない。

しかし、仕方ないこととはいえ、そんな大事なことをずっと秘密にしていた自分に、若干自虐的になっていることは確かだった。

イオンは目を反らし、アリエッタは立っただま硬直している。

そうしている間にも日は完全に沈む。いつの間にか、街は夕から夜へと変わっていた。

さつきまで二つ並んでいた二人の影も……もう見えない。

まるで二人の心が閉ざされるかのように……二人の関係に終わりを告げるかのように……もう見えなくなっていた。

居たたまれない雰囲気のまま数分が過ぎる。

まずその沈黙を破ったのはアリエッタであった。

「みんなは……アニス……そのことを……知って……いたの？」

顔を伏せながら淡々と発せられる言葉の羅列。

しかし、今までのような敬語は一切無くなっていた。

「……はい。世間には完全極秘で通していましたが……アニスや……他の六神将達は……知っていました」

つまり彼の周りに居た人物で知らなかったのはアリエッタだけ……
……そう彼女だけが――

「あたしだけが……除け者だったんだ……」

「そ、それは違います！ 僕達はあなたの為を思って……」

「近寄らないでっ！！」

イオンが彼女の肩に手を当てようとした瞬間、威嚇するような大声を上げられて手が止まった。

アリエッタはそのままゆっくりと展望台の出口へと歩み始める。

その後ろ姿はかつてルーク達と対峙した時に見えた負のオーラの
ようなもので充満されており……今の彼女には近寄り難い雰囲気
すら漂わされる。

「アリエッタ！ どこに……」

「近寄らないでって言ってるでしょっ！」

「……っ！」

内攻的な彼女にしては珍しい一喝、イオンも肩を震わせ足を止
めた。

ダッ！

そしてそのままアリエッタは走り去ってしまう。風に靡かれ、彼
女の涙がイオンの頬に当たった。

イオンは……追わない——いや、追えなかった。

なぜか足が動かない。追わなければいけないはずなのに、なぜか
それが出来ない。

——彼女に近寄るなって言われたから？

——彼女を追っても、どう声を掛ければいいのかわからないから？

「（違う……）」

イオンは竦んでしまった足を折り畳むように曲げ、そのまま手を地に付けた。

「僕が……僕が弱いから……いけないんだっ！」

悔しさと後悔に手を震わせ、そのままドンツと地を叩くイオン。

手が擦り剥けようと、血が滲んでいようと……何度も地面を叩きつける。何度も……何度も……

イオンは涙で地を濡らしながら、ずっと……ずっと……その場から動けずにいた。

そして翌日――

アリエッタは、ライガとフレスベルグと共に、ライムスの街から姿を消していた。

第21話 【回想】イオンとアリエッタ ? (後書き)

見てくれてありがとうございます！

長かったイオンとアリエッタの回想は次回で終わります。

イオンとアリエッタの組み合わせは書いていて楽しかった記憶があります。マイナーな組み合わせだとは思いましたがw

それとPVが10000を超えました！ 本当にありがとうございます！
ます！

第22話 【回想】イオンとアリエッタ ? (前書き)

今年最後の更新です。

このペースでいけば1月か2月には終わりそうです。

第22話 【回想】イオンとアリエッタ？

アリエッタ失踪から約二カ月が過ぎた。

そして今日も珍しく街の噴水広場には大きな人だかりが出来ていた。

今日は魔物が進入してきたとか、そういう事件の類ではない。

ライガ進入事件の時は皆驚きと焦燥でパニックに陥っていたが、今日は逆、皆悲しみに満ちた切ない表情をしていた。

その渦の中心には、荷物を纏めたイオンの姿が在った。

「『いやあ~~~~っ！ イオンきゅ~~~~ん！ 行かないでええええっ！！』」

そう叫ぶのは『イオンきゅんラブリイ親衛隊』の方々。いつもは黄色い声援を送る親衛隊だが、今日だけはみんな目に涙を浮かべていた。

今日はイオンが街を出てゆく日、広場に集まった人々はただの野次馬ではなく、彼を見送りに出てきてくれた街の住人達であった。

「皆さん、お見送りありがとうございます。今までお世話になりました」

ペコリと一礼した後、再び笑顔を向けるイオン。その瞬間、親衛隊の方々は大いに泣き崩れたという。

「でも、イオン君。本当に一人で大丈夫なのかい？ 傭兵の護衛でも雇った方が……」

街の男性の一人が、心配そうな表情を浮かべながらイオンを気遣うのだが、彼は笑みを浮かべながら静かに首を横に振った。

「僕なら大丈夫です。だって、この為に二ヶ月も掛けて『準備』を施してきたのですから」

そう言いながら、イオンは力強い握り拳を前に向ける。

その決意に満ちた目を見て、イオンを心配した男性も小さく笑みを浮かべた。

恐らくこの男性もイオンがこの二カ月も掛けてきた『準備』の内容を知っているからこそその笑みなのだろう。

「そうだったな。今のキミなら大丈夫だとは思うが、この辺は魔物も強い。充分に気をつけていくんだよ」

そう言つと男性も拳を前に突き出し、イオンの拳にトンッと当てた。

「……イオンきゅんっ！ 私達、『イオンきゅんラブリー親衛隊』はいつまでも……いつまでも……キミの帰りを待っているからねええええええええええつ！」

「「「うおおおおおおつ！ イオンくん！ 必ず……必ず俺達のアリエツちゃんと共に帰ってくるんだぞおおおおお

おおおおつ！」「」

二つの親衛隊の熱い想いがこもった言葉に見送られ、イオンは荷物を肩に背負いゆつくりとライムスの街を後に――

「――では、俺が導師の護衛役として買ってやってもよいが？」

「えっ？」

街を出て行こうとしたイオンの耳に、ふと側面から聞き覚えのある声が聴こえた。

その声につられ、イオンを筆頭に、見送りに来ていた一同もそちらの一点に視線を注目させた。

そこには、意外な人物が木に背を預けて腕を組む巨漢の人物が立っていた。

「（ひそひそ……うあつ、なんだ？ あの手……あれで格好つけているつもりか？）」

「（ひそひそ……人型をした新種の魔物じゃないかしら？）」

「（ひそひそ……マー君、見てはいけません！）」

「（ひそひそ……キモっ）」

「……………」

巨漢の人物に対する、街の人達からの素敵過ぎる感想がひそひそ話となって飛び交っているが、無常にもそれらの言葉は全て、その男の耳にも入ってきていた。

「ラルゴじゃないですか！ どうしてここに？」

格好をつけていたつもりが人型の魔物と間違えられ、子供の視界を遮られるくらいキモがられた男——その名も黒獅子ラルゴ。

「……調査の為にこの街へ訪れていたのだが……今激しく来なければ良かったと思った所だ」

「ハイ？」

「いや、何でもない……それより導師よ。どうする？」

「何がですか？」

素で返すイオンの反応に、ラルゴは思わずズルツと足を踏み外した。

「だから、俺が護衛についてやるかどうかって話だ！ ……話を全く訊いてない所は死しても変わらぬようだな」

「「「イオンきゅんの悪口は許さないわよおおおおっ！……！」」」

「

ラルゴが呆れ果てた末に呟いた言葉は『イオンきゅんラブリー親衛隊』の方々の耳にも入ってしまった、彼女達は怒声と共に、ラルゴに石を投げつける。

「うおっ！ な、なんだ！？ こいつらは？」

「あはは。ラルゴ、早くも皆さんに気に入られたみたいですね。」

「お前はこの状況を見て、よくそんな言葉が出てくるな！」

「では、僕はそろそろ失礼しますの……皆さん、お世話になりました。ラルゴも久々に会えて嬉しかったですよ。」

「……って、オイっ！？ 護衛の話はどうなったのだ！？ って、コラっ！ 俺を置いて勝手に行くな！」

後方で何やら叫んでいるラルゴは無視し、イオンは街の住人に一礼をして背を向けた。

「（アリエッタ……僕は必ずあなたを見つけ出してみせます……そして……）」

イオンは遥か遠くを見据えながら、固い決意を胸に抱き、そして今度こそライムスの街を後にした。

その遥か後方で、なぜか役人に尋問を受けられているラルゴの姿が、とても印象的だった。

第22話 【回想】イオンとアリエッタ ? (後書き)

見てくれてありがとうございます。
そして来年もよろしく願いします！

第23話 異世界の預言者（前書き）

今回は会話回です。

すごく長くなったので途中で区切ろうかとも思いましたが、全部つなげて一気に更新しました。

第23話 異世界の預言者

「場面は戻って、【モーヴ】謁見の間」

「——ですので、僕の余計な一言のせいで……アリエッタは……」

「……………」

イオンの回想話はそこで一通り終わった。

その衝撃的内容に、ミュウとシルヴィアは言葉が出ない様子だった。

しかし、冷静沈着なリグレットだけは、今の話に疑問点を抱いたようだった。

「しかし、今の話を聞く限りだと、アリエッタが敵対する理由としては不十分だと思うのだが……」

リグレットの意見はもつともだった。

二人の關係に亀裂が入ったことは分かったが、それが敵対と言えるのかどうかは納得しかねる。

そのリグレットの疑問点に答えを返したしたのは、なぜかすまし顔をしたシルヴィアだった。

「ちゅちゅちゅ、リグレット分かってないなあ」。告白してフラれ

た女の子は自暴自棄になりやすいんだからあゝ。それに加えて、隠し事なんかされた日には、それだけで大砲を無差別乱射モノだよ」

「（お前だけだ。そんな特殊人物は……）」

何気にとんでもない例をサラリと言ったシルヴィアだが、彼女なら権力を使って本気でやりかねない。

リグレットとラルゴのツツコミも、その辺を考慮しての言葉だった。

「まあ、導師に嫌悪感を抱いても、敵対する理由にはなっていない。それにヴァーゲストに協力する理由としては相変わらず不明のままだ」

イオンの回想の中では、ただのギャグキャラと化していたラルゴもまた、リグレットと同じ意見なようだった。

「そうだな。アリエッタが導師の元から去っていった後、更に何かあったと考えた方が可能性としては高いだろう。それでも無ければあんな下衆なヤツに協力わけがない」

リグレットの言う『下衆なヤツ』とは、もちろんヴァーゲストのこと。ふと見るとリグレットの顔が『対ヴァーゲスト』仕様の怖い顔に変わっていた。

「リグレットさん。そのヴァーゲストさんって人と何かあったのです？ その人の話になると、リグレットさんはいつも怖い顔になるのです」

いち早く、リグレットの表情の異変に気付いたミュウが不思議そうな顔をしながら、彼女に直接その真意を尋ねた。

「……別に何も無い。私が個人的に奴が憎いだけだ」

「何も無いのに、憎しみを持っているのですか？」

そう鋭いツツコミを入れたのはイオン。普段ボケ担当であるが故に、彼のツツコミには妙にフレッシュ感があつた。

「……………」

しかし、リグレットはだんまりを決めこんでしまう。

そんな彼女の様子に見兼ねたラルゴが、変わりに代弁するかのように口を開いた。

「リグレットよ。ここに居る者は皆同士とも呼べる存在であろう？
一人で抱え込まず、仲間に胸の内を明かしても良いのではないか？」

「……っ！」「」「」

ラルゴの心温まる台詞に、リグレットのみならず、なぜか、ミュウ、シルヴィア、イオンの三人も動揺を示していた。

「（ラ、ラルゴが良いことを言ってるう……………）」

「（ラ、ラルゴさんが良いことを言っているのです……………）」

「（ラ、ラルゴの口からそんな言葉が出てくるなんて……）」

シルヴィア、ミュウ、イオンの順に、それぞれ内心で驚きを全面に醸し出していた。

三人が普段、ラルゴをどんな風で見っていたか、一目で分かる内心だった。

そんな物凄く失礼な三人には気付かず、ラルゴはリグレットの顔をじつと見つめている。

「話したかったらお前が語ればどうだ？ お前も私と同じ主観で奴を見ているのだろう？」

「まあ、お前ほど執着はしていないがな。では勝手に語らせてもらおう」

「……ふんっ」

リグレットはそのまま壁に背をあずけると、それっきりそっぽを向いてしまう。その姿は怒っているというよりも、軽く拗ねているように見えた。

ラルゴはそんな彼女の様子にふっと微笑むと、そのままミュウ達と向き合い、ゆっくりと語り始めた。

「では……そうだな。まず、我々がなぜヴァーゲストに敵対しているのか……その辺の理由から語るとしよう」

「まず、この世界では預言が読めないことは知っているな？」

ラルゴの口からいきなり衝撃的な事実が語られる。

しかし、話を聞く三人はあくまで平静を崩さなかった

「もちろん」 知っているよ」

「僕もそれは噂で知りました。譜石がなかったたので、確かめようが無かったですが……」

「知らなかったですよ」

知っていた者、話だけは聞いていた者、知らなかった者、三人の答えはそれぞれだった。

「星の記憶を読み取る音律士ユリア・ジュエと言えど、さすがに異世界の未来までは詠めなかったと言っことだ」

知らなかったミュウに気を使ったのか、ラルゴが丁寧にその概要を話してくれた。

そのラルゴの説明に対し、とりあえず首を縦に振り続けているミュウ。

「……なるほどですよ」

「（アイツ、絶対分かってない……）」

ラルゴの説明に対し、ミュウが口を開くまでの微妙な間を見て、後ろで傍観していたリグレットはするように直感した。

その直感的を射ていたのが、ミュウはそれっきり口数が少なくなってしまう。

「預言の無いこの世界に最初は皆動揺を示していたものだが、時間が不安を取り除いてくれた。預言など無くても人々は強く生きるところを出来るのだ」

ラルゴの私感を含む説明に、イオンが大きく首を縦に振り、同感していた。

「そうですね。それに例え預言で支配されている世界だとしても、人はそれを覆すことが出来る。人というのはそれほど強い存在なのです。いえ、人だけに限らず、魔物も……チーグルも……そしてレプリカだって、預言に負けない強さを持っているのです」

預言を詠むことが義務付けられていた立場であつた彼だが、その口から出てくる言葉は預言を否定するものばかりだった。

導師という立場であっても、預言に対して思うところはあつたのだろう。

「しかし、そんなある日、あのヴァーゲストという男の名が、この世界に知れ渡ることになる事件が起きた」

「事件……ですの？」

「「……………」」

ミュウが首を傾げて聞き返す中、その辺の詳細をすでに知っているシルヴィアとイオンは俯きながら表情を暗めた。

「あのヴァーゲストという男は……信じられんことに……この世界の預言を詠んだのだ」

——ND 20XX 力を手に×れ×者、グラ×・×ウルの××記憶を×み起こす×ろう——

「それが一年前、初めて奴が公然で読み上げた預言だった」

ラルゴは、ヴァーゲストが詠んだという預言を、紙に書いて見せてくれた。

「力が不安定だったのでしょうか？ 随分と穴抜け箇所がある預言ですよ」

えらく中途半端な預言にイオンは首を傾げる。

「そこまでは分からぬが……奴はその後も次々と預言を詠み上げた」

—ND X02X 青×の男×、オー×ド×ン×より、
××××れり—

—ND 20XX 音×を蓄××道具、力を手に入×し
者に渡り、星の記憶を完全に読×起こすであろう—

—ND 2XXX ×毛の×児、×××××し者×、
×ち××すである×—

—ND XXXX オ×××ラ××に×り×者、赤××
主×と×××るであろう—

「みゆうう。何が何だか分かりませんの。」

暗号文に近い預言を前に、ぐるぐると目を回すミユウ。

しかし、これではミユウでなくても目を回したくなるような、謎だらけの預言だった。

「ヴァーゲストが詠み上げた預言は、今のところ以上の五つのみだ。しかし、導師の言った通り、全てが虫食い状態になっており、最初は偏狂男の戯言とみて、気にも止めない者がほとんどだった」

当然だろう。穴抜けの預言など過去に前例がないことだけに、その預言の信憑性も疑わしいというものだ。

「しかし、ヴァーゲストはそれ以外にも信じられない力を持ってい

た。だから、この男は少なくとも何か特別な力を持っていることが世界に証明されると、観衆は途端に奴の預言を信じ始めた」

預言の無い世界に訪れた、あまりにも急すぎる預言の再現。

あんな虫食い預言を信じるほど、この預言の無い世界に不安を憶えていた人も少なくなかったというわけだろう。

「それ以外の力って、何ですか？」

この世界の事情に関しては、全くの無知であるミュウ。

彼以外のメンバーはその辺の事情も知っているのか、未だに表情を暗まして俯いているのみだった。

「簡潔に言えば、音素の遠距離操作、それと無詠唱で放たれる譜術だ。どちらも常人では考えられないことだ」

無知なミュウに対し、意外にも親切に、そして丁寧に説明を加えてくれるラルゴ。

しかし、ミュウは相変わらず適当に首を縦に振り続けるだけだった。

「……………それはすごいですの〜」

「（分かってない……………アイツが今の説明を理解できたわけがない……………）」

『ミュウ使い』のアビリティも、すでにマスターレベルに達して

いるリグレット。

彼女にはミュウの内心など何でもお見通しのようであった。

そしてラルゴの説明に対し、イオンがここである事に気付いた。

「でも、その能力ってミュウのソーサラーリングと酷似していますよね。音素の操作、無詠唱という二点に関してですが……」

「みゅみゅっ!?　じゃあ、ヴァーゲストさんもソーサラーリングを持っていますの?」

「……それだとわざわざお主のリングを狙ったりはしないのではないのでしょうか?」

「実はリングコレクターかも知れないですよ」

ありえない結論に達したミュウに対し、ラルゴは頭の上に怒りマークを浮かべながら、後ろで傍観していたリグレットに静かにこう訪ねた。

「……リグレットよ、このチーグルをリングから引き離して、捨ててきてもいいか?」

「じゃあ、あたしは捨てられたミュウちゃんを拾って部屋で飼う?」

「餌は木の実で良いと思いますよ」

ラルゴの続いて、シルヴィア、イオンが言葉を繋ぐ。

二人は、ラルゴとは対極的になぜか笑顔を浮かべていた。

「みゅうっ！ 皆さん、目が本気だから怖いのですのっ！！」

ミュウは泣き顔でリグレットの元へ駆け寄り、彼女の頭の上でブルブルと震え始めた。

ミュウを頭に乗せたまま、リグレットは一つのため息を吐く。

その卑しみに満ちたため息には、『やはりシリアスな空気を壊すのはお前なんだな……』という意味の含みが込められていた。

「あのお……それで結局、リグレット達はどうしてヴァーゲストに敵対しているのですか？ 話を訊く限りでは、彼は預言を詠んだだけで、具体的な悪いことをしたわけではありませんよね？」

イオンが怪訝そうな顔をしながら、当初の疑問に話を戻す。

「その『預言を詠んだだけ』という部分が大問題なのだ」

ラルゴは表情を強張らせ、そのまま黙り込んでしまう。

しかし、今度はリグレットが代弁者となり、彼の代わりに概要を

語り始めた。

「せっかく人々は預言の無い世界で強く生きようとしていたのに、その男の浅はかな行動のせいで、また預言に縋ろうとしている人民が増加してきているのだ。これでは…… オールドラントと同じになっってしまう」

預言のある世界——オールドラント。そこは、良い預言には歓喜し、悪い預言には絶望するしかない世界。人々の生活は、完全に預言に左右されてしまう…… そんな世界。

預言のない世界——グラン・ソウル。そこは、未来が約束されていない世界。しかし、人々を束縛するものは無く、未来を自ら作り出すことが出来る…… そんな世界。

リグレット達のように、後者が望ましいと考える者達も居れば、前者の世界を求める人達もいる。

そして、現在グラン・ソウルはその均衡が崩されかけている所まで来ている。

それは世界規模で混乱を招きかねない大問題だった。

「現在、我々のように預言を求めないことを良しとする人民は、今や極少数でしか居なくなっただけだ」

最初は半々くらいだったらしいが、ヴァーゲストがその不思議な力を見せ付けるようになってから、預言を求める——いや、預言を信じ始めた人が急増してしまったとのことらしい。

そして今や、街中でヴァーゲストを象徴することが暗黙の義務みたいな雰囲気になってしまい、現在のように行く所全てに彼の石造が奉られるまでに至った。

「そこで、そんな人々をみくんなまとめて集めちゃおうってことで結成されたのが、この反立憲立志建国本部『モーヴ』っていうわけだよ」

ここで、今まで割と静かだったシルヴィアが嬉しそうに補足を加えた。

どうでもいいが、この人はいちいち語尾に『』マークを付けなければ喋れないのだろうか？

「だけど、年々モーヴの人口も減少気味に陥っているがな」

「うえええっ！？　そ、そうだったの！？」

ラルゴの説明に、今知ったかのようなリアクションで返すシルヴィア……いや、おそらく本当に今知ったのだろう。

「お前、女王ならそれくらい把握しておけ」

「あたし、細かいことは気にしない女王様で通すつもりだから」

国の最高指揮者が細かいことを気にしなくなったら、はつきり言っ
て終わりと思うが……まあ、その辺はツツコまない方が賢明な判断
だろう。

「私は……あの男を許してはおけない……っ！」

シルヴィアのせいで妙な空気に成りかけたが、リグレットがそれを打ち消すように、怒りの雰囲気を選びに漂わせていた。

「この世界はある意味閣下の理想なのだ！ それを壊そうとするヴァーゲストという男、放つてはおけまい！」

生前にリグレットが最も忠実を勤めていた存在、ヴァン・グランツ。

二人の関係の間に『愛情』が在ったのかどうかは不明だが、少なくともこの場に居る人達は壮大に勘違いを始めていた。

「（久々に出たな……リグレットの総長ひいき）」

「（閣下って誰だろお……愛人？）」

「みゅう？ リグレットさん、もしかしてオヤジ趣味で——」

バンバンバンバンバンっ！

ミュウのセリフを遮るかのような五つの銃声、勿論その根元に居たのはリグレットであった。

「ミュウ。それ以上何か言ったら、三連射撃を見舞いするわよ」

「すでに五連射撃を見舞いされたのですのっ！」

「（口にして言うからだ……）」

リグレットの頭の上に居たため、ゼロ距離を見舞いされたミユウ。

ギャグキャラは死なないという定義、どうやらそれは本当みたい
だった。

第23話 異世界の預言者（後書き）

見てくれてありがとうございました。

長々と説明していましたが3行でまとめると以下の通りです

ヴァーゲスト（オリキャラ）が突然預言なんぞ詠みだしやがった。
預言なんていない軍団が立憲国モーヴを作って集結する。
預言信仰派（ヴァーゲスト勢）VS預言否定派（モーヴ勢）の対立
が始まる。

第24話 その大きさ、30倍（前書き）

会話は基本長いです。

逆に戦闘回は細かく刻む傾向があるみたいです。

第24話 その大きさ、30倍

永きに渡った報告会はそこでお開きとなり、各自自由行動の時間へと移り変わった。

リグレットは早々に謁見の間を出て行った。

シルヴィアとラルゴはその場に残り、今後について語り合っている。

そしてミュウは……

「迷ったですの……」

見事、お約束な展開にハマっていた。

特別広いわけでもないムーヴ城。でもそれは人から見たら話、チーグル視点のミュウには、カラフルな大要塞も同然だった。

「あれっ、ミュウ。どうしたのですか？ こんなところで……」

途方に暮れていたミュウの背後から、その救いの呼び声は掛けられた。

「みゅうううっ！ イオンさああんっ！」

「わわっ……と」

イオンの高声に安堵したのか、ミュウは涙声を上げながら勢い良

くイオンの懷に飛び込んだ。

その様子を見て、イオンはすぐに彼に置かれていた状況を悟った。

「なるほど、道に迷ったんですね。では僕がリグレットの部屋まで送りますよ」

イオンの撫でるような優しい声に、ミュウはコクコクと首を縦に振る。

何気にリグレットと同室のミュウ。羨ましいことこの上ない一匹だった。

「ありがとうございます。イオンさんが来なかったら、カラフルビームに目がやられて、倒れていたかもしれないです」

「あ……はは……その気持ちは僕も同感できるかもしれませんが……」

右を見ても、左を見ても、上を見ても、下を見ても、ピンクを中心に彩られたオブジェの数々。

こんな城中だけに、数時間取り残されているだけで脳に傷害を起こしかねない……それくらいトラウマになるような城の内装だった。

「ところでイオンさん……」

「はい？ 何ですか？」

「何だか汗臭いです」

物凄く失礼なことをサラリと言い放つミュウ。

物事をはっきり言う事は悪いことではないと思うのだが、ここま
で遠慮無しに言うのはさすがにどうだろう……？

それに対し、イオンは多少苦笑を交えながら……

「あはは………すみません………ちょっと運動をしていたんですよ」

今までに、これほど汗をかいているイオンなど見たことなかった
だけに、ミュウの表情も怪訝なものなる。

しかし、イオンはそれ以上強く語ろうとはしなかったので、ミュ
ウもその話題は流した。

そして、代わりにイオンは別の話題を提供してくれた。

「そういえば、ミュウに訊きたいことがあったのです」

「みゅみゅーう、何ですか？ 何ですか？」

自分が何かを質問されることなど滅多に無いことなだけに、ミュ
ウはとても嬉しそうに反応した。

「ミュウはどのようなことが原因で死を遂げてしまったのですか？」

こちらは何気に物凄くことをサラリと言ったイオン。自覚がない
所がさすがと言うか……

そして訊かれた方も平然としながら、これまた凄い言葉で返した。

「分らないですの」 ミュウは気付いたらこの世界に居たですの」

「……………はい？」

イオンが怪訝そうな顔をしていたので、ミュウは更に詳しい詳細を話した。

「みゆう……………たしかチーグルの森でスケルトンに襲われて……………急にソーサリーリングが光って……………気を失って……………それで気付いたらこの世界に居たみたいですよ」

省略箇所が多すぎるミュウの説明に、イオンは首をかしげながらも自分なりの仮説を組んでみた。

「……………えと……………つまり、スケルトンに殺されてしまった……………というわけですか？」

「たぶんそうですの」

そこは「」マークを付ける所ではないと思うのだが、何も考えていないミュウは終止笑顔のまま、その表情を崩さなかった。

「でも、ソーサリーリングが光り放ったというのは……？」

「みゆうう、それは謎ですの。でも、この世界に来てから、ソーサリーリングがパワーアップしていたですの。」

「パワーアップ？　そういえば、前に見たときとリングの形が変わっていますね」

イオンがミュウのリングをマジマジと見つめる。

多少太くなつたリング、増加している譜を刻む空洞、激しく異なる形状……まるで別物のアイテムのように見えた。

「ミュウ、そのことはちゃんと誰かに報告しましたか？」

「みゆ？　そういえば、イオンさん以外に言つた覚えがないですの。」

「そうですか。そのことはちゃんと誰かに報告しなければダメだと思えますよ。何なら僕が皆さんに伝えてきましようか？」

持ち前の優しさと親切心を向けてくれたイオン。しかし、ミュウ当人は――

「みゆう？　それってそんなに重要なことですか？」

——自分のことなのに、なぜか全く関心のないようであった。

「うん……ミュウはどう思いますか？」

「ミュウは別にそれほど重要でもない気がするですの」

——訂正。本当に全く関心のなかったようである。

「そうですか？ ……そう言われて見れば、何だか僕もそんな気がしてきました」

「みゅみゅ」 気にすることないですの」

「そうですね。ミュウがそう言うなら気にしないことにしておきますか」

「気にしないで」すの」

「気にしろ！ お前らわあああつ！」

「「わうっ！」「」

どこかほのぼのムードが漂い始めていた中、突如背後から響いた女性の怒声……リグレットだった。

「導師！ こいつのムードに完全に乗せられてどうするのですか！
？ 今ミュウが言っていたことは物凄い重要事項かも知れないのだぞ！」

「り、リグレット……何の前触れも無く登場し、適切なツッコミ……さすがですね。まさにツッコミの鏡ですよ」

「みゅうう、リグレットさん、格好良いですの」

目を光らせて尊敬の眼差しを向ける二人。この二人にはリグレットが輝いて見えているに違いない。

「たまたま通り掛かったただだ！ …… もういい！ それよりミュウ、今の話本当か？」

そう訊かれたミュウであったが、リグレットが何のことを訊いているのか分らず――

「みゅ？ イオンさんが汗臭いって話ですよ？」

「あつ、それは会議が終わった後、運動をしていたからで……」

「そこじゃない！ …… どうやったらそんなピンポイントな間違え方が出来るんだ！？」

ミュウの全くの見当違いなボケ返答、しかもイオンの天然ボケもプラスされる。

ここに最強天然コンビが誕生した。

「みゅう……じゃあ、ミュウがこの要塞のカラフルビームに目がやられていたっていう話ですよ？」

「あつ、それは僕も同感だって共感したんですよね」

「そこでもない！！」

早速放たれる最強天然コンビのヘヴィジャブ。しかし、このコンビの猛追はこれだけでは収まらなかった。

「みゆう……じゃあ、ラルゴさんとナタリアさんは親子のはずなのに、似ている箇所が皆無だっという話ですよ？」

「あつ、それについても僕は同感だっで共感していたんですよ」

「そんな話していなかっただろうがあっ……！」

三連続のツイン天然ボケ攻撃に、リグレットのツッコミも普段の倍の力を費やしていたという。

彼女が二人から訊きたかった情報を聞き出すまで、それから十分以上掛かったのだった。

翌朝、一同は再び謁見の間に召集をかけられていた

「……」

ミュウ、リグレット、イオン、ラルゴの四人は、謁見の間に通された瞬間、硬直状態に陥った。

増えている……一日見ない内に、謁見の間にとんでもないオブリエが増えている……

それを見た四人は、まさに『開いた口が塞がらない』状態に陥っ

た。しかも誰一人、バインド状態から抜け出せずにいる。

そこに奥室からシルヴィアの姿が現れる。

「おっはよー、……あれ？ みんなどうしたの？ 面白い顔しちやって……」

「「硬直しているんだっ！！」」

すかさず、バインド状態から脱したリグレットとラルゴの二人が、鋭いツツコミを入れた。

「シルヴィアよ……なんだこれは！？」

「何って……昨日徹夜で職人に作らせた『ミュウちゃん石造』だけど？」

——それが何か？ みたいなリアクションを返すシルヴィアに、リグレットとラルゴがツツコミの猛追をかける。

「では、この大きさはなんだ！？」

「ミュウちゃんの等身から計算すると、約30倍、すごいでしょ？」

「石造を作るのは勝手だが、謁見の間に置くなあぁっ！！」

「別にいいじゃない。可愛いんだし」

謁見の間のド真ん中に聳える巨大オブジェ、その名も『30倍ミ

ユウ石造』。

はつきりいつて、邪魔物以外何物にもなっていない。

現に、王座に座っているはずのシルヴィアの姿が、『30倍ミニウ石造』のせいで視界が遮られて、完全に隠れてしまっていたりする。

「それに、今から外へ運び出すにしても結構時間掛かるよ？ 朝の会議を六時間ほど遅らせても良いなら動かすけどお……」

「六時間……もういい！ このまま会議を始めるぞ！」

「はあい、えつとお、朝の会議の議題は、これからの行動についてのお話です」

『30倍ミニウ石造』を間に挟んでの朝の会議……イマイチ緊張感が伝わってこないのは言うまでもなかった。

モーヴは立国されてからまだ日が浅い。なので会議室に相当する場所が無く、全ての会議は謁見の間で行われる。

そう——どんな重要な会議でもこの場所では開けないのだ。

……女王が完全私物化した、この場所では……無意味にでかい

チーグル石造が聳え立っている、この部屋でしか……

「えっとね。昨日のミュウちゃんのリングに関する報告を受けて、ラルゴと一緒に考えたんだけど……皆にはミュウちゃんのソーサリーリングを完璧なものにして欲しいの」

仮定よりも先に結論を述べるシルヴィア。

視界が遮られている為、何だか『30倍ミュウ石造』が女声で喋っているように見えて仕方が無い。

「リングを完璧に？　どういうことだ？」

そう聞き返すリグレットだったが、やはり視界が遮られている為、『30倍ミュウ石造』に質問をしている気分だった。

「ミュウちゃんのリングって敵側に狙われているんだよね？　その理由をあたしなりに考えたんだけど、敵はリングの力に恐れているからじゃないかな、なんて思うんだよね」

シルヴィアのヌルイ言葉使用と、目の前に聳える『30倍ミュウ石造』が、四人の聴覚と視覚を同時に刺激されているような気がした。

別に誰が何をしたわけでもないのだが、妙に腹立たしく感じられるのは、やはり気のせいではない。

「だからね、皆にはリングに空いている残り二つの空洞を埋めてきて欲しいんだ。えとお、見る限り第二音素から第五音素まで揃っているみたいだから……たぶん残り二つは、第一音素と第六音素が埋

まると思っただよね」

元々三つしか無かったリングの能力だが、アイスリザードとの戦闘後に手に入れた第四音素結晶体が空洞の一つを埋めた。

そのことから、少々異質な第七音素は除外して考えると、残りはシルヴィアが言った二つの音素結晶体が埋め込まれることだろう。

それにしても会議になると、急に博識な一面を見せるシルヴィア……だが、残念なことに、彼女のセリフはやはり『30倍ミュウ石造』が喋っているように見えて仕方が無かった。

「結晶体がありそうな場所についてはすでに調査済みだから、あとは現地に行くだけ」 あっ、でも途中で敵の刺客にリングを奪われちゃったら意味ないから、リグレット達にはその護衛をして欲しいってわけ」

なんだかんだ言っで、やることはちゃんとしていたらしい。それも仕事が早い。さすが『30倍ミュウ石造』を一日にして作り上げた部下だけのことはある。

「しかし、リングを完成させるのは良いのだが、それはこちらにとつてのメリットはあるのか？ もしかしたら敵は完成したリングを欲している可能性だってあるのだぞ？」

リグレットの鋭い指摘に、『30倍ミュウ石造』は……じゃなくて、シルヴィアは――

「まっ、その時はその時ってことで」 それにリングを完成させるってことは、『いざ決戦っ！』って状況になった時、こちらが有利

になることは間違いないでしょ？ 少なくとも、今の未完成のリングを所持しているよりは、ずっとメリットはあるんじゃないかなあ？」

シルヴィアには意外にも鋭い意見を返してきた。

もし視界が遮られていなかったら、初めて女王っぽく見えていたことだろう。

「なるほど……な。わかった、では我々は第一音素結晶体と第六音素結晶体の搜索にあたる」

「うん、お願いね」

話が締めくくられ、ここで会議は一段落付いたようである。今日の会議もこれにて解散……という雰囲気になりかけた……その時――

「……その前に……」

「……ああ、我々にはやるべきことがあるみたいだな……」

なぜカリグレットとラルゴが異様な雰囲気醸し出す。

そして――

「インリイノクタンっ！！！！！！！！」

「獅子戦吼っ！！！！！！！！」

ドゴガアアアアアアアンっ！！！！

リグレットの地属性譜術が『30倍ミュウ石造』の腹に大穴をあけ、ラルゴの大鎌を使った技が『30倍ミュウ石造』の頭を粉々に砕いた。

「ああああっ！！ 『30倍ミュウちゃん石造』が木っ端微塵にいいっ！！！」

ようやく姿が見えるようになったシルヴィアが、半泣き状態で目の前の残骸を見て嘆いていた。

「……皆、準備が出来たら外門に集合だ」

「……ああ、ではまた落ち合おう」

一人あたふたしているシルヴィアを放っておいて、ミュウ達一同は早々に謁見の間から出て行った。

しかし、徹夜してまで創作に加わった職人達は、なぜか嬉しそうに微笑を浮かべていたのであった。

第24話 その大きさ、30倍（後書き）

見てくれてありがとうございます。

さて、新たな仲間も加わり、ようやく盛り上がってきました。
リグレットと二人旅をずっと書いているのもよかったけれど、やは
り仲間がたくさんいてこそそのテイルズだと思いますからね。

第25話 骨、再び（前書き）

前回の更新でやってしまったかな？

お気に入り数が一つ減り、評価も下がってしまいましたw

投稿しているとそういった小さなことにも過敏になってしまいます。
だけどもげずに頑張りますともっ！

第25話 骨、再び

「はぁ…………はぁ…………はぁ…………はぁ…………」

足を棒のようにふらつかせ、アザゼルは疲れ切った様子を見せながら、激しく息を切らしていた。

「や、やつと帰ってこれた……ぜ」

やつとの思いで帰還したアザゼルは、疲れ切った身体に休息を求め、その場で大の字に転がった。

ふみつ、ぐしゃ！

「おぶはぁっ！」

——そして、何者かに思いつきり踏まれた。

「……………」

「…………っ、おいっ！ 人を踏んどいて黙っていくなやつ！」

アザゼルは悶絶しながらも、声を大にして踏んづけた人物に怒鳴り散らした。

お前は人じゃなくてデーモンだろうがっ！ というツツコミが、どこからも返って来ないのが何となく虚しい。

「…………アザゼルか。帰っていたのか」

「ああ、帰っていたんだよっ！」

怒気含み、メンチを効かせながら鋭い眼光で男を睨むアザゼル。

「……おかえり、とでも言えればいいのか？」

「俺を踏んだことを謝れって言ってるんだよっ……！」

せつかくガンを飛ばしたというのに、男のボケ回答によりそれが台無しになった。

アザゼルの踏んづけた男は、しばらく無表情のままアザゼルの顔をじゅつと見つめた。

何か考え事をしているかのようにも見えれば、ただぼくとしているだけのようにも見える。

はつきり言えば何を考えているのか全く読めない男だった。

「……お前、そんな所で寝ていたらそこを通行する者の迷惑だぞ」

「俺が悪いのかよ!？」

「……お前が悪いのдар？」

「……まあ俺も悪かったけど……あぁっ！　もういい！　さっさとどっかいけ、アモン！」

アモンと呼ばれた男はアザゼルに一蹴されると、そのまま何も言わずに早々と立ち去って行った。

そして再びアザゼルはその場に倒れこむように仰向けで寝転んだ。

ふみっ！　ぐしゃっ！

「おぶふぁっ！！」

——そして、再び何者かに踏まれるアザゼル。

「くそっ！ 今度は誰だよ！？」

「……私だが？」

「またてめえかよ！ アモン！！」

「……お前、そんな所で寝ていたらそこを通行する者の迷惑だぞ」

「それ、さっき訊いたわっ！！」

どうやらこのアモンと言う男、アザゼル以上のポケ能力を持っているようである。

その証拠に、あのアザゼルが完全にツツコミに回っている。

「まったく、お前さっきからこんなところをウロウロして何をしてやるんだ？」

「……いや、私のフレスベルグをずっと探しているのだが、城内のどこを探しても見つからないのだ。どうやら誰かが勝手に乗っかってしまったらしいな」

「あつ、わりい。それ俺だわ。勝手にあの鳥借りていったぞ」

言葉では謝っているだが、何の悪びれる様子を見せていないアザゼル。

「……お前だったのか。まあ別にいいのだが……それで、私のフレスベルグは今どこにいる？」

「野生に返った」

「……………」

ふみっ、ぐしゃっ！　グリグリっ、ガゴンッ！！

「ぐわああああっ！　て、てめえ……今のはわざと……って、オイ、ちよつと待て……その手に持っている斧はヤバ……待て、本当に待てええっつー！」

ドゲゴンっ！！

アザゼルの弁明を求める声も虚しく、アモンの斧は容赦なく彼のコメカミに命中した。

そのまま目を回しながら地に伏せるアザゼル。全てはこの男の自業自得な為、誰も彼を哀れむ者はいなかったという。

シルヴィアの調べによると、第一音素結晶体は『魔竜の洞窟』、第六音素結晶体は『サブドゥア遺跡』という場所にあるらしい。（どうやって調べたのかは謎だが……）

『魔竜の洞窟』は海を越えなければ行くことは出来ないの、先

に近場である『サブドウア遺跡』の方へ向かうことにした。

サブドウア遺跡はモーヴより北にある密林の中にあるらしく、現在、一行は雑草を掻き分けながら、生い茂る草の上を悪戦苦闘しながら歩いていた。

……ミユウだけはいつもの通り、リグレットの頭の上でくつろぎながら楽をしていたが……

まあ、実際苦勞しているのは、一番前を歩きながら道を作ってくれているラルゴだけかもしれない。

「導師、大丈夫か？ 疲れたりしたら遠慮なく言ってくれ」

ミユウ一行の中には、リグレット、ラルゴの他にイオンも同行していた。

危険な旅になるから、彼はモーヴに残っているべきだとリグレットは忠告していたのだが、本人の強い志願の元、同行することになったのだ。

ラルゴは『本人の意志を尊重してやれ』となぜか肯定的な意見を示し、ミユウも『イオンさんとまた旅が出来るですの』と何も考えてない意見で賛同した。

「大丈夫。この程度で疲れるほどヤワではありませんよ」

本当に余裕そうないオン。昔ルーク達と旅をしていた時はすぐに疲れを申していたと言うのに……

「それにしてもリグレットに心配されるなんて……少し見ない内に随分優しくなりましたね」

「なっ……！ 私は別にそんなつもりでは……っ」

何気なく向けた気遣いが、話の流れをおかしな方向に傾かせる根源となってしまう、リグレットは自滅の道を辿ることとなる。

「そういえば確かに丸くなったな、リグレットよ。昔は頭にチーグルを乗せて黙っていられる奴ではなかったであろう?」

「こ、これは……ミュウの奴が勝手にっ!」

必死に言い訳を重ねるリグレット。しかし、ラルゴの加担に更に追い討ちを加えるように、ミュウがトドメの一言を放った。

「リグレットさんは最初から優しかったですのっ」

「……………もういい、何とでも言ってくれ……………」

ついに諦めの表情を見せたリグレット。

三人の笑い声は、密林の中にほのぼのとした雰囲気を感じさせるように騒ぎ立った。

ガサッ!

「……っ!?!」

そんなほのぼののしさを打ち消すように、突然前方の草むらが揺れた。

「何か……いるな……………」

ラルゴの呟きが三人に緊張感を与えた。

リグレットは銃を構え、ミュウとイオンは揺れた辺りの草むらを凝視している。

そして、草むらの奥で身を潜めていた影が——姿を現した。

「みゅううううっ！！　で……で……で……出たですのっ！！」

脅威の表情で大きな悲鳴を上げるミュウ。嫌な思い出が甦ったのか、リグレットの頭の上でブルブル震え始めた。

そこに現れたのは、ミュウが最も苦手とする骸骨魔物——死霊スケルトン。

死霊スケルトン——前にも説明したが、魔物の中でもかなりの低レベルな位置に置かれている存在である。

現にミュウ以外の三人は、表情一つ変えず冷静に対応していた。

「ふんっ。何かと思えば、ただの雑魚ではないか」

そう言いながらも臨戦態勢を解かない所を見ると、先のアイスリガード戦で油断は命取りだということを学んだからであろう。

「ミュウ、丁度良い機会だ。新しい能力を試してみたらどうだ？」

リグレットは頭の上の住人に一つの提案を与えるが、当人はその場でブルブル震えてしまっており、完全に腰が引けている様子だっ

た。

「嫌ですの、嫌ですの、いゝやゝでゝすゝのゝっ!! リグレット
さんが何と言おうと、スケルトンだけは、いゝゝやゝでゝすゝ
のゝゝっ!!!!」

物凄い嫌悪っぷりで強く断るミュウ。その脅え方は異常な程だった。

よほど、あのチーグルの森での出来事がトラウマになっているの
だろう。

「ったく、お前ほどの力の持ち主が今さら怖がる相手でもないだろ
うに……」

「あの気持ち悪い白骨は、きっと神様が作った失敗作ですの! 同
じ世界に存在してはいけない骨くずですの! 骨髓バンクも笑って
入場お断りですの!!」

本当に異常な程の嫌悪を、言葉にして爆発させるミュウ。

その姿すらも見たくないのか、完全に閉眼状態へと移行を示して
いた。

「仕方ないな……ラルゴ、行つてこい」

「そこはお前が行く所ではないのか!？」

「雑魚相手に無駄弾を使いたくない。私の武器は消耗品なのだ」

そう言いながら、結局銃を腰にしまつりグレット。もう完全に戦
意は失せている様子だ。

「（その割にはお前の銃は弾切れしないではないか……）」

リグレットの『雑魚が相手だとやる気が無くなる病』が炸裂し、その矛先が完全にラルゴに向けられてしまった。

しかも一度銃をしまうと、もう融通が効かなくなってしまう。

こうなると彼女はただのワガママ女と化してしまう所が、リグレットの大きな短所であった。

そして、ラルゴもついに諦めがついたのか、仕方なくスケルトンと対峙して大鎌を構えるが、ここで意外な人物が前に出てきて、彼の動きを制した。

「この場合は僕が行きましょう。ラルゴもリグレットと共に下がっていてください」

前に出てきたのはなんとイオンだった。しかもその手には、いつの間にか紺色の手甲が付けられていた。

「導師がつ！？」

イオンの臨戦態勢に、当然ながらリグレットが驚きを示す。

「大丈夫ですよ。勝算が無いのなら、最初から前へ出たりはしません。でも、今の僕ならば……戦えます！！」

力強い言葉と共に、構えの型を取るイオン。

その瞳は今まで見たこともないくらい力強く、それでいて凜としていた。

「そうか。ではこの場は導師に任せるとしよう」

ラルゴも妙に落ち着きを放ちながら、あっさりこの場をイオンに託した。

二人は何かを諭すように視線を合わせると、小さくふつと笑い合った。

そして、イオンはそのまま敵の方へ視線を移し、高らかに戦闘開始の言葉を告げた。

「行きますよ、死霊スケルトン……僕が相手です!!」

まず先手を打ち、先に動いたのはイオンだった。

リグレットのように常識外れのスピードはないが、それでも疾い疾風の如く駆けるその姿は、少なくとも一時前のイオンからは考えられない動きだった。

「連撃掌っ!!」

一気に前方へ飛翔したイオンが、その勢いを利用しつつ渾身の拳技を繰り出した。

敵は避ける間もなく、イオンの掌低がスケルトンの右肩に命中した。

その先制攻撃だけで、スケルトンはあっという間に右腕を吹き飛ばされてしまう。

物理攻撃には多少の耐性があるはずのスケルトン……しかし、呆気なくその右腕を失った。

それはイオンの技の威力が、敵の物理耐性を上回る威力を誇っていたことを意味していた。

「みゅううつ！ イオンさん、強いですよ〜！」

「パワー、スピード……共に一流レベルだな……一体どうなっている？」

以前のイオンを知っている二人からしてみたら、目の前に広がる戦いの光景は信じられないものである。

その疑問には、二人の隣で傍観していたラルゴが答えを返した。

「導師はアリエッタ失踪を後に自分の弱さを悔やみ、それ以後毎日修行の日々に明け暮れていたらしい」

ラルゴが語りを始めている最中にも、イオンは次なる一手を加えていた。

「魔神拳っ！」

追い討ちに放った地を這う衝撃派がスケルトンの足元に命中し、今度はその右足を吹き飛ばした。

「俺も導師に戦闘の師匠を頼まれ戦闘の極意などを教えたが、もうその頃には基礎体力や戦闘スタイルは完成されていた」

つまり、たった二ヶ月の特訓でアレだけの成果を上げられたというくらいらしい。

それだけ、自分の弱さを悔やみ、自分を変えたいという意思の表れがとても強かったのだろう。

「だから、今の導師はスケルトンごときに負けるはずはない」

スケルトンは、完全に相手に良い様に打ち遣られるのみ……反撃したくてもイオンのスピードに着いていけないのが現状なのだろう。それだけ今のイオンとスケルトンには、大きな戦力差が存在しているのだった。

「トドメですっ!!」

そう豪語すると、イオンは姿勢を低くながら一気に間合いを詰める。

「噴竜撃っ!!」

低い位置からの打ち上げられた拳がスケルトンの胸をえぐり、その勢いを保ったままヤツの頭を上空に吹き飛ばした。

その瞬間、スケルトンの身体が完全に動かなり、同時にイオンの勝利が決まった。

「今の導師に必要なのは、おそらく経験だけであろう。戦闘の回数を重ねるごとに成長の様子が目に見えている。これはもう天性の素質と言っても過言ではないだろうな」

「末恐ろしい人だな……」

イオンの計り知れない素質と可能性に、ラルゴとリグレットは微笑ましく口元を緩ませた。

そして圧勝を遂げたイオンは、遙か遠くを見つめ思想に老けていた。

「（この程度で満足してはいけない。僕はもっともっと強くならなければならんだ。そして……）」

ゴンッ！！

「ふみゅっ！」

イオンの後方で衝撃音と共にミュウの悲鳴が聞こえた。
振り向いてみると、頭を抑えて痛がっている彼の姿が在った。
どうやら落下してきたスケルトンの頭骨が、丁度ミュウの頭の上に落ちてきてしまったようである。

「い……いだいですの……」

関係ない所でかなりのミラクル起こしてくれたミュウ。
見事なオチ担当っぷりであった。

追記だが、この日を境にミュウのスケルトン嫌いは更に深刻になったという。

第25話 骨、再び（後書き）

見てくれてありがとうございます。

またまた書き方を少し変えてみました。行間を少し詰めただけですが。

初めてランキング作品を観させてもらったのですが、トップ10に入っているすべての作品がこのように行間を詰めた書き方だったので、僕もそれに習ってみました。

元の書き方に戻ってくれっ！ みたいな意見があつたらすぐに戻します。

もしくはこのままの書き方がいいよーとか、単純に小説の感想でもいいので意見を待っています。

【番外編】 とある兄妹の物語 ？（前書き）

今回は番外編ということだめちやくちや短いです。
さすがに短すぎるので本日は2話分更新します。

【番外編】 とある兄妹の物語 ？

ふと気が付くと、僕は一人だった。

おかしい……だってそうだろ？ 他の子供達は仲間と一緒に遊んでいるというのに、僕はずっとこの暗い場所の中に居る。

だから僕には仲間がいない。

友達もいない。

親すらも……いない。

じゃあ、僕は何？ 何で『僕』という存在がこの世に残っているの？

そもそも、ここはどこだろう？

疑問が疑問を呼び、それが連鎖となって僕の頭の中を葛藤している。

……頭が痛い。もう、何かを考えるのは止めよう。

僕はこの暗い家の中を散歩することにした。

外へは出ない。

出たことがない。

そもそも外への出方を知らない。

この暗い家はそれだけ大きい。

——ヒック……えくん……うえっ……

声がした。泣き声だ。どこからだろう？

僕はその泣き声に導かれるように、ふらふらと声のする方に足を運ばせる。

この部屋だ。この部屋から泣き声がする。

高い声。女の人か……それとも子供か……

他人に関わりを持つのは嫌いだ。でも一人が好きなのではない。

怖いのだ。僕は人が怖い。

でも、この部屋の奥から聞こえる声からは、不思議と『怖い』という感覚は受けなかった。

だから僕は——この部屋のドアに手を掛け、ゆっくりと戸を開いた。

【番外編】 とある兄妹の物語 ？（後書き）

見てくれてありがとうございます。

これからちよくちよく番外編ということでこの物語が登場します。
本編と関わりを持つのは随分後のことですが、一読しておいてもら
って損はありません。

第26話 畏（前書き）

本日2回目の更新でございます。
良かったら前回の番外編も見てくださいね。

第26話 罾

「くそっ！ アモンの奴、本気で踏んづけやがって……俺が何をしたっつーの！」

自分で自分の治療をしながらブツブツと不平を呟くアザゼル。アザゼルはそんなことを愚痴っているが、実際に彼がしたことを例にあげてみよう。

例1：他人のフレスベルグを勝手に連れ出した。

例2：そのフレスベルグを野生に逃がした。

例3：本人は謝るところか、悪いことをした自覚すらない。

見事な強盗罪成立、しかも管理ミスに無謝罪……アモンが怒るのも当然だった。

「まったく、痛えなあ……なんで一人も回復術を使える奴が屋敷に残っている——」

——お……いちゃ……？——

「……っと、念話か。この声はアイツだな……」

突然の通話に、アザゼルはいったん治療を中断し、目を閉じてその相手の対話に集中した。

——何だよ？ こっちは今忙し……——

——リングの所在がハッキリしたの——

.....

.....

.....

「おい、アモン。お前のフレスベルグをもう一匹貸せ！」

突然、何処からアモンの前に現れたアザゼル。

「.....私の持っているフレスベルグはお前が逃がした一匹だけだ」

「じゃあ、他の鳥を貸せ」

「.....貴様は私を鳥飼育員が何かと勘違いしていないか？」

物凄く理不尽な要求を申し立てるアザゼル。

だが、彼の人の神経を逆撫でる発言に対しても、アモンは平静な表情を崩さなかった

「とにかくデカくて素早い鳥を出しやがれ！ 早くしねえと別の奴に手柄がとられちまうじゃねえか！」

なぜか苛立っているアザゼル。ポケキャラのくせに気性の荒い男であつた。

「.....分かった.....だが私も同行する。また貴様に預けたら今度も逃がされてしまいそうだ」

「ちっ、勝手にしろっ！」

アザゼルはつまらなそうに顔を顰めながら、アモンの後ろをしばらく着いて行く。

行き着いた場所は中庭。そこにはアザゼル数匹のロック鳥が上空を遊泳していた。

アモンがパチンツと指を鳴らすと、その内の一匹が真っ直ぐに彼の目の前に降りてきた。

「では早速、目的地の『サブドウア遺跡』へ飛ぶでしょう」

「……って、てめえ！　なんで俺が行こうとしていた場所を知ってるんだよ！？」

「……暇だったので、先ほどの念話をこっそり訊かせて貰った」

「暇潰しで盗聴かよっ！！」

堂々と強盗罪を重ねたアザセルに、堂々と盗聴罪を暴露するアモン。

五十歩百歩とは、この二人の為に存在する言葉なのかもしれない。

奥へ進めば進むほど雑草の荒れ具合が酷くなってゆく。

密林の深部はもう道と呼べる道は存在しなくなっていた。

一面に生茂る雑草はラルゴの肩の辺りまで伸びている。

長身のリグレットはまだ辛うじて顔が抜け出ていたが、イオンに
関しては完全にその姿が雑草の中に隠れきっていた。

そして、襲ってくる魔物達も密林の深部に進むほど強くなってゆ
く気がした。

まあ、襲ってきた全ての魔物は、イオンが一人であつと言う間に
退治してしまっていたが……

そんな鬱陶しい雑草の中をずっと進んでゆくと、光の漏れが見え、
そこを抜けると突然目の前が開けた。

どうやらここが雑草林の終着点らしい。

「やっと到着したらしいな」

突然開けた視界の先に、遺跡の入り口らしき鉄門が見えていた。

一行は鉄門の側に歩み寄り、そこに手を掛けてみた。

「閉まっていますね……」

イオンが鉄門を押したり引いたりしているが、ビクともしない。

まだ入り口なのに、硬く飛ばされた外門がいきなり一同の行く手
を阻んでいた。

「仕方ないな。ここは少々荒業になるが、門を破壊して通ろう」

リグレットが出した打開案に、一同は首を縦に振り賛同する。

「他に入り口が無いのでは仕方ないであろうな……では、やるか」

ラルゴは黙想するように目を閉じると、『はあああっ！』と声を
上げながら力を溜める。

すると、ラルゴの筋肉が徐々に膨れ上がってゆく。その変化は目に見えるほどであった。

そして、筋肉の膨れが最高潮に達すると、彼の目がバツと開き、鋭い眼光を覗かせた。

その鋭い眼光の先に見えるのは、目の前に大きく広がる鉄門――
のはずだったのだが……自分と鉄門の間に、なぜか身体の色を土色
に変色させているミュウの姿が在った。

「あた~~~~~つく!!!!」

ドガッシャ~~~~~ン

つ
!
!

ミュウのソーサリーリング第二の力、『ミュウアタック』が遺跡の入り口を塞いでいた鉄門を見事に破壊した。

「みゅう……あ、頭がガンガン……するですの……」

超絶な破壊力を持つアタックでも、相手が鉄門とくれば、ミュウに跳ね返ってくる反動もまた大きい。

反動でフラフラしているミュウに、リグレットは容赦無い言葉を言い放つ。

「ミュウ、ここはアタックではなくても、炎で鉄門を溶かせれば良かったのではないか？」

「みゅううつ！ リグレットさんが『門を破壊しろ』って言ったのですのっ！ なんで後になってそんなこと言うのですのっ！？」

「すまん、後になって思いついたのだ……まあ、どっちにしる外門

は破壊できたんだ。さつさと入って音素結晶体を探すぞ」

「……リグレットさん、時々意地悪になるのです」

さつさと遺跡内に入っていったリグレットの後を、散々愚痴りながら着いて行くミュウ。

イオンはそのミュウアタックの破壊力に啞然しながら、ただ呆然と立ち竦んでいた。

その後ろで役割を取られたラルゴは、膨れ上がってしまった筋肉をそのままゆっくりシヨボシヨボと虚しく収縮させていたのであった。

遺跡の中は一步足を踏み入れただけで背筋が怖気立ってしまうような、そんな怖々しさが漂う内層の光景だった。

その恐ろしさに乗乗するかのよう、浮遊霊がウヨウヨしていたり、赤や青の色鮮やかな靈魂が遠慮無しに彷徨っている。

これぞまさしく、リアルお化け屋敷状態だった。

怨霊達は襲ってくる気配はない。というより、何だか向こうがミュウ達を怖がっているように見えた。

「（ぶるぶる）……ここここ……怖すぎですのっ！！」

ミュウは当然ながら、恐怖で身体を震わせている。

「でも向こうもお前を見て怖がっているみたいだぞ」

「あはは、よほど先ほどのミュウアタックに驚いたのじゃないね。まあ、驚いたのは僕も同じですけど……」

「……………」

極度の恐怖感に震えるミュウに対し、逆にリグレットやイオンは全く怖がっている様子を見せていない。

ラルゴに関しては、先ほどの入り口で自分の役割を横取りされたことに拘ねているのか、終止無口だった。

カチッ

ふと、石床を歩く音の他に、何かの機会音が鳴った気がした。

「「うおっ！！」」

そして、不意に背後でラルゴとリグレットが驚声を上げた。慌てて振り返るミュウとイオン。だが、すでにそこには二人の姿は消えていた。

「リグレット！？　ラルゴ！？　いったいどこに……っ！？」

「みゆううつ！　ふ、二人が消えたのですのー！！」

突然の事態にオロオロする二人。特に臆病なミュウは無意味にウロウロ動き回っている。

……それが無意味な動きが更なる波乱を呼び起こすことになる。

コチッ

またも機会音が鳴り響く。しかし先ほど聴こえた機会音とは別種の音色だった。

そしてミュウとイオンは、それらの機会音がこの遺跡に仕掛けられている罠を発動させるスイッチ音であつたとすぐ気付くことになる。

! !

「な、なんか……不吉な音がするのです……」

「そ、そうですね……例えるなら……こちらに押し寄せてくる水流のような……」

ザババ
アアア
アアア
アアア
アアア
アアア
アアア
アアア
アアア
アアア
アツ！！

こちらに押し寄せてきた水流は容赦無く二人を飲み込み、ミュウとイオンは抵抗する間もなく水の流れる方向へ超スピードで流されていったのであった。

「くっ……何が起こつたのだ？」

リグレットは現状確かめるが如く、辺りをキョロキョロ見渡しなから状況を確かめた。

「……どうやら落とし穴の罠を作動させてしまったらしいな」

その質問に、現状をいち早く察したラルゴが淡々と答えた。

突如、歩いていた床が開き、いきなり地下の大広間に落とされた二人。

突然な出来事に対しても、見事に着地を決めてしまっているところが一瞬に二人らしかった。

「ミュウや導師とはぐれてしまったか。よりにもよって我らの方が罠に掛かってしまうとは……」

「罠を作動させたのは、お前が連れていたチーグルのようだったがな」

ラルゴの言葉に、リグレットは額を抑えながらため息をつく。

——なぜ他人が作動させたはずなのに、罠に掛かるのは自分達なんだ……リグレットはそんな内心が伺えるような表情を覗かせていた。

「まあ、経緯はどうでもいい。とにかくミュウ達と合流することを目指そう……でも、その前に——」

「——ああ、今はここを『切り抜ける』ことだけを考えるとしよう」

その言葉を基軸に、リグレットは二丁の譜業銃を、ラルゴは大鎌を構え、それぞれ戦闘体制に入った。

リグレット達はそれぞれ背を預け合う形を取り、それぞれ敵愾心を醸し出しながら鋭い眼光を真っ直ぐ向ける。

二人がそれぞれ向けた視線の先……そこにはリグレット達を取り囲むように武器を構える大群のアンデット達の姿が在った。

「……………ぷはぁっ！」

凄まじい勢いで濁流に飲みこまれたミュウとイオン。

ここでようやく水流の終着点に着いたらしく、イオンは何とか水面に首だけ出し、息を整えた。

「……………（ぶくぶくぶくぶくぶく）」

そしてイオンとは対極的に、必死に水面に顔を出そうとするが、徐々に沈んで行くミュウ。

前に溺れた時に浮き輪変わりになっていたソーサリーリングは、主が不在の状態のまま虚しくプカンと水面に浮かんでいた。

「うわわわっ！ み、ミュウっ！！」

完全に溺れているミュウの姿を見つけ、慌てて彼の救出へ向かうイオン。

何気にこの世界に来てから、水難が絶えないミュウであった。

第26話 毘（後書き）

見てくれてありがとうございます！

そろそろこの辺りで一度説明回を設けたほうがいいかもしれませんね。

世界観の確認とかオリジナルキャラの設定とか何の目的で今サブド
ウア遺跡にいるのかとか（↑ちなみにソーサリーリング強化の為で
す）

ただ未だ登場していない主要キャラも少しだけいるんですよ。

彼らの登場の後に説明回を設けるか……悩みどころです。

【番外編】 とある兄妹の物語 ？（前書き）

今回も番外編からの更新です。

またもや短いので後でもう一話分投稿します。

【番外編】 とある兄妹の物語 ？

開いたドアの先——そこにはごんまりとした小さな部屋の風景が在った。

電気もない、机もない、布団もない……あるのは鉄格子に括られた小窓のみだ。

その四畳あるかないかくらいの小さすぎる部屋の中心に、膝で顔を抱えながらポツンと座っている一人の女の子がいた。

年頃は、見た目からして自分とそんなに変わらないと思われる女の子。

顔を俯かせて抱え込んでしまっているため、その表情は伺えない。

彼女が泣き声の主だろうか……？

「……だれ？」

僕が尋ねるよりも先に、女の子の方が先に口を開いた。

女の子らしい高く細い声。でもその声にはなぜか生氣を感じられなかった。

「この部屋から……泣き声が……したから……」

僕は戸惑いを隠し、言葉を詰まらせながらもゆっくりと答えた。

ああ……そういえばこんな風に誰かと会話するなんて何年ぶりだろう……

もしかしたら生まれて初めて言葉を口に出したのではないだろうか？

独り言を漏らすことも、動作に掛け声を上げることもしなかったはずだったのに……

「泣き声がしたから……なに？」

ドスが効いた声の短調。その奥に隠されている心情は……拒絶。

「別に……」

——別に……

正直な感想だ。泣き声がしたから何となく入ってきただけ……中に入って何がしたいとか、何がしたかったとか、そんなこと全く考えていない。

そう思ったら、この場に居る意味も無くなって来た。今、この場に立っていること事態、無駄なことだ。

僕は静かに背を向け、黙ってその場を去ることにした。

「……待つて」

ドアノブに手を置いた瞬間、女の子の声が僕の動きを制した。

僕は無言のまま、首だけを動かし、女の子の方に顔を向けた、

すると、先ほどまで俯かせていた顔は上げられており、真っ直ぐとしたブルーの瞳が僕の姿を捉えていた。

「あたしのこと……いじめない？」

一瞬、女の子が何を言っているのか分からなかった。

でも頬に迸る一筋の傷跡や、手の先から腕の関節までに見える多数の傷口から流れる血の後をみて、僕はその意味を察した。

「僕はお前をいじめる理由なんてない」

強い言葉でキツパリ言い放つ。言葉の奥に偽りは無いことを諭すかのように……

「じゃあ……友達になってくれる？」

一瞬、僕は自分の耳を疑った。

彼女は僕を拒絶していたのではなかったのか……？

「僕がお前の友達になる理由も……ない」

そう、僕は他人と関わりを持つのは嫌いだ。怖いから嫌いだ。

特別に怖さを感じないこの子が相手でも、関わりを持ちたいとは

願わない。

そんな僕的心情を全く悟っていないこの女の子。

そして彼女は、次にとんでもない言葉を投げてきた。

「……じゃあ、あたしのお兄ちゃんになって？」

【番外編】 とある兄妹の物語 ？（後書き）

見てくれてありがとうございます。
もうちょっと本編との間を取って番外編入れてもよかったかなあ。

第27話 サブドゥア（前書き）

本日2回目の更新でございます。

最近ペース早すぎる気がしてきました（汗

第27話 サブドゥア

「ミュウ!? 大丈夫ですか!? ミュウっ!!」

水没しかけていたミュウの救出に成功したイオン。

だが救い上げたミュウ当人は目を回しながら気絶していた。

必死にその名前を呼びかけるが、ミュウは一向に目を覚まさない。

「仕方ありません。こういう場合は、やはりアレですね……」

何かの決意の表明を見せるイオンは、まずミュウの身体を仰向けに直した。

そしてミュウの後ろ首元を持ち上げ、軌道を確保する。

——最後にミュウの腹部に狙いを定めれば準備完了だ。

イオンは、そのまま仰向けに寝かせているミュウから少し距離を取ると、足並みを整え、構えを取る。

そして――

「輪舞旋風っ!」

ひゅっ……ドシンッ!!

見事、イオンの後ろ回し蹴りが水が多く溜まっていると思われるミュウの腹部ド真ん中に命中した。

「いじぶひゅふぁっ!」

腹部を蹴られたミュウは、その衝撃でお腹に溜め込んだ水が一気に逆流して、その小さな口から大量の水が吐き出される。

「はぁ……はぁ……な、何事ですよ!？」

半ば強引に意識を戻されたミュウが、辺りをキョロキョロと見渡しながらパニック状態に陥る。

「あつ、目を覚ましましたね。良かったです!」

——目を覚まさせたのはアンタだろうが、とツツコミを返す人も居なく、イオンは極自然な表情でミュウに言葉を掛けた。

さすがに『輪舞旋風で腹を叩き、水を吐かせて蘇生させました』とは言えない。ミュウ相手でもさすがにそれは気が引けるイオンだった。

「みゅう。何だかお腹がズキズキしますの……」

「……………」

でも、バレるのは時間の問題かもしれない……そう思い始めるイオンであつた。

大群のアンデット達と対峙する二人は、ラルゴを前衛に、リグレ

ットは中衛よりやや下がり気味のポジションで戦いに応じていた。

「エクレールラルム！！」

十字型の布陣から噴出される金色の光が、容赦無くスケルトンやデザコイルの身体を溶かす。

だが、ビッグバットやバジリスクといった飛行系の魔物には範囲が及ばず、それら飛行能力の持つ魔物達はリグレットに攻撃の牙を向けてきた。

しかし、そこに黒衣の巨体が立ちふさがる。

「炎牙爆碎吼！！」

敵はラルゴの黒鎌により爆碎され、身体を溶解させる爆裂音が地下大広間に轟いた。

他に近づいてきた敵は、リグレットの銃が、ラルゴの大鎌の餌食になり地に落ちる。

リグレットの譜術をかわしても、ラルゴの大鎌が容赦無くその身体を切り裂く。

逆にラルゴの鎌技をかわせても、リグレットの譜術の餌食になる。

以前、ロニール雪山にてルーク達と戦った時と同じ戦法だ。

しかもアンデット達はスピードも跳躍力もないので、ラルゴを飛び越えてリグレットを攻撃……なんて器用な真似は出来ない。

長い付き合いからか、息はぴったりの二人。

敵を全滅させるのは、おそらく時間の問題であろつ。

カチッ

「みゆうううっ！！ 地面から槍がつっ！？」

カチッ

「うわわわっ！ 壁から炎がつっ！？」

カチッ

「みゆうううっ！！ また水ですの！！」

カチッ

「うわわわっ！ ミュウが変な顔にっ！？」

リグレット達とはぐれたミュウとイオンは、二人に合流しようと遺跡内をうろつき回っているのだが、彼らに待ち受けていたのは数々の罠の山。

三歩歩く度に一つの罠を発動させるという見事なハイペースっぷりで、行く手を阻まれまくっている二人。

こんなに膨大な数の罠が仕掛けられている遺跡も凄いが、それらに一つ残さず引っかかるミュウ達もまた凄かった。

おかげで二人の身体は、敵と遭遇したわけでもないのに、すでにボロボロだった。

「いたた……ミュウ、大丈夫ですか？」

「……お腹のズキズキ以外はそんなに痛くないですの」

「そ、そうですか。大したダメージは無い様でなりよりです」

「みゅう……」

必死に何かを隠しながらミュウを宥めるイオンだが、ミュウは納得の行かないといった表情を終止崩さなかった。

「それにしてもこの罾の数は異常ですね。ここまでして遺跡の深部へ人を近づけたくない理由でもあるのでしょうか？」

遺跡に罾が仕掛けられているのは、良くあること……というより『遺跡』と名が付く場所で、何の罾も仕掛けもない方が珍しい。

よって、この『サブドゥア遺跡』もそういう点に関してはちゃんと遺跡している。

しかし、この罾の数は異常過ぎる。それも一つ一つの罾に妥協がない。

もし二人がギャグキャラで無ければ、どれも命を落としかねないという代物ばかりだ。

遺跡に罾を仕掛けるのは『人』だ。それも大半は大昔の人物によって仕掛けられる。

罾を仕掛ける理由としては様々なことが考えられるが、一番ポピュラーな理由としては、その深部に宝、もしくは人に触れて欲しくない物に侵入者を近づけさせない為だと言われている。

「みゅう。もしかしたらミュウ達が探している物を見つけられないのかも知れないですの」

ミュウ達が探している物——第六音素結晶体。

確かに稀少な物ではあるのだが、イオンはミュウの意見に納得を示さなかった。

「それは無いと思いますよ？ 音素結晶体は言わばただの資源みたいなものですし、遺跡の深部に隠すほど物でもないはずです。それに今までの冒険からとも言えることですが、今のソーサリーリングに埋め込まれている音素結晶体って全て偶々発見したに過ぎませんでしょう？」

言われてみればそうである。

現在リングに埋め込まれている四つの結晶体は探そうと思って見つけたものではない。

少々雑な言い方をすれば、偶然落ちていた結晶体を拾ったに過ぎなかったりする。

「みゅうう。じゃあ、なんでこんなにトラップだらけな遺跡なんですかの？」

「うーん……よほど大きなお宝が眠っているのか……もしくは」

「ああ、それはの、この深部に眠っている凶暴魔物を刺激させないためにワシが仕掛けた罠なのじゃ。人が近づくと起きてしまうから」

「あつ、そうだったんですか。なるほど、それならつじつまが——」

「みゅうつ！ 凶暴魔物ですよ？ とっても怖いで——」

「「って、誰ですか（の）っ!？」」

聞き知れぬ第三の声が途中で会話に加わっていることに気付き、ミユウとイオンは慌ててその声の主の方へ視線を移す。

そこには見知らぬ老人が笑みを浮かべながら陽気に手を振っていた。

「わしの名はサブドウア。まあ、名の通り、この遺跡の管理者といったところかの」

サブドウアと名乗った白髪の老人は、ゆっくりとミユウ達の側へと寄ってくる。

見た目からいって年は完全に還暦を越えた老人で、アゴまで伸びた白いヒゲが妙に紳士的な印象を受ける。それが穏和そうな雰囲気を見せている。

そして、この老人の最大の特徴と言えるのは……
言えるのは……

……言っていいのだろうか？

「（イオンさん、イオンさん……この人……）」

「（ええ……足が……）」

「なんじゃ？ わしの足が無いことに関しての内緒話かの？」

「（ぎくうっ！）」「」

老人の最大の特徴——というより、どうしても目に入る点……それはこの人の『足』。

そう——この老人、足が無いのだ。

事故か何かで足を無くしたのか……それとも……

いや、恐らくミュウ達が想像している通りなのだろう。

それを証明するかのように、この老人は足が無い状態で車椅子も無しに近寄ってきたのだから……

「サブドウアさん……幽霊なのですか？」

……相変わらず物凄く正直な性格をしているミュウ。

何のためらいも無く、スゴイことを平然と訊いてきた。

「なぜ……そう思うのかの？」

「足がないからですの」

本当に躊躇いの欠片も感じられないミュウの言葉。子供ならではの純粹さを存分に発揮中な様子だ。

「ふっ、足なんぞただの飾りじゃっ！」

「みゅっ！？ そ、そうだったのですの！？」

「衝撃的な事実です！」

サブドゥアの訳のわからない名言に、予想以上の衝撃を受けた二人。

「いやいやいやいや、冗談じゃから。そんなに間に受けんでくれ」

サブドゥア爺さんが慌てて訂正を施す。どうやら言ってみただけみたいである。

爺さんはコホンと一つ咳払いを入れ、改めて話題を振る間を作った。

「わしの名はサブドゥア」

「さっき訊いたですよ」

「ええ、訊きましたね」

「年は83」

「別に聞いてないですよ」

「ええ、聞いてないですね」

「彼女募集中じゃ」

「どうでもいいですよ」

「ええ、どうでもいいですね」

「幽霊じゃ」

「見れば分かるですの〜」

「ええ、見れば分かりますね」

「ペットはユニコーンじゃ」

「珍しいペットですの〜」

「ええ。珍しいですね」

「実は、遺跡深部で眠っている凶暴魔物とは、その子のことだった
りするのじゃ」

「それは大変ですの〜」

「ええ、大変ですね」

「そうかつ！ わしのペットの暴走を君達が止めてくれるのか！
ありがとう！-」

.....

.....

.....

「」「」「はい？」「」

第27話 サブドゥア（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それと今更ですが、この小説を『お気に入り登録』してくれた方々、本当にありがとうございます。

やっぱり評価して頂けるとモチベーションが上がります！

これからもたくさんの人に満足いただけるよう、更新がんばっていきます。

第28話 ポチ（前書き）

ちよつと早く帰ってこれたから更新も早くしようと思ったのですが、加筆修正に時間を取ってしまい、結局いつも通りの時間に投稿することになりました。

加筆修正しても誤字脱字が減らないのはご愛嬌です。

第28話 ポチ

ミュウとイオン、リグレットとラルゴの二組が大変なことになっている最中、このサブドゥア遺跡に新たな二つの足音が石床を通して響き渡っていた。

「ちっ、なんでこの遺跡は水浸しなんだ？」

ピチャピチャと水溜りの上を歩きながら、アザゼルはぶつぶつと不平を口に出しながら不機嫌そうに歩く。

「……先に入ったものが罨を踏んだのだろうな。この遺跡のトラップの多さは尋常ではないと訊く」

その隣を淡々と歩くのはアモン。

元より口数の少ない二人だからか、必要以上の会話は発生せず、二人の間には沈黙の時間が多い。

そんな雰囲気を感じてか、いつもは言葉少なめのアモンの方がアザゼルに話題を振った。

「……アザゼルよ。私と二人で歩くのは退屈か？」

「いきなり気色悪いこと言っなっ！ 男二人で歩いて何が楽しいっつーんだよ!？」

「……他愛の無い会話でもすれば、新たな何かが芽生えると思わないか？」

「お前、そっち系だったのかああああああっ!!」

アモンの超衝撃的発言に、アザゼルは、ズザザアツツ、と慌てて後ずさりアモンから距離を取った。

「……冗談に決まっている。私はお前と違って女性が好きなのだ」

「俺がそっち系みたいな発言を残すなああああああつ!!」

カチッ

「「んっ?」」

ふと辺りに響く不吉な機械音。

——それが落とし穴作動のスイッチだと気付くのに、コンマ5秒も掛からなかった。

地下広間に潜むアンデットの数もようやく残り半分くらいの数まで消去してきたリグレットとラルゴ。

しかし、それでも目障りなほどの数が残っていることに代わりがない。

「鬱陶しいな……リグレットよ、一気に決めるぞ!!」

「了解したっ!」

二人の間で何かの同意を交わすと、ラルゴは大鎌に力を集めながら技を組み、リグレットは譜術の詠唱を開始した。

先に完成したのは、ラルゴの大技――

「地龍吼破っ！！！」

ラルゴは渾身の力を込めて地面を斬り立てる。

すると、敵を目掛けて真っ直ぐに多数の岩石が巻き上がり、ラルゴの目先に居たアンデット達は迫りあがる岩石の下敷きになった。

ラルゴの持つ技の中で、二番目に範囲の広い技。

しかもただ範囲が広いだけでなく、その威力も絶大なものがある。これで半分以上の敵が地に埋もれたが、それでもまだ敵は残っていた。

そこでリグレットの追い討ちをかける譜術の出番である。

「フラムルージュっ！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオッ！！

円状に地中から吹き上がる火柱……ミュウファイアのような圧倒的な威力はないが、火に弱いアンデット達相手には十分な威力を範囲に渡らした。

直線状に駆けるラルゴの技に加え、円状に広がるリグレットの譜術。

華麗なまでの範囲技の押収。これには完全にどちらか一方の攻撃を受けざるを得ない。

目の前に広がる術後の広間には、あれだけの数のアンデット大群も一匹残らず地に伏せ動かなくなっていた。

――最初からこれをやれば良かったのでは？　とは言っではない。

「思ったよりも時間が掛かったな。まあ、これでようやくミュウ達を探しに行——」

「ぬわあああああつ！！」

ドガッシャ~~~~~ン！！

リグレット達がその場を立ち去ろうとしたその時、突然上空から二つの影が降ってきた。

「ってえな……オイっ！ アモン！ 何で急に床が抜けんだよ！？」

「……この遺跡には膨大な数のトラップが仕掛けられていると言っただろう？ しかも、罠を発動させたのは貴様だ」

「なんでそう言い切れるんだよっ！？」

「……私は罠を発動させるようなヘマはしない」

「俺だつてしねえよ！！」

「……自覚のない奴は皆そう言っ」

——突然リグレット達の目の前に振ってきたアザゼルとアモン。リグレット達が啞然とする中、二人の漫才はいつまでもやり止まなかった。

「リグレットよ……確かあいつらは……」

「ああ……ヴァーゲストの側近達だ……」

ラルゴとリグレットは目の前の喧嘩を呆然と眺めながら、それぞれ確かめ合うように言葉を掛け合った。

「（あ）ん？」

その声に気付いたのか、アザゼルとアモンは怪訝そうな顔をしながらリグレット達の方へ視線を移す。

そしてアザゼルの表情が一気に驚愕なものへと豹変する。

「ああ〜っ！！ てめえ……あの時の金髪女っ！！」

いつぞやの樹海以来の、望みもしなかった再開にリグレットは小さく舌打ちをすると、彼女は白々しくこう言い放った。

「誰だ、お前は？ 私はお前など知らないが……人違いではないか？」

天を見ながらなるべく相手と目を合わせないように話すリグレットに、アザゼルは怪訝そうな表情のまま次のような言葉を出した。

「ちっ、人違いかよ。だったらてめえらなんかには用はねえ——」

アザゼルは敵意と殺意を押さえ込むように下を俯いてその表情を

隠す。

……が、それは更に殺意を膨らませる默示に過ぎなかった。

「——なんて言うとも思ってたか？」

フェイスマスクのせいでその表情は伺えないが、リグレットに恐ろしいほどの殺意を向けていることは確かだった。

よほど、あの樹海での出来事が屈辱的だったのだろう。

そして、いつの間にかその両手には黒装の大槍が握り締められていた。

「お前にはミュウと同じ匂いを感じたから少し試してみたんだけど、でも、さすがに引つ掛からなかったみたいね」

相手が相手だけに少々危険な試み、結果的にもアザゼルの怒りを増長させるだけとなってしまった。

そしてこの発言もアザゼルを憤怒させるキツカケとなってしまう。

「ミュウって……あのみゅうみゅう鳴いてたサルのことか！？ ……てめえ、俺がサルと同じ体臭だって言いてえのか！？ こう見えても毎日の朝シャンで気を使って洗ってんだぞ！！」

多少——いや、かなり意味を取り違えたアザゼル。おかげでシリアス度が二十%下がってしまった。

この発言にリグレットやラルゴもちろん、味方のはずのアモンにまで呆れられていた。

「（やはりミュウと同レベルだな……）。こちらは先を急いでいる身だが……仕方ない、相手をしよう。易々と逃がすつもりもないのだろう？」

言いながら、リグレットも二丁の譜業銃を構え直す。彼女もアザゼルに負けず劣らず鋭い眼光を向けていた。

「よく分かってんじゃねえか。おい、アモン！ 絶対に手え出すんじゃないぞー！」

「……それだと私が暇になるじゃないか」

思いつきり手を出す気満々だったアモンはつまらなそうに顔を顰める。

「知るかよっ！ その辺で適当に遊んでろー！」

拗ねるアモンに叱咤するアザゼル。傍からみると本当に愉快なコンビだった。

「では、俺が貴様の暇つぶし相手になってやっても良いが？」

今まで空気みたいに存在感を消していたラルゴが、ここぞとばかりに前に踊り出た。

リグレットやアザゼルみたいな表面的な敵意は見せていないが、その瞳の奥に沸く闘志をアモンは見逃さなかった。

「……なかなか面白そうな余興であるな。是非ともお相手を願いたい」

アザゼルとは対照的に紳士的な態度で応じるアモン。そしてラルゴの返事を待たずにその手には小斧が握り締められていた。

憎さを殺意に変えて武器を向けるアザゼルに、目の前の好敵手に

善戦を期待しながら胸を震わすアモン――

「いくぞっ――！」

「……覚悟っ！」

それぞれの思いを胸に、今戦いを告げる合図が地下広間に響き渡った。

「たのむううううっ――！ わしのユニコーン――『ポチ』の暴走を止めるのも、そろそろ限界なのじゃあぁっ――！」

年甲斐もなく、大粒の涙を流して必死に縋りつくサブドウア爺。どうやらこの老人の紳士な部分は、顔つきだけみたいである。

「ユニコーンなのに、名前ポチですの？」

「王道すぎて、今は犬にも名付けない名前ですよ」

一方、泣きじゃくっているサブドウア爺を尻目に、ミュウ達の関心は別のところに向いていたみたいであった。

「頼むからスルーせんでくれええっ！ こっちは真剣なんじゃあぁあっ――！」

ついには泣きながら腰にしがみついて来たサブドウア爺。
しかもイオンの腰ではなく、なぜかミュウの腰に……

「みゅうううっ！ 泣きながらしがみ付かないでくださいですよ〜
〜！！」

腰にしがみつかれたことにより、完全に動きの自由を奪われたミュウ。

試しに足をバタつかせてサブドウア爺の顔を蹴ってみるが、彼はモロともしない。

むしろしがみつく腕に、更に力が注がれている気がする。

「このままではポチが心配で成仏も出来ん！ どうか……どうかこの
の古いぼれの最後の願いを訊いてくれええええっ！！」

「みゅうううっ、分かったですよっ！ 分かったからその手を離
してくださいですよ〜っっ！！」

サブドウア爺の必死さと、老人が持つ独特な気色悪さを存分に発揮された見事な説得術で、ついにあのミュウから承諾を得ることに成功させた。

イオンはもともサブドウア爺の頼みを受け入れるつもりだったのか、特に表情を崩してはいない。

「そっかつ！！ ありがとおおおっ！！」

一人で失意のどん底から歓喜の頂点に沸きあがるこの老人。
喜怒哀楽が激しいにも程がある豹変っぷりである。

「ユニコーンは知性が高い魔物です。まず説得を試みることから始

めてみましょう」

「そのユニコーンは今どこにいるのです?」

「地下のどこかにいるはずじゃ」

ようやくやる気を出し始めたミュウの質問に対し、えらくアバウトな返答をするサブドウア爺。

「でも、とりあえずリグレット達と合流することを優先に動きましよう。さすがに僕達だけではユニコーン相手には力不足です」

「みゅっ! ……と、いうわけでサブドウアさん。ユニコーン説得はリグレットさん達と合流できた後に——」

「じゃ、早速行って来てくれ。ポチっとな」

ミュウのセリフを割り込みサブドウア爺は勝手に話を進めると、彼は壁に備え付けられていたスイッチを躊躇無く押した。

パカッ

「「えっ?(みゅ?)」「」

サブドウア爺が押したスイッチ——それはこの遺跡ではもうお馴染みの『落とし穴』の罠を作動させるもの——

その罠の上に居たのは……ミュウとイオンの二人。

「みゅうううううううう」

「うわあああああああつ」

二人がサブドウア爺を制する言葉よりも早く、この老人は勝手に地下へと落とす罫を発動させてしまい、ミュウとイオンは抵抗する術もなく二人の悲鳴が辺境に轟く雷声となりながら、遙か地底の彼方へと落ちていった。

「頼むぞ若者達よ。もはや、ポチの暴走を止められるのは君達しかない………たぶん」

最後に何か余計な一言を残しながら、勝手に落とし穴を発動させ、二人を地下へ送り届けたサブドウア老。

彼は二人に命運を託す気持ちを届けるために両手を合わせ、ひたすら祈りを捧げていた。

「アーメン」

その祈りはいつの間にか不吉な方向へと変わっていたのは、ご愛嬌ということにしておこう。

「うわあああああああつ!!」

「みゅうううううううつ!!」

この遺跡の地下はかなり深部まで続いているのか、二人に課せら

れた落下時間は想像以上に長かった。

そして身体へ伝わる加速度が最高点に達した時点で、ようやくミユウとイオンの視界に落下運動の終着点が見えた。

ドゲゴンっ！！

サブドウア爺の勝手な判断で地下へと落とされた二人は、リグレツト達みたいに綺麗な着地を決めることは出来ず、思いっきり尻餅をついてしまっていた。

しかし、長い時間を費やしてかなりの重力加速度がついていたはずなのに、意外にも二人の身体に掛かる反動は小さくて済んでいた。何かお尻の下にフワフワした感覚が伝わってくるが、とりあえず気にしないことにしておこう。

「ふう〜……ミユウ、大丈夫ですか？」

「みゅっ！ ミユウは平気ですの〜」

片手を上げ、満面の笑顔を向けるミユウ。見る限りミユウとイオンの二人は全くの無傷である様子を伺えた。

受け身など全く取っていなかったはずなのに、自分達が無傷であることを懸念に抱くイオンだったが、ミユウの無邪気な笑顔を見たら、まず無事であることを喜ぶべきだと思った。

「みゅうう……ここはどこですか？」

自分の置かれた状況を確認するかのように、ミユウは辺りをキョロキョロ見渡しながら問う。

目の前に広がる地下大広間の光景。それはただ何も無い空間が無意味に広がるのみ……

何もないということは、リグレット達やアザゼル達が落ちた広間とは別の場所だということを意味していた。

「どうやら地下部屋のどこかに落とされたみたいですね。見た限り、ここは大広間の一室のようですが……」

「みゆうう、近くに魔物が居なくて良かったですね」

そう、不幸中の幸いと言うべきか、リグレット達が落ちた大広間とは違い、ミュウ達が落ちた部屋には魔物の待ち伏せはなかった。

「そうですね。でも油断してはいけませんよ？ 地下のどこかに凶暴なユニコーンがいるはずですから」

「みゆううっ！ そうでしたの。ユニコーンに遭遇する前になんとかリグレットさん達……と——」

何故か言葉途中で表情を引きつらせながら硬直状態に陥ったミュウ。

顔色が極端に悪くなっているミュウ。何か見てはいけないものを見てしまったかのように……

「……？ ミュウ？ どうかしま——」

ミュウの視線を辿った先に移った珍物。それが目に入った瞬間、イオンの身体も硬直した。

二人の視線——それは彼らの真下に注がれていた。

『それ』を見た瞬間、なぜ自分達が落下による衝撃が皆無だったのか、そして先ほどから心中で疑問に感じていた、お尻に伝わってくるフワフワした感覚の正体は何なのか……すべての疑惑が解決に

至った。

「ようやく俺の存在に気付いたか……愚かな人間と小動物よお？」

『それ』が人の言葉を紡ぐ。淡々とした口調の奥底に怒気が感じられるのは気のせいではない。

「あは……は……も、もしかして……ユニコーンのポチ……さん……ですか？」

恐怖で言葉を震わせながら恐る恐る自分達の『尻の下』で潰れている住人に呼びかけるイオン。

なぜ、眠っているはずのユニコーンが起きているのか……なぜ、自分達がそのユニコーンを潰すような形で尻に敷いているのか……自分達がユニコーンの眠っていたねぐらの真上に降ってきてしまった……そう考えれば全てのつじつまが合う……合ってしまう。

「とりあえず……俺の上からさっさとどけや、ゴラアアアアアアアアアッ……！」

「みゅううううっ……！」

「うわわあああっ……！」

ユニコーンの『ポチ』の咆哮により、慌ててその場を飛び退くミウとイオン。

前言撤回。二人は不幸中の幸いどころか、不幸中の不幸の渦中に飛び込んでいたみたいであった。

第28話 ポチ（後書き）

見てくれてありがとうございます！

私事ですが風邪をひいてしまったみたいです（泣

せつかくの3連休が待っているのに……

こうなったら意地でも今日中に治したいと思います！

風邪が長引いても更新は必ずしますので。

第29話 二つの大広間。三つの戦い（前書き）

今回は久しぶりの戦闘回です。

日常回も楽しいけど、やはり書いていて楽しいのは戦闘です。

第29話 二つの大広間。三つの戦い

【大広間A ～リグレットside～】

アザゼルの武器は黒色に染められた長槍。しかし、彼の武器はそれだけではない。

「唸れ爆炎…… フレイムバーストっ！」

アザゼルの戦闘長所であり、相手にとっては鬱陶しいことこの上ないのが、この譜術攻撃である。

突き出された両手の中心に描かれた譜陣から強烈な威力を誇る火球が猛スピードで飛翔し、リグレットを襲う。

これは以前、ウイングで逃げるミュウに向けて放ったものと同じ譜術。その威力と命中率はすでに実証済みだ。

しかし、その剛速球に臆することもなく、リグレットは冷静に迫る火球をサイドステップでかわした。

そして即座にアザゼルの方へと銃を向けるが、彼はすでに次の行動へと移っていた。

先ほどの譜術はリグレットに気を反らさせる為の布石。アザゼルはその間に大きく前方へ飛翔し、リグレットとの間合いを一気に詰めていた。

「岩碎烈迅槍っ！」

押し出し効果を持つ射程の長い刺突攻撃技。瞬迅槍に多段攻撃を追加した技だと思ってもえれば分かりやすいかもしれない。

彼の戦闘スタイルは遠近両立タイプ、譜術もそうだが、彼の長槍

から放たれる槍技にも注意を向けなければならない。

アザゼルの槍技がリグレットの眼前に迫る。常人ならまずかわせない。

しかし、リグレットの譜術詠唱はすでに完成されていた。

「デイベインセイバーっ！」

放たれた譜陣はアザゼルを中心に描かれる。彼を中心に円状に広がる雷撃が外周から内周に向け、その中央へと襲ってくる。

雷撃は今こそは拡散されているが、そのすべてがアザゼルの居る中央に向かって走ってきている。

この雷撃をすべて喰らえばさすがに好ましくない結果が待っていることは容易に考えられる。

アザゼルは仕方なく技を止め、大きな跳躍で敷かれた譜陣の外へと脱出する。

バンバンバンっ！

そしてリグレットはアザゼルが着地するタイミングを見計らって銃弾を乱射した。

「ちっ……っ！」

小さく舌打ちを漏らしたアザゼルは、起用に長槍を唸らし、その銃弾の全てを受け流した。

「思ったよりも出来るみたいね。認めたくはないが、さすがヴァーゲストの側近を務めるだけのことはある」

リグレットにしてみたら最後の銃弾攻撃で致命傷は射止めたと思

ていたのだが、その期待が悪い意味で裏切られたことでアザゼルの
実力というものを再認識できた。

「ちっ、いちいちヴァーゲスト様の名前なんかを引き合いに出さな
けりゃ、素直に褒めることも出来ねえのかよ、てめえは……」

対するアザゼルは終止不機嫌そうな表情を崩さず、皮肉を交えた
言葉を返す。

超越された実力者同士の戦闘の序奏は、互いの実力を認めざるを
得ないハイレベルな交戦となり、場の緊張感は更に膨れ上がってゆ
くのであった。

【大広間A ーラルゴside ー】

ラルゴが大鎌を構えている間に、アモンも両腰に備わっていた武
器を構える。

アモンの武器は少々歪な片手斧、それも二刀だ。

しかし小柄なアモンには、それが妙にフィットしているように見
えた。

巨漢と小柄の二人の男が対峙する。体系からしてラルゴに分があ
るように見えるが、アモンが放つ独特なオーラは、ラルゴの心中に
小さな緊張を誘うものが見受けられた。

しばし、互いに様子を伺うかのようなにらみ合いが続いていたが、
不意に沈黙の均衡が破られる。

先に動いたのは、アモン。
いや、動いたというより……目の前から消えた。

「……弧月閃っ！」

「なっ……！？」

キーン、キーンっ！

高速移動——いや、頭に『超』を付けても過言ではない素早さでラルゴの背後に回り、華麗な高速二連撃を繰り出してきた。

完全に不意を付かれてしまったラルゴ。避ける間も無くそのまま背中を切られてしまい、技の勢いに押されて数メートル吹き飛ばされた。

倒れはしなかったが、完全に体勢を崩されてしまったラルゴ。その様子を好機と見てか、アモンは更に追い討ちを掛けた。

「……魔神月詠華っ！」

弧月閃の追撃効果にコンボを繋げ、アモンは大きな衝撃波と共に綺麗な三日月を描くかのような切り上げの斬音を立てた。

ラルゴの黒衣の布地からは綺麗な切れ目が見えている。それは敵の超スピードに対し、ガードに追い付いていないことを意味していた。

「ちいっ……」

ラルゴは舌打ちを漏らしながら、再び体勢を立て直す。
アモンも警戒の為か足を止めて様子を伺っていた。

そしてラルゴは細い目を更に鋭くし、威圧感溢れる眼光で相手を睨みつけた。

「火竜爪っ！」

ラルゴは大鎌に炎を帯びさせた切り払いを広範囲に涉らせた。

……だが、発生はかなり遅い。その遅さは『スピード』を専門とするアモン相手には致命的だ。

眼前に迫る炎の鎌を大きな跳躍でかわすと、アモンはそのままラルゴの真上へと飛翔する。

跳躍の勢いを利用しつつ、ラルゴに攻撃を繰り出すという算段のようである。

——しかし、ここで跳躍してしまったのがアモンの大きなミスとなった。

ラルゴは口元を緩ませ、視線を真上に向ける。

「さすがのお前も空中に飛んでしまったら、動きも加速出来ぬであらう？」

不敵な笑みを上げ、ラルゴの大鎌がここで初めて敵の身体を捕らえた。

そして――

「炎牙爆砕吼っ！」

相手を掴んだ大鎌に爆発的な炎を漂わせる。先ほどバジリスクの身体をも溶かした捕捉型溶解術。

「…………ぬんっ！」

そのままアモンの身体も熱で溶かす……………と思いきや、彼は身体を起用に半回転させると、ラルゴの鎌を踏み台にしてそのまま後方に飛翔し、大きく間合いを取った。

「ほう……………あの技を逃れることが出来たのはお前が初めてだ……………しかも無傷ではな……………」

「……………無傷なのは貴行も同じであろう。やはり私が見込んだとおりの猛者であったな」

そう——今までの戦闘の流れを見ればアモンが圧倒しているかのように見えるが、ラルゴは相応的なダメージを負っていなかった。衣服こそは破れているが……………

六神将の中でも一・二位の防御力を誇るのがこの黒獅子ラルゴ。彼を地に付けるのは小技主体のアモンには至難の業だった。

大技主体のパワーファイターラルゴに、小技主体のスピードタイプアモン。

隣で戦っているリグレット達と同じく、こちらの勝負の行方も現状では全く伺うことは出来なかった。

【大広間B 〽ミュウ&イオンside 〽】

「と、とりあえず……ユニコーンさん？ 落ち着きましょう！ 落ち着く所から始めましょう！」

グルルルつと気性の悪い犬みたいな唸りを上げているユニコーンに、イオンが何とか宥めようと賢明に言葉を掛けていた。

「みゅー、ユニコーンにしては随分怒りんぼな魔物ですよ」

——そして何も考えてないミュウは、折角のイオンの説得を台無しにするような一言を平然と口にしてしまう。

そんな平然としたミュウの態度に、ユニコーン『ポチ』の怒りは更に増長された。

「せっかく気持ちよく寝ていたのに……あんな起こされ方されて怒らない奴がいるかあああああああつー！」

「うわあああああつー！」

ユニコーン『ポチ』が怒りの咆哮を上げると、ミュウとイオンは驚きと恐怖で後ずさった。

ユニコーンは知性が高い。人間語以外にも多種族の言葉を発することもできる。

なので高貴で神聖な魔物——というのがユニコーンに対する一般的なイメージであるが、少なくとも目の前にいるポチには微塵にもそんな印象は受けなかった。

言葉を変えるなら、『気性の荒い暴れ馬』……もしくは、『馬化したアザゼル』と言った所か……

「と、とりあえず、落ち着いてください！ 僕達が眠りから覚まさせてしまったことは謝ります！ で、でも、わざとではありません！ どうかそこだけは誤解しないでください！」

冷や汗を背中に浮かべながら、イオンが再び必死な弁明を施した。するとポチの表情が少しだけ和らいだようにみえた。

「なるほど……な。まあ言葉に偽りは無さそうだ。そういうことだったら特別に許してやってもいい」

意外にもイオンの必死な説得と弁明が功を奏し、許しを得ることに成功した。

その言葉を訊くと、二人の顔に安堵が浮かぶ。

「みゅうう、ポチさんありがとうございますの〜」 サブドゥアさんが言っていたよりも全然優しい——」

「……待て」

『サブドゥア』の名を出した途端、ポチの表情が再び曇った。

「お前ら……ひよつとするとサブドゥアの関係者か？」

明らかに場の空気が戻ったのを感じられる雰囲気。その証拠にポチの表情が、誰が見てもよろしくないものへと変わっていた。

とりあえず、イオンが代弁してその質問に答える。

「ええ、ついさっきサブドゥアさんと知り合ったばかりなのに、有無を言わずに落とし穴で——」

「……殺す」

「へっ？（みゅ？）」「」

いきなり不穏な言葉を発せられた気がした二人は、恐怖よりも先に驚きが先行してしまっていた。

「サブドウアの関係者なら話は別だ！！ お前ら二人共、死刑決定だ！ オラアアアアアアッ！」

「何故！？」「」

何が気に食わなかったのか、急に態度を180度反転させるポチ。二人が事情を尋ねるよりも先に相手は重い腰を上げ、完全に臨戦態勢へと入ってしまったていた。

「……あっ！？」「」

ポチが臨戦態勢に入るため立ち上がった瞬間、ミュウとイオンの視界の先に『ある物』が飛び込んできた。

優雅な白い細胴の頭先、そこには金色に輝く球体がネックレスのように括られていた。

一目で分かった。あれこそがミュウ達が探して求めている第六音素結晶体であることを……

なぜ、このユニコーンはサブドゥアの名を出した途端に激怒したのか……

なぜ、このユニコーンが第六音素結晶体を持っているのか……
なぜ、このユニコーンはこんなにも殺る気満々なのか……

訊きたいことは次々と山のように湧いてくる。しかし――

「グルルルルルル~~~~っ!!」

でも相手がこの様子では、悠長に質問タイムを設けてくれるとは思えない。

その姿は優雅なイメージのユニコーンとは程遠い。近づくもの全てを拒むといった威圧感はおーラとして全面に出ている。

しかし、我らがイオン様はそれでもまだ説得を諦めない。

「ポ、ポチさん？　どうか気を抑えて！　そ、そうだ！　全て無かったことにしましょう！　僕達が貴方の上に落ちてきて眠りを覚まさせてしまったことや、僕達がサブドゥアさんの関係者であったことなどを綺麗サッパリ忘れて、再び眠りにつくんです！」

「それ、そっちに物凄く都合良い展開だろ!？」

「そして、その間に貴方が身につけている第六音素結晶体をこっそり拝借させてもらえば、全ては万事解決だと思いませんか!？」

「思つかあああああああああああああああああつ！
」

かなり無茶苦茶な『説得』に対し、力の限り腹の底からツッコミの絶叫を返すポチ。

「くっ……すいません、ミュウ。説得に失敗してしまいました」

「みゅう……とっても惜しかったですの」

「ちつとも惜しくねえだろうがああああつ!!」

今度はミュウも加わったポケポケ会話に、ポチは再度ツッコミの絶叫を上げた。

「くそっ！ お前らのペースにハマッて段々と戦意が失せてきたじやねえか……」

凶暴ユニコーン『ポチ』も二人が醸し出す和み系のオーラに感染してしまったのか、少々消沈気味の発言を口にした。

その発言に付け込むように、ミュウとイオンは怒濤の説得ラッシュを試みる。

「じゃあ戦いなんてやめるですの。それで全て万事解決ですの」

「そうですよ！ このような無意味な戦いが起こるから、世の中に戦争が絶えないのです！」

「だあああつ！ お前らもう喋るな！！ 無意味だろうが何でもいい！！ サブドウアの関係者は有無を言わずに死刑だと俺が決めているんだよ!!」

ポチが乱暴にそう言い放つと、胸に溜まったイライラを吐き出すように光ブレスを放ってきた。

「みゆうつ!？」

「うわわっ！！」

ミュウとイオンは慌てて回避行動に移る。迅速な対応と反応が素早かったのが功を奏し、二人は眼前の所でブレスを避けることに成功した。

だ
が

ズガアアアアアアアアアアアアアアアア
ンっ！！

「...つ！？」

プレスをかわしたことにより、激しい炸裂音と共に後方の石壁が粉々に碎け散っていた。

これも第六音素結晶体の潜在力が成す業なのか、その威力は計り知れない。以前戦ったアイスリザードのプレスなど比にならないほどだ。

もしアレをまともに受けてしまったらと考えると……駄目だ、考
えるだけで恐ろしい。

神秘の聖獣ユニコーン。

ポチはその一般的なイメージから大きく外れているとはいえず、その強さはユニコーンのイメージにそぐう堂々たる貫禄を見せ付けていた。

ユニコーンの特徴と言えば、攻守共々においての能力の高さ。全属性に対する魔法耐性力持つ中、物理防御においても光る物を持つているという……まさに防御に置いては死角無しである。

それ以上に厄介なのが、圧倒的な威力を誇るその攻撃力。

先ほどのプレスを見て分かる通り、その爆発的な威力は実証済みだ。

それに加えて、今のポチは第六音素結晶体の力を得ている状態だ。先のアイスリザードと同じように、何らかの特殊な能力を持つていても不思議ではない。

「仕方ありません。ミュウ、ここは僕達だけで何とか切り抜けるしか無いみたいです」

イオンは『仕方ない』とか言っているが、その原因を作ったのは自分達だということを完全に棚に上げていた。

「みゅうう……怖いけど……やるしかないですよ〜！」

弱気な発言を漏らしながらも、ミュウはようやくやる気を出したみたいである。

一時前のミュウだったら考えられない心境の変化だ。これも戦闘慣れしてきた証拠だろうか……

「行きますっ！」

そう高らかと宣言し、動きにフェイントを交えながら前線に飛び出すイオン。

しかしポチはイオンの動きに惑わされることなく、冷静にその動

きを目で追っていた。

だが、目で追うだけで決してその場から動かない。
そのあまりもの不穏さにイオンの内心には警戒の色が走る。
しかし、ここで攻撃を止めては意味が無い。

「爆撃掌っ！」

入魂の一撃を込めたイオンの掌底が、ポチの白色の身体を目掛けて放たれる。

——それでもポチは動かない。

ドゴンッ！！

鈍い音が一室全体に轟いた。

あまりにも簡単に、イオンの技は完全な形で入っていた。
入ったいたのだが……

「効いてないっ！？」

本来ならばダウン効果があるこの技。しかし、あれほど綺麗に入
ったというのにポチの身体はビクとも動かなかった。

「ふんっ！ やはり、人間という生物は非力だな。その程度の力で
高貴たるユニコーンに立ちあはだかろうなど——」

「うい~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ん
ぐっ！！！」

「——なっ！？」

力を放つ恐ろしいコンボだ。

——常人ならば……

「みゅみゅっ!？」

「そ、そんなっ!？」

目の前の光景に驚愕に浸る二人。

そう——ポチはあの必殺コンボを受けてもまだ倒れなかったのだ。

第29話 二つの大広間。三つの戦い（後書き）

見てくれてありがとうございます。

戦闘……というよりは技の応酬といった感じになってしまいました。
まだまだ文章力が足りないなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3028z/>

テイルズオブジァビス 【ミュウの異世界冒険記】

2012年1月7日12時52分発行